續國譯漢文大成

文學部　七十二

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部 第七十二册（第十八帙の四）

王右丞集の三

吉田徃郎氏 寄贈本

309
65

王右丞集　卷十一

近體詩　二十七首

奉和聖製慶元元皇帝玉像之作。應制

聖製、元元皇帝の玉像を慶するの作を奉和す、應制

明君夢帝先寶命上齊天。　明君帝先を夢む、寶命上天に齊し、
秦后徒聞樂周王恥卜年。　秦后徒らに樂を聞き、周王年を卜するを恥づ、
玉京移大像金籙會羣仙。　玉京大像を移し、金籙羣仙を會す、
承露調天供臨空敞御筵。　露を承けて天供を調へ、空に臨んで御筵敞たり、
斗廻迎壽酒山近起爐煙。　斗廻りて壽酒を迎へ、山近くして爐煙起る、
願奉無爲化齋心學自然。　願はくは無爲の化を奉じて、齋心自然を學ばん、

【注解】夢帝先、皇帝の祖先を夢に見るなり、『通鑑』に、開元二十九年、玄宗、玄玄皇帝が夢中に來り告げて云ふ、吾に像あり、京城の西南百餘里に在り、汝、人を遣り之を求めよ、吾當に汝と興慶宮に相見ん、玄宗、使を遣り之を盩厔樓觀山間に求め得たり、

夏閏四月、迎へて興慶宮に置き、五月、玄玄の眞容を畫くを命じ、諸州の開元觀に分置す、秦后、『史記』に、趙簡子、疾病なり、扁鵲入りて視て曰く、血脈治まれり、昔秦の繆公嘗て此の如し、七日にして寤めて曰く、我、帝の所に之き甚だ樂しむ、百神と鈞天に游び、廣樂九奏萬舞、三代の樂に類せず、周王、『左傳』に、周の成王、洛邑を經營し、郟鄏に鼎を定む、世を卜すること三十、年を卜すること七百、天の命ずる所とあり、金鈒、『隋書』に、道經とは其の潔齋の法を云ふ、黃籙、玉籙、金籙、童炭等の齋あり、『唐六典』に、齋に七名あり、其の一を金籙大齋と曰ふ、陰陽を調和し、災を消し、害を伏し、帝王、國王の爲め、祚を延べて福を求む、無爲化、『史記』に、李耳、無爲自から化し、清淨自から正し、齋心、『列子』に、黃帝退きて大庭の館に閒居す、齋心服形とあり、自然、『老子』に、人法ㇾ地、地法ㇾ天、天法ㇾ道、道法二自然一とあり、

【題義】　玄宗が老子の玉像を求め得て、之を宮中に祀りて自ら詩を賦して示されたるに和して此の詩を作る、

【大意】　明君は帝王の祖先たる老子を夢む、其の帝先の寶命は上天と齊しく高し、秦后が嘗て天樂を聞きしことも之に比すれば劣る、周王が子孫永續の年を卜したることも、之に比すれば下る、玉京に大像を移し來り、羣仙をして金籙を師せしむ、其の祀るに露を以て供饌を調理し、天空に臨んで御鑾あることを敞明にす、北斗は廻りて此の壽酒を迎へ、終南山は近くして盧煙を起す、我も願はくは無爲の化を信奉して、潔齋の心を將て自然の道を學ばん、

【餘論】　是五排の正體、唐、此の法を以て士を試す、是の故に應制、應教、必ず此の體を以て作る、布置序ありて、首尾一貫するを尙ぶ、此の篇を精讀するときは、良に次序整然、大家の技倆を見るに足る、天複字あるは、排律として最も忌む、小疵と謂ふべし、唐は乾封元年を以て、老子を太上元元皇帝と追號せしなり、『全唐詩』に、玄宗が此の題の詩無し、散逸せしものと考ふ、

奉和聖製與太子諸王三月三日龍池春禊應制

聖製、太子諸王と三月三日龍池春禊に奉和す、應制

故事修春禊。新宮展豫游。　故事春禊を修し、新宮豫游を展ぶ、
明君移鳳輦。太子出龍樓。　明君鳳輦を移し、太子龍樓を出づ、
賦掩陳王作。杯如洛水流。　賦は陳王の作を掩ひ、杯は洛水に流るるが如し、
金人來捧劍。畫鷁去廻舟。　金人來りて劍を捧げ、畫鷁去つて舟を廻らす、
苑樹浮宮闕。天池照冕旒。　苑樹宮闕に浮び、天池冕旒を照す、
宸章在雲漢。垂象滿皇州。　宸章雲漢に在り、象を垂れて皇州に滿つ、

【注解】　故事、故昔より傳ふる事、春禊、『廣韻』に禊祓は不祥を除くなり、和語に「ミソギ」と稱す、『韓詩』に曰く、三月桃花水下の時、鄭國の俗、上巳を以て、溱洧の上に於て、蘭を執り、魂を招き、魄を復ぎ、不祥を祓祓するとあり、『晉書』に、魏より以後、

但三日を用ひ、上巳を以てせずとあり、然れども祓禊は三月三日、秋禊は七月十四日に修するを普通と爲す、新宮、新築の宮觀にても通ず、諸王の事と見ても通ず、鳳輦、唐制に、鳳輦に七種あり、煩なれども記す、一大鳳輦、二大芳輦、三仙游輦、四小輕輦、五芳亭輦、六大玉輦、七小玉輦、太子、後の高宗なり、陳王、魏の曹植、字は子建、陳王と爲る、思王と謚す、鄴に銅雀臺新に成る、曹操、諸子と同じく臺に登り、各の賦を作らしむ、思王先づ成る、洛水、晉の武帝、華嶽に三日曲水の義を問ふ、摯虞へて曰く、漢の章帝の時、平原の徐肇、三月の朔を以て三女を生む、三日に至りて俱に亡す、郡人以て怪と爲し、乃ち相率ひて之を擲へ、水濱に至り洗祓す、途に水に因つて以て觴を泛ぶ、其の義此に起る、帝曰く、必ず所談の如くなれば、復ち好事にあらず、東晳進んで曰く、華嶽小生、以て知るに足らず、臣請ふ之を言はん、昔周公、洛邑を卜成す、流水に因つて以て酒を泛ぶ、故に逸詩に云ふ、羽觴隨ひ波と、金人、秦の昭王、三月上巳、河曲に霍酒す、金人あり、東より出で、水心の劍を奉じて曰く、君なして西夏を制有せしめん、乘、諸侯に羈たるに及んで、乃ち其の歳に因つて立つて曲水を爲る、二漢相緣つて盛集を爲す、雀鷁、鷁は水鳥、巻く翔りて風を長れず、故に其の形を船首に畫く、

【題義】玄宗が三月三日に龍池に太子及び諸王と會し、春禊を修し、詩を賦し、羣臣に和せしむ、右丞、乃ち此の和詩あり、

【大意】故き事を追うて春禊を修め、新宮と共に豫樂の游を展べ玉ふ、明君は鳳輦を移し、太子は龍樓を出で玉ふ、賦は陳思王の作を掩壓し、杯は洛水に流して滿つ、金人は來りて劍を捧げ、雀鷁は去つて舟を廻らす、苑樹は宮闕を高く出でて浮ぶが如く、天池は水清うして曇旋を照す、皇帝の作は雲漢に在りて高く、佳象を垂れて皇州に滿てり、

【餘論】應制の作、天子の德を稱揚するが主なるを以て、辭を以て貴しとし、氣を以て貴しとせず、是の故に千篇一律の恨あり、右丞と雖も、亦此の域を脱する能はざるなり、

奉和聖製上巳於望春亭觀禊飲應制

聖製、上巳望春亭に於て禊飲を觀るを奉和す、應制

長樂青門外、宜春小苑東。　長樂青門の外、宜春小苑の東、
樓開萬戸上、輦過百花中。　樓は開く萬戸の上、輦は過ぐ百花の中、
畫鷁移仙妓、金貂列上公。　畫鷁仙妓を移し、金貂上公を列す、
清歌邀落日、妙舞向春風。　清歌落日を邀へ、妙舞春風に向ふ、
渭水明秦甸、黃山入漢宮。　渭水秦甸に明かに、黃山漢宮に入る、
君王來祓禊、灞滻亦朝宗。　君王來りて祓禊す、灞滻亦朝宗す、

【注解】望春亭、『唐書地理志』に、京兆府萬年縣に、南望春宮あり、滻水に臨む、西岸に北望春宮あり、宮東に廣運潭あり、仙鈴、『唐詩品彙』に、仙仗に作る、妓を可とす、金貂、『隋書禮儀志』に、武冠、今、左右の侍臣、及び諸將軍、武官通じて之を服す、侍中常侍は則ち金紫を加ふ、插むに貂尾を以てし、黃金を飾と爲す、上公、『晉書職官志』に、太宰と太傅と太保、皆、上公と爲す、所謂天子太子の師傅、位、三公の上に在り、之を上公と謂ふ、灞滻、關內に八水あり、一涇水、二渭水、三灞水、四滻水、五潏水、六潦

水、七澨水、八流水なり、瀙水も義水も共に藍田谷より出づるなり、朝宗、『禹貢』に江漢朝宗于海とあり、孔安國云ふ、二水北の州を經て海に入る、朝するに似たるあり、百川、海を以て宗と爲す、宗は尊なり、百川は諸侯に譬へ、海は天子に譬ふ、諸侯は皆天子に朝宗するなり、

【大意】長樂宮青門の外と、宜春小苑の東と、樓閣は皆萬戸の上に開き、鳳輦は百花の中を通過する、而して畫鷁には仙妓を移乘せしめ、金貂の冠を著ける上公も列する、仙妓の清歌は落日を邀へ、仙妓の妙舞は春風に向ふ、渭水は秦甸を環流して明かに、黄山は漢宮城内に入る、君王親臨して祓禊すれば、天下の諸侯も亦朝宗する、

【餘論】此の詩も、應制としての作、清麗と評するのみ、萬戸上、上公、小疵たるを免れず、結句の宗、今二冬の韻として用ふるが、一東として通韻妨げざるものの如し、

奉和聖製幸玉眞公主山莊因題石壁十韻之作應制

聖製、玉眞公主が山莊に幸し、因つて石壁に題する十韻の作を奉和す、應制

碧落風煙外。瑤臺道路賒。
碧落風煙の外、瑤臺道路賒なり、
如何連帝苑。別自有仙家。
如何ぞ帝苑に連り、別に自から仙家有る、
比地廻鑾駕。緣溪轉翠華。
地を比へて鑾駕を廻らし、溪に緣つて翠華を轉す、
洞中開日月。窗裏發雲霞。
洞中日月を開き、窗裏雲霞を發す、
庭養沖天鶴。溪流上漢槎。
庭は天に沖する鶴を養ひ、溪は漢に上る槎を流す、
種田生白玉。泥竈化丹砂。
田に種ゑて白玉を生じ、竈を泥して丹砂を化す、
谷靜泉逾響。山深日易斜。
谷靜にして泉逾よ響き、山深うして日斜なり易し、
御羹和石髓。香飯進胡麻。
御羹石髓を和し、香飯胡麻を進む、
大道今無外。長生詎有涯。
大道今外無し、長生詎ぞ涯あらん、
還瞻九霄上。來往五雲車。
還つて瞻る九霄の上、來往五雲車、

【注解】碧落、天の異名、瑤臺、仙人の住する臺、翠華、翠羽の旗、天皇旗なり、上漢槎、『博物志』に、天河、海と通ず、人あり、八月、槎木を浮べ、一歲に至り、織婦多く、丈夫の牛を渚頭に牽きて之に飲ふを見る、此の人問ふ何の處ぞと、丈夫曰く、嚴君平に問ふべし、平が曰く、某年某月、客星、牛斗を犯す、此れ卽ち天河なり、種田、『搜神記』に、陽公疵伯、義漿を作り、行人に給すること三年、一人あり飲吃す、懷中、石子一升を出し、之に與へて曰く、此を種うれば好玉を生じ、併せて好婦を得んと、敦煌、北平の徐氏、女あり、公、之を求む、白璧一雙を得ば、當に婦を與ふべし、公、玉を種うるの所に至り、白璧五雙を得て以て聘す、遂に妻ぼすに女を以てす、因つて其の地を名けて玉田と曰ふ、泥竈、魏の李少君、竈を祀り老を却くる方を以て武帝に見ゆ、曰ふ、竈を祀るときは則ち物を致す、丹砂化して黄金と爲る、石髓、『晉書』に、王烈嘗て石髓を得、飴の如く、卽ち自から半餘を服し、半を嘗康に

異ふ、皆凝りて石と爲る、鍾乳石是なり、無外、『莊子』に、至道無外、謂之大一、とあり、九霄、九天と同じ、

【題義】玄宗が其の姊たる玉真公主が女道士と爲りて、山莊卽ち仙觀を築き、此に住したる處の石壁に題する詩を示されたるを以て、此の和詩を作るなり、

【大意】仙人が住する仙觀は、尋常碧落風煙の外に在りて、其の瑤臺に到るに道路甚だ賒なり、何ぞ知らんや帝苑に連りて、別に自から仙家あらんとは、其の地を比考して鑾駕を廻らし玉ふ、溪に沿ひ緣りて翠華の轉ずるを見る、洞中には別に人間外の日月を開き、窗の裏には自から雲霞を發するを見る、庭には天に沖する鶴を養ひ、溪には漢に上る舟査を流す、公主は日常此の中にて何事を爲すや、田を種ゑて白玉を生じ、竈を祀りて以て丹砂を化するの術を學ばる、谷は靜なるが故に泉の逾よ響く のが强く、山深きが故に日影は常に斜なり易し、御羹は石髓に和して食し玉ひ、香飯は仙人の常食たる胡麻を進む、大道は仙道を除きて外に無し、長生の道は詎ぞ其れ涯あらん、還た九霄の上を見れば、仙人が五雲車に乘りて來往するを見る、

【餘論】此の詩十韻、多く仙に關する文字を使用して、以て公主が女道士たるの意を見はす、文字潤飾が主なれば、氣魄の無きは勿論なり、但し同字の多きは如何なるものなるや解し難し、道が二、有が二、日が二、上が二、生が二、雲が二、溪が二、虛字として用ひ、實字として用ひて、此の如しとせば、別に論ずる所無きなり、

奉和聖製登降聖觀與宰臣等同望應制

聖製、降聖觀に登り、宰臣等と同じく望むを奉和す、應制

鳳扆朝碧落。龍圖耀金鏡。
維嶽降二臣。戴天臨萬姓。
山川八校滿。井邑三農竟。
比屋皆可封。誰家不相慶。
林疎遠邨出。野曠寒山靜。
帝城雲裏深。渭水天邊映。
喜氣含風景。頌聲溢歌詠。
端拱能任賢。彌彰聖君聖。

鳳扆碧落に朝し、龍圖金鏡を耀かす、
維嶽二臣を降し、天を戴きて萬姓に臨む、
山川八校滿ち、井邑三農竟す、
比屋皆封す可し、誰か家ぞ相慶せざらん、
林疎にして遠邨出で、野曠しうして寒山靜かなり、
帝城雲裏に深く、渭水天邊に映す、
喜氣風景を含み、頌聲歌詠溢る、
端拱能く賢に任す、彌よ彰す聖君の聖、

【注解】鳳扆、『尙書』に、孔安國曰く、扆は屏風の類、斧の文を爲り、戶牖の間に設く、之を鳳扆と謂ふは、扆上に鳳凰を畫きしなるべし、天子、諸侯に對面するとき、後方に立てて以て南面せしものなり、龍圖、『水經注』に、黃帝、東して河を巡り、洛を過ぎ、壇を修し、璧を沈め、龍圖を河に受け、龜書を洛に受くとあり、金鏡、劉孝標曰く、聖人握金鏡、と、李善曰く、『洛書』に云ふ、乘失金鏡、金鏡は明道に喻ふるなり、維嶽、『詩經』、大雅、に、維嶽降神、生甫及申、とあり、八校、漢の八校、中壘校尉、屯騎校尉、步兵

綾尉、鄠縣校尉、長水校尉、胡騎校尉、射聲校尉、虎賁校尉、武帝の時置く、三農、平地農、山農、澤農なり、比屋『臨賀新語』に、堯舜之民、可二比屋而封一とあり、蹌拱、『北史』に、天子蹌拱とあり、

【題義】玄宗が降聖觀に登り、宰臣等と四面を眺望して作りたる詩に和したるものが此の詩なり、降聖觀は、天寶七載十二月に元元皇帝が朝元閣に降る、乃ち改めて降聖觀と爲したるものなり、

【大意】鳳扆が碧落に朝し、龍圖が金鏡を耀かす、嶽神が昔甫と申との二臣を降し、而して天命を奉じて萬姓に君臨する、武としては山川に八枝が滿ち、民としては井邑に三農が竟す、各屋毎に皆封賞すべし、誰が家か良政を相慶せざらんや、林木は疎にして遠郊の出づるを認む、平野は曠しうして寒山の靜かなるを知る、帝城は乃ち雲裏に在りて深く、渭水は天邊に接して映ず、喜氣は風景を含み、頌聲は歌詠に溢る、天子蹌拱して政治を賢臣に任す、彌よ以て聖君の聖たる德を彰かにす、

【餘論】此の詩は仄韻を以て成る、前四首應制の作に比較すれば、余は此の首を以て上等妙覺と爲す、多くは排と稱する法の爲め縛せられ、自由なる能はず、此の篇、甚しく縛せられず、言はんと欲する所を言ひたる態度あり、但し天の字複あるは例の小疵と謂ふべし、

奉和聖製御春明樓臨右相園亭賦樂賢詩應制

聖製、春明樓に御して、右相が園亭に臨み、樂賢の詩を賦するに奉和す、應制

複道通長樂、青門臨上路、
遙聞鳳吹喧、闇識龍輿度、
褰旒明四目、伏檻紆三顧、
小苑接侯家、飛甍映宮樹、
商山原上碧、滻水林端素、
銀漢下天章、瓊筵承湛露、
將非富民寵、信以平戎故、
從來簡帝心、詎得迴天步、

複道長樂に通じ、青門上路に臨む、遙かに聞く鳳吹の喧しきを、闇に識る龍輿の度るを、旒を褰げて四目明かに、檻に伏して三顧を紆ぐ、小苑侯家に接し、飛甍宮樹に映ず、商山原上に碧に、滻水林端に素し、銀漢天章を下し、瓊筵湛露を承く、將に富民の寵にあらざれば、信に平戎を以ての故なり、從來帝心に簡す、詎ぞ天步を廻らすことを得ん、

【注解】複道、『史記』に、叔孫通、孝惠帝に傳たり、長樂宮に東朝を爲す、往來數驚人を煩はす、乃ち複道を作るとあり、上と下と二重の廊下、上下に道あれば複と謂ふ、上路、『漢書』枚乘傳に、游曲臺、臨二上路一とあり、鳳吹、「北山移文」に、鳳吹を洛浦に聞く、笠の形、鳳に似たればなり、龍輿、隋の煬帝の詩、翠蓋乘二鳳輦一、碧霧翼二龍輿一とあり、四目、『尚書』に明二四目一、達二四聰一とあり、『孔穎達正義』に云ふ、四方の目を明らかにし、四方を遠視せしむるなり、伏檻、檻は欄なり、三顧、『三國志』「諸葛亮傳」に、先帝、臣が草廬を以てせず、猥りに自から枉屈し、臣を草廬の中に三顧すとあり、商山、『杜氏通典』に、上洛郡の上洛縣、商山あり、亦、地勢山と名け、亦、楚山と名く、四皓隱るる所、其の地險阻、王莽、明威侯王級に命じて曰く、鏡霍の固、南荆楚に當れ、鏡霍とは四面窮阨屈曲、水回繞して霍るを言ふ、滻水、潘岳が「西征賦」に南有二玄灞素滻一とあり、灞水は黑色にて、滻水は素色なり、銀漢、天

何の異名、天漢、銀漢、銀河、河漢、天津、絳河、明河の多きあり、湛露、天子が諸侯と會燕する、之を湛露と謂ふ、天子、恩惠を示す所以、富民、『史記』『平津侯傳』に、治國の道は富民に在り、富民の要は節儉に在り、平戎、『左傳』に、齊侯、管夷吾をして王に平戎せしめ、陽穀をして晉に平戎せしむとあり、杜預曰く、平は和なり、帝心、『後漢書』『耿秉傳』に、公卿會議毎に、常に秉を引きて殿に上らしめ、訪ふに遠事を以てし、多く帝心に簡すとあり、天步、陸機の詩に榮榮光二天步一とあり、

【題義】玄宗が春明樓に御して、右相卽ち中書令に臨み、樂賢の詩を賦して示されたるを和したるものなり、

【大意】複道は長樂宮に通じてある、而して青門は上路に臨む、遙かに鳳吹の聲を聞きて、闇に龍輿が度らるることを識る、天子は晃旒を裘げて四目を明らかにし玉ふ、右相の檻に伏して三顧を紆げ玉ふ、小苑は諸侯が家に接近し、右相が家の飛甍は宮樹に映じて光る、而して商山を望めば原上に當つて碧蒼なるを見る、滻水は前面の林端より其の素白なるを認む、銀漢より天章を下して右相に示し玉ふ、瓊筵に於て諸侯は湛露の恩を承けらる、富民の爲めを計られし寵命でなければ、或は平戎を以ての故に此の寵を蒙るならん、從來帝心に簡す、帝心動かざれば、詎ぞ此に天步を廻らし玉はんや、

【餘論】此の詩も亦仄韻を以て作る、右相が園亭と、天子樂の意と、錯錯綜綜して、次序整正たるを知る、但上字と天字に重複あり、小疵たるは論勿し、趙松谷曰く、或人謂ふ律詩に仄韻無し、其の仄韻なる者、乃ち是對偶の古詩のみ、松谷謂ふ、古律の分は當に調を以てし、格を以てすべし、韻を以てすべからず、唐人試士の類、律詩を用ふ、今、張謂の落日山照曜、豆盧榮の春風扇二微和一、何儒亮の亞父碎二玉斗一、俱に仄韻を用ふ、孫月峯、『排律辨體』を作り、特に仄律一門を出す、蓋し此に見あるなり、

奉和聖製暮春送朝集使歸郡應制

聖製、暮春朝集使が郡に歸るを送るに奉和す、應制

萬國仰二宗周一衣冠拜二冕旒一　萬國宗周を仰ぎ、衣冠冕旒を拜す、
玉乘迎二大客一金節送二諸侯一　玉乘大客を迎へ、金節諸侯を送る、
祖席傾二三省一褒帷向二九州一　祖席三省を傾け、褒帷九州に向ふ、
楊花飛二上路一槐色蔭二通溝一　楊花上路に飛び、槐色通溝に蔭す、
來預二鈞天樂一歸分二漢主憂一　來りて鈞天の樂みに預り、歸りて漢主の憂を分つ、
宸章類二河漢一垂象滿二中州一　宸章河漢に類す、象を垂れて中州に滿つ、

【注解】宗周、『毛詩詩傳』に、宗周は鎬京なり、『博物志』に、周は后稷より文武に至るまで、皆、關中に都し、宗周と號す、京兆府は周室の居る所、之を宗周と謂ふ、玉乘、季善曰く玉乘は玉輅なり、大客、『周禮』に、大行人、大賓の禮、及び大客の儀を掌

り、以て諸侯に親むとあり、鄭康成曰く大客は其の孤卿を謂ふ、金節、『周禮』に、山國は虎節を用ひ、土國は人節を用ひ、澤國は龍節を用ふ、各の金を以て之を爲る、鄭康成曰く、諸侯の使臣、頻聘に行く、則ち金節を以て之に授け、以て行道の信と爲すなり、三省、尚書省、門下省、中書省、之を唐の三省と謂ふ、裴帷、後漢の賈琮、冀州の刺史と爲る、舊典、傳車驛騎、赤帷裳を垂れ、州界に迎ふ、琮が郡に及んで、車に升り言つて曰く、刺史は當に遠視廣聽し、美惡を訪察すべし、何ぞ反つて帷裳を垂れ、以て自から掩塞するあらんや、乃ち御者に命じ、之を褰げしむ、百城風を聞きて、自然に竦震す、通鑑、左思が「魏都賦」に、疏通以預路、羅青槐以蔭塗とあり、鈞天、『史記』に、趙簡子疾むこと五日、人を知らず、寤めて大夫に語つて曰く、我、帝所に之き、甚だ樂しむ、百神と鈞天に游ぶ、廣樂九奏萬舞、三代の樂に類せず、其の聲、人心を動かす、樂、音、學と讀むなれども、下句の愛の字に對するを以て、音、洛を取る、即ち「メノシム」なり、中州、『列子』に、從中州以東とあり、李善曰く中國なり、要饒曰く帝都なり、

【題義】玄宗が暮春に朝集使が各自に郡に歸るを送る詩を示されたるを以て、此の和詩成れるなり、朝集使とは各州郡の都督や刺史が、各の其の治下の狀況を具申する爲め、十月二十五日を以て京師に來る、尚書省に於て謁見して、其の狀を報告するものなり、

【大意】萬國の刺史が皆宗周を瞻仰する、各自に衣冠を正して以て天子に拜謁する、天子は玉輦に乘りて自ら大客を迎へ、其の歸るに及んでは金節を以て諸侯に送る、祖道の燕を張る席には、三省の役人皆會す、歸る朝集使の面面は各の帷を褰げて堂堂と去る、時節は暮春なるを以て、楊花は上路に飛び、槐影は通溝に蔭す、來朝せしときは鈞天の廣樂に預かり、歸郡すれば天子國家を憂ふる志を面面が分ち、而も之を送る宸章は貴きこと河漢に類し、種種の象と爲つて垂れて中州に滿つるなり、

奉和聖製送不蒙都護兼鴻臚卿歸安西應制

聖製、不蒙都護兼鴻臚卿が安西に歸るを送るを奉和す、應制

上卿增命服都護揚歸旆。
雜虜盡朝周諸胡皆自鄶。
鳴笳瀚海曲按節陽關外。
落日下河源寒山靜秋塞。
萬方氛祲息六合乾坤大。
無戰是天心天心同覆載。

上卿命服を增し、都護歸旆を揚ぐ、
雜虜盡く周に朝し、諸胡皆鄶よりす、
笳を鳴らす瀚海の曲、節を按ず陽關の外、
落日河源に下り、寒山秋塞靜なり、
萬方氛祲息み、六合乾坤大なり、
戰ふこと無きは是天心、天心覆載に同じ、

【餘論】此の詩も、排律として上乘の部に屬す、于鱗の『唐詩選』にも採取せり、蓋し九州、中州、他の句と異なり、韻字なれば、斷じて不可、九州を九洲とでもせば、或は疵たるを免かるべし、

【注解】命服、鄭康成の毛詩箋に、命服とは、王命の服なり、李善曰く酔命の服なり、歸旆、陸機の詩、引領望歸旆とあり、瀚海、鮑照の詩に雜虜入雲中の句あり、自鄶、『左傳』に、鄶より以下譏り無し、杜預曰く、復た之を譏論せず、其の微なるを以てなり、松谷曰く、右丞其の字を用ふるは、亦諸胡微細、實鄶小國の如き、貶きて論ずるに足らざるの意を取る、氛祲、『晉書』『阮孚傳』

に、皇澤恩被し、蛾寇、跡を斂め、氛祲既に澄み、日月自から朗とあり、六合、天地四方なり、

【題義】不豪と稱する蕃將が安西都護の官にして渾瓆卿を兼任するものを惡る玄宗の詩を和したるなり、

【大意】上卿として遇せらるる上に更に命服を增す、今、都護府に歸るに當りて、旆影を翻揚す、塞外の雜虜は古の周に等しき今の唐室に朝謁し、而して其れ以下の小國も皆天子慰問に來る、其の歸るや笳を鳴らして瀚海の曲曠かなり、金節を按排して關關の外に渡る、落日は河源に下るを見、寒山は秋塞安靜なり、氣祲の氣は萬方皆息む、唐の天下は良に大なるを覺ゆ、戰爭の起るは天心にあらず、天心は安靜を貴ぶにあり、所謂、天心は覆德と載德とを同じ、天子の心は天地と德を同じうするものなり、

【餘論】此の詩も、仄韻を以て作る、唐室の盛と、歸仗の盛と、歸路の景と、次序に之を敍す、最後天心を層用、作法、此の如し、他無意義の同字と異なる名篇と謂ふ可し、

三月三日曲江侍宴應制

三月三日、曲江、宴に侍す、應制

萬乘親齋祭。千官喜豫游。　萬乘親しく齋祭し、千官豫游を喜ぶ、

奉迎從上苑。祓禊向中流。　奉迎上苑よりし、祓禊中流に向ふ、

草樹連容衛。山河對冕旒。　草樹容衛に連り、山河冕旒に對す、

畫旗搖浦蔽。春服滿汀洲。　畫旗浦蔽に搖き、春服汀洲に滿つ、

仙樂龍媒下。神皐鳳蹕留。　仙樂龍媒下り、神皐鳳蹕留まる、

從今億萬歲。天寶紀春秋。　今より億萬歲、天寶春秋を紀す、

【注解】祓禊、前に詳ぜり、浦蔽、『楚辭』に、入二蔽浦一余僅倡兮とあり、浦と蔽と同意義なり、龍媒、名馬を謂ふ、神皐、長衡の「西京賦」に、實惟地之奧區神皐とあり、皐は澤畔、又は肥地、又は良田、都畿の內を謂ふ、蹕の本義は君王の出行に際し、道路を警戒して、行人を止めるなり、卽ち「サキバラヒ」なり、轉じて天子の行幸に用ふ、天寶、開元二十九年にして天寶元年と改む、

【大意】佳節に際し、曲江に天子出でて親祭し玉ふ、陪食を賜ひ、千官、豫游を喜ぶ、奉迎して上苑よりし、祓禊の爲めに侍して中流に向ふ、草樹は容衛の士と連り、山河は冕旒の尊きに對す、天皇旗の美麗なる影が浦蔽に搖き、百官の美麗なる春服が汀洲に滿つ、仙樂が起るに從つて龍媒が下り、神皐には鳳蹕が留まる、今より後億萬歲、天寶元年たるの春秋を紀すべし、

【餘論】此の詩も、所謂應制詩たるの面目を備ふるのみにして、別に氣魄の見るべきもの無し、從の字複、春の字複、要するに二句十字にして體を成せば、一篇一章としての複字有るは問はざるものの

如し、嚴重に之を論すれば、余は同字禁を以て學ばんと欲す、

奉和聖製十五夜燃燈繼以酺宴應制

聖製、十五夜燈を燃し、繼ぐに酺宴を以てするを奉和す、應制

上路笙歌滿春城漏刻長。　上路笙歌滿ち、春城漏刻長し、
游人多晝日明月讓燈光。　游人晝日より多く、明月燈光に讓る、
魚鑰通翔鳳龍輿出建章。　魚鑰翔鳳に通じ、龍輿建章を出づ、
九衢陳廣樂百福透名香。　九衢廣樂を陳ね、百福名香透る、
仙妓來金殿都人繞玉堂。　仙妓金殿に來り、都人玉堂を繞る、
定應偸妙舞從此學新妝。　定んで應に妙舞を偸み、此より新妝を學ぶべし、
奉引迎三事司儀列萬方。　奉引三事を迎へ、司儀萬方を列す、
願將天地壽同以獻君王。　願はくは天地の壽を將て、同じく以て君王に獻ぜん、

【注解】漏刻、水時計と稱するものなり、『酉陽雜俎』に、孔壺を漏と爲し、浮箭を刻と爲す、漏を下して刻を數へ以て中星晷明星を考ふとあり、魚鑰、『芝田錄』に、門鑰必ず魚を以てする者は、其の眠目せず、夜を守るの義に取る、翔鳳、唐の宮闕の名、建章、漢の宮闕の名、九衢、『楚辭』注に、王逸曰ふ、九交の道を衢と曰ふ、後人、廣路を稱して九衢と曰ふ、此に本づく、百福、唐の宮城の名、千秋殿と並ぶ、奉引、前導者を稱して奉引と謂ふ、三事、三公を謂ふ、司儀、『周禮』に、司儀は九儀の賓客、擯相の禮を掌るとあり、

【題義】正月十五夜を上元夜とも元宵とも曰ふ、是の夜燈を燃し、宮人歌舞し、詩人、詩を賦し、以て三夜に度ることあり、唐より始まる、玄宗、是の夕、羣臣と會燕し、詩成りて羣臣に和せしめたるなり、

【大意】上路には笙聲歌聲滿ち、春城には夜漏正に長し、游人は晝日よりも多く出で、明月の光も燈光には及ばず、翔鳳閣も魚鑰を下さずして通行し、天子の龍輿も建章宮を出づ、九衢には廣樂を陳ね、百福城には名香の薫透するを覺ゆ、仙妓は來りて金殿に在り、都人は齊しく玉堂を繞る、都人は仙妓の妙舞を偸視して、以後は必ず此の新容を學ぶものもあらん、前導者は先づ三事の大官を迎へ、司儀は各國の賓客を列坐せしむ、願はくは天地と長久なる壽を將て、一齊に同じく君王の爲めに萬歲を唱ふべきなり、

【餘論】此の詩は、同字全く無く、格調整正なり、玄宗が正月望夜の游、前代無き所、燈樓の高さ五十丈、垂るるに珠玉を以てし、風動けば鏘鏘として鳴る、燈に龍鳳虎豹の狀あり、士民縱樂、初め止だ三夜、後十七、十八、兩夜を增すと『菊坡叢話』に出づ、右丞の此の詩、以て其の一斑を知るに

足る、

奉和聖製重陽節宰臣及羣官上壽應制

聖製、重陽の節、宰臣及び羣官壽を上るを奉和す、應制

四海方無事、三秋大有年。
百工逢此日、萬壽齊天。
芍藥和金鼎、茱萸插玳筵。
玉堂開右个、天樂動宮懸。
御柳疎秋影、城鴉拂曙煙。
無窮菊花節、長奉柏梁篇。

四海方に無事、三秋大に有年、
百工此の日に逢ひ、萬壽齊天を願ふ、
芍藥金鼎を和し、茱萸玳筵に插む、
玉堂右个を開き、天樂宮懸を動かす、
御柳秋影疎にして、城鴉曙煙を拂ふ、
無窮菊花の節、長く奉す柏梁の篇、

【注解】三秋、古暦の七八九の三月を三秋と曰ふ、大有年、五穀大に熟するを大有年と曰ふ、百工、『尚書』に允釐百工とありて、『論語』の百工居レ肆、以成二其事一、乃ち工人の意味廣し、此の句の百工は百官を指す、芍藥、子虛の賦に芍藥之和具而後御レ之とあり、之を解する者種種說を爲す、要するに師古の說の、芍藥は藥草の名、其の根、主として五臟を和し、又毒氣を除ける故に、之を鼎桂に合し、五味以て諸食を助く、因つて五味の和を以て芍藥と爲すのみ、是を以て正說とす、金鼎、芍藥を調合する器物なり、茱萸、九月九日に茱萸を取りて、以て頭上に插むときは、惡氣を除くと、漢代よりの俗風として之を爲す、玳筵、美麗なる燕席を謂ふ、右个、『呂氏春秋』に、季秋の月、天子總章右个に居すと、高誘曰く、明堂中方外圓、通達四出、各の左右の房あり、之を个と謂ひ、个は本闕の四面にある旁舍のことなり、宮懸、懸は鐘磬の屬を言ふ、漢の「安世房中歌」に高張二四懸樂一とあり、

【大意】只今は四海方に無事なるのみならず、秋穫も大に豐富なり、是に於てか百官が此の重陽の日に逢ひ、參內して萬歲の壽、天と齊しと唱へざるべからず、芍藥は金鼎に和して煮、茱萸の實は玳瑁の御筵に插む、玉堂は天子出づるを以て右个を開き、天樂は淸風の爲め宮懸を動かして響く、御柳は晩秋なれば影が疎となる、城鴉は曙煙を拂うて飛ぶ、無窮菊花の佳節、長く柏梁の篇を奉る、

【餘論】此の詩、無事と無窮と稻失敗の狀あるも、餘の諸句は應制として、得體のものと謂ふべし、

三月三日勤政樓侍宴應制

三月三日勤政樓にて宴に侍す、應制

綵仗連宵合、瓊樓拂曙通。
年光三月裏、宮殿百花中。
不レ數二秦王日一、誰將洛水同。
酒筵嫌落絮、舞袖怯春風。

綵仗連宵合し、瓊樓拂曙通ず、
年光三月の裏、宮殿百花の中、
秦王の日を數へずんば、誰か洛水を將て同じうせん、
酒筵落絮を嫌ひ、舞袖春風を怯る、

天保無爲德。人歡不戰功。　天は無爲の德を保ち、人は不戰の功を歡ぶ、
仍臨九衢宴。叟達四門聰。　仍ほ九衢の宴に臨み、叟に四門の聰に達す、

【題義】玄宗が興慶宮の西南に於て樓を置き、西面を題して華夢相輝之樓と曰ひ、南面を題して勤政務本之樓と曰ふ、三月三日、是の樓に宴を設け羣臣と會合せしなり、

【大意】綵仗は昨宵より眠はしく合し、瓊樓は早曉より自由に通ず、年光は三月の裏なり、宮殿は百花の中に在り、秦の昭王が三月に河曲に宴せし日を歡へずんば、周公が洛邑に酒を泛べしと、今、勤政樓に會する、處は異なるも、天意は同じきことを知るを得ず、酒筵の席には落絮を嫌ふ、舞袖の者は春風を怯る、天子は長く無爲して治むる德を保ち、人は平和にして不戰の功を歡ぶ、此の上にも九衢の宴に臨み、叟に四門の聰にも達する、

和陳監四郎秋雨中思從弟據

陳監四郎が秋雨中從弟據を思ふに和す

嫋嫋秋風動。凄凄煙雨繁。　嫋嫋として秋風動き、凄凄として煙雨繁し、
聲連鵁鶄觀。色暗鳳凰原。　聲は連る鵁鶄觀、色は暗し鳳凰原、
細柳疎高閣。輕槐落洞門。　細柳高閣に疎に、輕槐洞門に落つ、
九衢行欲斷。萬井寂無喧。　九衢行くゆく斷えんと欲す、萬井寂として喧無し、
忽有愁霖唱。叟陳多露言。　忽ち霖を愁ふる唱あり、叟に露多き言を陳ず、
平原思令弟。康樂謝賢昆。　平原令弟を思ひ、康樂賢昆を謝す、
逸興方三接。衰顏强七奔。　逸興方に三接、衰顏强ひて七奔、
相如今老病。歸守茂陵園。　相如は今老病、歸り守る茂陵の園、

【注解】嫋嫋、秋風の物を揺つ形容、鵁鶄觀、漢の武帝立てし所、雲陽甘泉宮外に在り、鳳凰原、宋樂史撰する『太平寰宇記』に、雍州昭應縣に鳳凰原あり、『二統志』には西安府臨潼縣の東北一十里に鳳凰原あり、今、後說を取る、愁霖唱、謝瞻が詩に、忽聽愁霖唱『懷勞奏所誠』とあり、多露、『詩經』『國風』に、豈不夙夜、爲行多露とあり、平原、晉の陸機は平原內史と爲る、陸雲は、文章、兄の機に及ばずと雖も、持論は兄に勝る、世に二陸と稱す、康樂、宋の謝靈運は康樂公と爲る、族弟は謝惠連なり、惠連、詩成る毎に、靈運、之を嘉賞して止まず、三接、『易』に、蓍龜ければ盡日三接すとあり、七奔、『左傳』に、吳、始め楚を伐ち、巢を伐ち、餘を伐つ、是の時に當り、楚の子重、奔命す、馬陵の會、吳、州來に入る、子重、鄭より奔命す、子重と子反、是に於てか七たび奔命す、

【題義】陳監四郎が秋雨中に弟を思ふ詩を示さるるを和したる詩なり、

【大意】嫋嫋として秋風動き、凄凄として煙雨繁し、雨聲は連續して鵁鶄まで達し、煙色は暗澹とし

て鳳凰原まで到る、而して細柳は高閣に疎にして、輕槐の葉は淸門前に散落する、九衢の行人は跡將に斷えなんとし、萬井は寂として人語の喧無し、忽ち霧を愁ふる詩を寄せられ、更に弟を思ふ多露の言を陳せらる、陸平原は昔令弟を思ふ佳詩あり、謝康樂も亦賢昆を謝する詠あり、君が詩を讀んで遺典を生じ日に三接するを厭はず、又衰顏を以て强ひて七奔するも罷れたりと言はず、而も哀しい哉相如は今老病、歸りて茂陵の園を守るのみ、相如を以て自ら敍し、網川を以て茂陵に比するなり、

【餘論】此の篇に到り、始めて氣魄ある排律を讀むの感を生ず、言はんと欲する所を自由に言ひ、毫も律の爲め縛せられたる所無し、一字として複無きは、讀過して心目共に快なり、

和僕射晉公扈從溫湯

僕射晉公、溫湯に扈從するを和す

天子幸新豐。旌旗渭水東。
寒山天仗裏。溫谷幔城中。
奠玉羣仙座。焚香太乙宮。
出游逢牧馬。獵獵有非熊。
上宰無爲化。明時太古同。

天子新豐に幸す、旌旗渭水の東、
寒山天仗の裏、溫谷幔城の中、
玉を奠す羣仙の座、香を焚く太乙の宮、
出游して牧馬に逢ひ、獵を罷めて非熊あり、
上宰無爲の化、明時太古同じ、

靈芝三秀紫。陳粟萬箱紅。
王禮尊儒敎。天兵小戰功。
謀猷歸哲匠。詞賦屬文宗。
司諫方無闕。陳詩且未工。
長吟吉甫頌。朝夕仰淸風。

靈芝三秀紫、陳粟萬箱紅なり、
王禮儒敎を尊び、天兵戰功を小なりとす、
謀猷哲匠に歸し、詞賦文宗に屬す、
司諫方に闕くる無し、陳詩且未だ工ならず、
長く吉甫が頌を吟じて、朝夕淸風を仰がん、

【注解】溫谷、潘岳が「西征賦」に、南有二溫谷一、李善曰く、溫谷は溫泉なり、幔城、庾肩吾の詩、別建開二幔殿一、離舟捲二幔城一とあり、羣仙、『長安志』に、華淸宮中に集靈臺あり、朝元閣あり、皆、神を祀る所、牧馬、『莊子』の徐無鬼に、黃帝將に大隗を具茨の山に見んとす、方明、御たり、昌寓、驂乘し、張若、謵朋、前馬し、昆閭、滑稽、後車たり、襄城の野に至る、七聖皆迷ふ、童を問ふ所無し、適ま牧馬の童に遇うて、塗を問うて曰く、若、具茨の山を知るか、曰く然り、若、大隗の存する所を知るか、曰く然り、黃帝曰く、異なるかな小童、徒に具茨の山を知るのみならず、又、大隗の存する所を知れり、天下を爲むることを請ひ問ふ、小童曰く、夫れ天下を爲むるものも、亦此の若きのみ、亦其の馬を害するものを去るのみ、非熊、『搜神記』に、呂望、渭陽に釣す、文王出でて獵獵す、占うて曰く、今日の獵は一狐を得ん、龍にあらず、彲にあらず、命に帝王の師を得べし、果して太公を渭の陽に得たり、上宰、天上の主宰、君主を指す、陳粟、『史記』に、太倉之粟、陳陳相因とあり、萬箱は車箱なり、紅、『漢書』に、太倉之粟、紅腐而不可食とあり、粟、儲藏久しきときは、色、紅となる、哲匠、明智の人なり、文宗、陳の『徐陵傳』に、陳爲二一代文宗一とあり、司諫、官名、司諫は司正と同じ、天下を巡游して、道を正し、人を正しうする役なり、吉甫頌、『詩經』「大雅」に、吉甫作レ頌、穆如二淸風一とあり、

【題義】僕射の官たる晉公が溫湯に扈從して作る所の詩を和するなり、李林甫は晉國公に封せられし人、右丞の官は右補闕たりしなり、

【大意】天子將に新豐に行幸せんとす、旌旗は翻翻として渭水の東に滿ち、寒山は今天仗の裏に屬し、溫谷も亦幔の中と異ならず、珠玉を羣仙の座に祭奠し、名香を太乙宮の前に焚燒す、黃帝は出游して牧馬に逢ひ、文王は出狩して帝師に遇ふ、上宰たるものは無爲にして民を化するに在り、今日の明時は、所謂無爲にして化せる太古と同じ、世清ければ靈芝三秀紫を呈し、民富めば、陳粟が萬箱紅を爲す、王禮は儒敎を尊ぶ、天兵は戰功を小とす、善政を謀猷するは皆哲匠の力なり、妙詞賦を屬るは文宗の力なり、朝廷に司諫は其の人闕くること無し、余が詩を陳するも且未だ工ならず、是の故に聖德を頌する吉甫の詩を吟じて、反つて以て朝夕に其の清風を仰ぐ、

【餘論】此の篇、多く玄宗の德を稱して、以て晉公に及ぶ、然るに李林甫なるもの、果して一生を通じて此の如くなりしや否や、但し當時に在りて見れば、後世、史家が論ずる如き人にあらざりしやも知れず、余は右丞が此の詩を讀んで、斯く思はるるなり、天子、天仗、天兵、無爲、無闕、例の如く複字多し、

和宋中丞夏日游福賢觀天長寺之作

宋中丞が夏日福賢觀天長寺に游ぶの作を和す

已相殷王國空餘尙父溪。
釣磯開月殿築道出雲梯。
積水浮香象深山鳴白雞。
虛空陳伎樂衣服製虹霓。
墨點三千界丹飛六一泥。
桃源勿遽返再訪恐君迷。

已に殷王の國を相け、空しく尙父の溪を餘す、
釣磯月殿を開き、築道雲梯を出づ、
積水香象浮び、深山白雞鳴く、
虛空伎樂を陳ね、衣服虹霓を製す、
墨は點ず三千界、丹は飛ぶ六一泥、
桃源遽に返る勿れ、再訪して君が迷はんことを恐る、

【注解】殷王國、『史記』に、帝武丁、位に卽き、殷を興さんと思へども、未だ其の佐を得ず、武丁夜夢む、聖人を得、名を說と曰ふと、夢に見る所を以て羣臣百吏を視るに皆非なり、是に於て乃ち百工をして之を營求せしむ、說を傅險の中に得たり、是の時、說、胥靡と爲り、傅險に築けり、武丁に見ゆ、武丁曰く是なり、得て之と語る、果して聖人なり、舉げて以て相と爲す、殷國大に治まる、尙父溪、劉向が『列仙傳』に、呂尙、西の方周に適き、南山に匿れ、磻溪に釣す、呂望を尊稱して尙父と曰ふ、月殿、蕭子良が詩に、月殿風轉、層臺氣寒とあり、雲梯、山路は梯の如く、而して雲あればなり、香象、佛語なり、涅槃經現病品の中に種種の象を出す、野象、白象、青象、赤象、而して香象を以て第一とす、力强うして、惡獸を破却するの謂ひなり、今以て寺の代名詞とす、白雞、『博物志』に、陶隱居云ふ、學道の人、山に居り、宜しく白雞白犬を養ひ、以て邪を辟くべし、伎樂、妓樂と同じ、『法華經』に、諸天伎樂、百千萬種とあり、墨點、『法華經』に、佛、諸の比丘に告ぐ、佛滅度以來、甚大久遠、譬へば三千大千世界の如く、假使人

有りて、瞬して以て墨と爲し、東方千國土を過ぎ、乃ち一點を下し、大なること微塵の如く、又千國土を過ぎ、又一點を下し、是の如くにして、展轉して地を盡して最後の種を、彼等が意に於て、是の諸の國土を算し、能く邊際を得て、其の數を知るや否や、是の人經る所の國土、若點不點、盡抹して塵と爲し、一塵一劫、彼の佛滅度已來、復是の數無量無邊、百千萬億、阿僧祇劫を過ぐ、我、如來の知見力を以ての故に、彼の久遠を觀ること、猶今日のごとし、六一泥、泰泥、黄土と蚌粉と石灰と赤石と腦と食鹽と六味各の一斛を用ひて末と爲す、之を六一泥と曰ふ、

【題義】宋中丞が夏日に福賢觀と天長寺に游んで作りし詩を和せしものなり、

【大意】說が昔殷王を相けしと中丞が唐室を相くると同じ、呂尙が釣して以て武王に相と爲るには異なる、今游ぶの地、釣磯に月殿を開くは是福賢なり、築道に雲梯を出づるは是天長なり、積水に香象浮ぶが如く大なるは是佛道なり、深山に白雞を聞くの幽なるは是仙道なり、虛空に伎樂を陳ぬる樂みあるは是佛道なり、衣服に虹霓を製する娛みあるは是仙道なり、墨が三千界に點する雄大なる玄趣は是佛道なり、丹が六一泥に飛ぶの奇妙なるは是仙道なり、福賢と天長との間に游ぶ、宛かも桃源と同じ、急遽に返り玉ふな、急遽に返り玉ふときは、再游して迷うた昔人と同じからずや、

【餘論】此の篇は、仙觀と佛寺とを隔句に之を表はして、平生の得力を示せるものの如し、殊に積水浮二香象一墨點三千界の二句の如きは、人の意表に出で、而も蔵筍の氣を著けざる所、謂つ可し大家の伎倆と、空が複字あり、

沈十四拾遺新竹生讀經處同諸公之作

沈十四拾遺、新竹讀經處に生じ、諸公の作に同ず

閒居日清淨。修竹自檀欒。
嫩節留餘籜。新叢出舊欄。
細枝風響亂。疎影月光寒。
樂府裁龍笛。漁家伐釣竿。
何如道門裏。青翠拂仙壇。

閒居日に清淨、修竹自から檀欒、
嫩節餘籜を留め、新叢舊欄を出づ、
細枝風響亂れ、疎影月光寒し、
樂府龍笛を裁し、漁家釣竿を伐る、
何如ぞや道門の裏、青翠仙壇を拂ふに、

【注解】檀欒、茂の枚乘が「兎園賦」に、修竹檀欒夾二池水一とあり、呂延濟曰く、竹の美なるを檀欒と謂ふ、龍笛、唐の虞世南の「琵琶賦」に、鳳笛龍吟とあり、仙壇、『永嘉記』に、陽嶠に仙石山あり、頂上に平石あり、方十餘丈、仙壇と名く、壇畔に四竹あり、蔵蔵青翠、風來れば音を發し自から宮商を成す、石上淨潔、初より塵穢無し、相傳へて云ふ、曾て數人の卻くる者あり、此に於て羽化すと、故に之を仙石と謂ふ、

【題義】沈拾遺が住宅の讀經處に新竹を生じたるを以て詩を作る、諸公多く和詩を作るに依つて右丞も此の詩を作りしものなり、讀經の經は儒經にあらず、佛經ならんと考ふ、

【大意】沈君が閒居は毎日淸靜である、修竹が自から檀欒して美なり、今年生じたる嫩節には餘籜が

未だ地に墜ちざるあり、而して新蘂は纍纍として舊欄を出づ、細枝は風の響きに亂れ、疎影は月光が漏れて寒し、樂府として歌ふ詩に龍笛の曲あり、漁家にては伐りて以て釣竿と爲す、其れ等の事を道門の事に比較して何如か善き、道門は笛に造るにあらず、又、釣竿を製するにもあらず、但青翠をして仙壇を拂はしむるのみなり、

【餘論】此の詩は、排律として最短篇に屬するもの、句句修竹、語語清風、應制詩を讀むの厭心起らざるなり、

贈東嶽焦鍊師

先生千載餘。五岳遍曾居。
遙識齊侯鼎。新過王母廬。
不能師孔墨。何事問長沮。
玉管時來鳳。銅盤卽釣魚。
竦身空裏語。明目夜中書。
自有還丹術。時論太素初。

東嶽の焦鍊師に贈る

先生は千載餘る、五岳遍く曾て居る、
遙かに識る齊侯の鼎、新たに過ぐ王母が廬、
孔墨を師とする能はず、何事ぞ長沮に問ふ、
玉管時に鳳を來し、銅盤卽ち魚を釣る、
身を竦かす空裏の語、目を明かにす夜中の書、
自から還丹の術あり、時に論ず太素の初、
頻りに露版の詔を蒙り、時に軟輪の車を降る、
山靜かにして泉逾よ響き、松高うして枝轉た疎なり、
頤を支へて樵客に問ふ、世上復何如、

【注解】五岳、太山、霍山、華山、嵩山、嵩山なり、齊侯鼎、『史記』に、李少君、上を見る、上、故劑器あり、少君に問ふ、少君曰く、此の器は齊の桓公十年、柏寢に陳すと、已にして其の刻を案ずるに果して齊の桓公の器、一宮盡く驚く、以爲らく少君は神なり、數百歲の人なり、王母廬、曹植が詩に、驅風游二西海一、東過二王母廬一とあり、銅盤、後漢の左慈、字は玄放、少うして神道あり、嘗て司空曹操の座に在り、操、從容として衆賓を顧みて曰く、今日高會珍羞略ぼ備ふ、少く所ば吳の松江の鱸魚のみ、玄放、下座に於て應へて曰く、此れ得べきなり、因つて銅盤を求め水を貯へ、竹竿餌を以て、盤中に釣る、須臾にして引く、一鱸魚出づ、操大に掌を拊つて笑ふ、會する者皆驚く、操曰く、一魚、坐席に周れからず、盍に得べきや、放乃ち餌釣を更め之を沈む、須臾に復引き出す、皆長さ三尺餘、生鮮、愛すべし、操、目前に之を鱠にせしめ、會者に周浹すと、竦身、『淮南子』に、若士奉臂而竦身、遂入二雲中一とあり、明目、『抱朴子』に、減るひと、明目の道を問ふ、抱朴子曰く、能く三焦の昇景を引き、大火を南離に召し、之を洗ふに明目を以てし、之を熨すに陽光を以てし、丙丁洞觀符を燒き、酒を以て和して之を洗ふ、古人曾て夜を以て書するなり、還丹、『抱朴子』に、若し九轉の丹を取りて、神鼎中に內れ、夏至の後之を煙す、鼎熟し、倉然として煙燄俱に起り、神光五色、卽ち化して還丹と爲る、取りて之を服すること一刀圭、卽ち白日昇天す、太素、『列子』に、太素は質の始なりとあり、軟輪車、『後漢書』「明帝紀」に、三老を尊事し、五更を兄事し、安車輕輪とあり、

【題義】東岳卽ち太山に住する焦鍊師たる道士に贈る詩なり、唐の六典に據れば、道士に三號あり、一を法師と曰ひ、二を威儀師と曰ひ、三を律師と曰ふ、而して其の德高く思ひ精なる者、之を鍊師と

謂ふ、然らば鍊師ならざるものも、他人より敬稱として贈るには妨げざるものの如し、蓋し古來より釋師には法師及び律師を用ひ、道士は一般に鍊師と稱するものの如し、釋士は絶對に鍊師の稱無し、法を鍊るは副にて、丹を鍊るが主ならん、

【大意】先生は千歳餘も生きて居る人ならん、是の故に五岳に曾居遍かりしなり、昔、已に齊侯の鼎を識りし人は先生と道を同じうする人なり、西王母が廬は普通の人間の過ぐる所ならず、先生は新たに之に過ぐ、孔子や墨子の道を師とする能はず、反つて長沮卽ち昔の隱者に道を問ふ、玉管を吹けば時に鳳凰來り、銅盤に水を盛つて魚を釣る、身は塵裏に處するも、其の心は空裏の人と語るのみ、目を明かにして夜中に書を讀み、又寫す、自然に還丹の術を有し、時ありては太素の初を論ず、頻りに露版の詔を蒙り、時に輾輪車を天子より降賜さるることあり、思ふに今頃は山靜かにして泉聲逾よ響き、松は高く聳えて枝は轉た疎ならん、世上と遠ざかるを以て偶ま檐客に遇ひ、頤を支へて却つて世上の狀況何如と問ふならん、

【餘論】案するに此の詩、平を以て起し、仄を以て結ぶ、排律として此の體多くあらず、十韻の排律は正法なり、九韻の排律は常規にあらず、結末に猶ほ十字ありしこと疑ひ無し、而かも傳ふるの久しき、論ずる者の無きも怪しむべし、松谷も何の辨無きは細心を闕くなり、

贈焦道士

焦道士に贈る

海上游三島。淮南預八公。
坐知千里外。跳向一壺中。
縮地朝珠闕。行天使玉童。
飲人聊割酒。送客乍分風。
天老能行氣。吾師不養空。
謝君徒雀躍。無可問鴻濛。

海上三島に游び、淮南八公に預る、
坐して知る千里の外、跳つて向ふ一壺の中、
地を縮めて珠闕に朝し、天に行きて玉童を使ふ、
人に飲ましめて聊か酒を割き、客を送つて乍ち風を分つ、
天老能く氣を行り、吾師空を養はず、
君に謝して徒らに雀躍、鴻濛に問ふべき無し、

【注解】八公、『水經』注に、淮南王劉安は、是れ漢の高帝の孫、厲王の長子なり、節を折りて士に下り、篤く儒學を好み、方術の徒を招ふ、數十人、皆僊異と爲す、神仙秘法、鴻寶の道多し、卽ち八公あり、皆眉眉皓素、門に謁り見えんことを求む、門者曰く、「吾王、長生を好む、今、先生、衆を住むる術無し、未だ敢て相聞せず、八公變じて童と成る、王、甚だ之を敬す、坐知、『抱朴子』に、黃丹一刀圭を服すれば、卽ち長生不老なり、及び坐して千里の外を見、吉凶皆知り、目前に在るが如きなり、一壺中、『葛洪神仙傳』に、壺公は其の姓名を知らず、時に汝南に費長房なる者あり、市掾と爲る、忽ち見る公の遠方より來り、市に入りて藥を賣る、人、之を識ること無し、藥を賣る、口、價を言にせず、病を治すれば皆愈ゆ、常に一空壺を屋上に懸け、日入るの後、公跳つて壺中に入る、人、能く見るもの寡し、唯長房、樓上より之を見、當人にあらざるを知る、長房乃ち日日自から公が座前の地を掃ふ、又、飲物を供す、公受けて辭せず、公、長房の篤信を知り、謂つて曰く、暮れて人無き時に至りて更に來れ、長房、其の言の如く卽ち往く、

公、房に語つて曰く、我が謂つて壺中に入る時を見て、卿卽ち我が旨に效ふべし、自ら當に得入すべし、長房、言に依る、果して覺えず已に入る、入つて後復道を見ず、唯、仙宮世界、樓觀重門閣道、宮の左右侍者數十人なるを見る、公、房に語つて曰く、我は仙人なり、昔し天曹に處り、公事勤めざるを以て責められ、因つて人間に謫するのみ、卿、數ふべし、故に我を見るを得たり、縮地、『葛洪神仙傳』に、費長房、神術あり、能く地脈を縮む、千里、目前に存在し、之を放てば復昏ぶること舊の如きなり、玉童、玉淸君に侍するもの玉童玉女三千人、其の次ぎは一千五百人、其の次は八百人、劉酒、『神仙傳』に、費公、左慈を召す、乃ち爲に酒を設く、慈曰く、今當に遠賓すべし、乞ふ盃を分つて酒を飲まん、費公、慈が分盃飲酒を求むと聞いて、謂ふ公先づ飲み、餘を以て慈に與ふべしと、慈、道巾を投き、以て盃酒を蓋し、其の間を中斷し、相去ること數丈、卽ち半を飲み、半を公に與ふ、分風、『神仙傳』に、廬山廟に神あり、能く帳中に於て、外人と共に語る、酒を飲んで空中に盃を投ず、人往いて福を乞へば、能く江湖の中、風を分ち、帆を舉げ、行いて各の相違はしむ、天老、黃帝時し風后を以て上台に配し、天老を中台に配し、五聖を下台に配す、不變空、佛教の空理を修飾せずとなり、松谷は賈誼の服賦を引いて注す、火に誤る、顧可久の說を是とす、鴻濛、『莊子』『外篇』に、雲將、東遊して、扶搖の枝を過ぎ、適ま鴻濛に遭ふ、鴻濛方に睡を拊ち、倚躍して游ぶ、雲將、之を見て、倘然として止まり、贅然として立つ、曰く叟は何人ぞや、叟何ぞ此を爲すと、鴻濛、睡を拊ち、倚躍して輟まず、雲將に對へて曰く、遊ぶ、雲將曰く、朕願はくは問ふ所あらん、鴻濛仰いで雲將を視て曰く、吁、雲將曰く、天氣和せず、地氣鬱結し、六氣調はず、四時節あらず、今、我、六氣の精を合して以て萬生を育せんことを願ふ、之を爲すこと奈何、鴻濛、睡を拊ち、倚躍して頭を掉つて曰く、吾知らず、吾知らず、

【大意】焦道士は海上に於ては蓬萊と方丈と瀛洲との三島に游び、淮南に往けば王の爲めに昔の八公の如く遇せらる、坐して直ちに千里の外を知り、跳つて向へば一壺の中に入る、夏に地を縮めて珠闕卽ち天帝の宮に朝し、天に行きたるときは玉童を自由に使役す、人に酒を飲ましむるも自由の飲用を行ひ、客を送る時は風をして是も白由に分配せしむ、天老は能く氣に因つて行くに在り、吾師は佛氏の如く空を養はず、君に謝して徒だ雀躍するのみ、其の雀躍は何の爲なるや、鴻濛に問ふ由も無きなり、

【餘論】此の篇、道士に贈るを以ての故に、典故を盡く道教より取り、一句として、來歷無きは無し、右丞の詩は今昔以外に自然なるものと、羣書を涉獵せざれば解する能はざるものとの二樣あり、此の篇一讀したるのみにては、其の作意何くに在るや知る能はず、例に因つて行の字と天の字視あり、

投道一師蘭若宿

道一師が蘭若に投じて宿す

一公棲太白。高頂出雲煙。
一公太白に棲む、高頂雲煙を出す、

梵流諸壑遍。花雨一峯偏。
梵流諸壑に遍く、花雨一峯偏なり、

迹爲無心隱。名因立敎傳。
迹は無心の爲めに隱れ、名は立敎に因つて傳ふ、

鳥來還語法。客去更安禪。
鳥來りて還法を語り、客去りて更に安禪、

晝涉松露盡。暮投蘭若邊。
晝涉りて松露盡き、暮に投ず蘭若の邊、

洞房隱深竹。淸夜聞遙泉。
洞房深竹に隱れ、淸夜遙泉を聞く、

向是雲霞裏。今成枕席前。
向に是雲霞の裏、今枕席の前と成る、

豈唯留暫宿。服事將窮年。　豈唯留暫宿するのみならん、服事將に年を窮めんとす、

【注解】一公、『傳燈錄』に、江西の道一禪師、姓は馬氏、容貌奇異、牛行虎視、舌を引きて鼻を過ぐ、足下に二輪文あり、幼にして衡州の唐和尚に依りて落髮し、嵩州の圓律師に受具す、唐の開元中、禪定を衡嶽に習ひ、讓和尚に遇ふ、門參九人、唯師密に心印を受く、太白、『水經注』に、鄠に太一山あり、古文以て終南と爲す、杜預以爲らく中南なりと、亦、太白山と曰ふ、武功縣の南に在り、長安を去る二百里、其の高さ幾何なるを知らず、俗に云ふ、武功の太白と、今の句は終南の太白を指すならん、梵流、梵宮とか彷彿とか云ふ意義に多く用ふ、今の句も然り、諸經に梵宮が多く住するか、花雨、道一の力を指す、多くの梵流の中にて、天花を雨らす程の力の高僧は唯一人との意なり、鳥來、『法苑珠林』に、齊の鄴東大覺寺沙門僧範、姓は李、平鄭の人、善く草書を解し、時に所庫と稱す、晩年出家し、經論を詳解す、鄴州刺史杜鵑、範を請じて華嚴經を冬講せしむ、鳥ち一鴈あり、塔上より飛び降り、座前に法を聽くものの如し、講畢じて徐ろに飛び去る、又、夏講には鳩來りて法を聽く此の如しと、

【大意】一公が棲む太白山は、高頂より雲煙を吐き出す、而して梵流は諸壑に遍く住し、花雨の高僧は一峯に獨在す、身迹は無心の爲めに隱れ、高名は立敵に因りて世に傳ふ、鳥も來りて還法を語るが如く、客去りて高僧は更に安禪する、晝間に山中を跋涉して松露蓋き、暮天に蘭若の邊に投宿す、我が宿を許されたる洞房は深竹の影に隱れ、淸夜に臥して遙泉の響きを聞く、今宿する洞房は晝間に雲霞の裏に認めたる處なり、而して今や其の處が枕席の前と成る、我顧ふ此の淸淨の地、暫く宿するは惜むべし、蘭若の諸事に服しても永く此に年を窮めんことを、

【餘說】此の篇、境と人と情とを寫し出して、精緻を極む、梵流の二句、正面は水流と花雨となり、而して側面、凡僧と高僧とに分つ、文字使用巧なること此の如し、凡僧も亦怒るを得ず、此の篇も平で起し、仄で結ぶ、排律として亦拗す、蓋し八韻なるを以て誤るにはあらず、願可久本に投龐禪師蘭若宿に作る、諸本多く道一禪師とあり、道一を以て正とすべし、

山中示弟等

山中弟等に示す

山林吾喪我。冠帶爾成人。
莫學嵇康懶。且安原憲貧。
山陰多北戶。泉水在東鄰。
緣合妄相有。性空無所親。
安知廣成子。不是老夫身。

山林吾我を喪ふ、冠帶爾人と成る、
學ぶこと莫れ嵇康が懶、且安んぜよ原憲が貧、
山陰北戶多く、泉水東鄰に在り、
緣合して妄に相有、性空しうして親しむ所無し、
安んぞ知らん廣成子、是老夫が身ならざることを、

【注解】吾喪我、『莊子』に、吾喪我、汝知之乎とあり、嵇康懶、嵇康が絕交書に、性復疎懶、筋骸肉體、頭面常一月十五日不洗、不大閒業、不能沐也とあり、原憲貧、『史記』に、原憲亡げて草澤の中に在り、子貢、衞に相たり、駟馬迷路、藜藿を排して、窮閭に入り、過ぎて原憲に謝す、憲、敝衣冠を整して子貢を見る、子貢、之を恥ぢ、曰く、夫子豈病むか、原憲曰く、吾之を聞く、財無きもの之を貧と謂ふ、道を學んで行ふ能はざるもの、之を病と謂ふ、憲が如きは貧なり、病にあらざるなり、緣合、『涅槃經』「從心品」に、是受皆從緣合而生とあり、合は離の反、緣合して以て妄に相卽ち形有るなり、性空、『涅槃經』「從心品」に、觀二切法本性皆

空とあり、性は相の反、「ハタラカ」力あるも、形即ち相の見るべき無し、故に空と謂ふ、廣成子、葛洪の『神仙傳』に、廣成子は古の仙人、崆峒の山、石室の中に居る、黄帝、其の名を聞いて往り、活身の要を請問す、廣成子答へて曰く、至道の要は、杳杳冥冥、無聚無聽、抱神以て靜、形將に自から正しからんとす、必ず靜必ず清、爾の形を勞する無く、爾が精を搖かす無くんば、乃ち長生すべし、内を慎み、外を閉ぢよ、多知は敗を爲す、我其の一を守り、以て其の和に處る、故に千二百歳にして、形未だ嘗て衰へず、我道を得る者、上りて皇と爲り、我道を失する者、下りて土と爲る、將に汝を去りて無窮の門に入り、無極の野に游び、日月と光を參し、天地と常と爲らんとす、人其れ盡く死して、我獨り存す、

【題義】山中に於て我が志を敍し、以て弟等に示すなり、本傳即ち『唐書』を案ずるに、弟の縉は代宗の時、宰相と爲ること明かなるが、縉以外に骨肉の事は明白ならず、願可久本には山中示弟とあり、別に余が所藏する明板王維集不分卷にも山中示弟とあり、今松谷本に據るを以て等字を入れたるが無きを以て正とすべし、

【大意】白雲を伴とする者は山林に吾自から我を喪失するが如く、青雲に在るの士は冠帶して爾が如くなるも人なり、吾我を喪失する如しと言ふと雖も、嵇康が如き疎慵は決して學ばず、但し原憲が如き貧は我安んじて之に處る、山陰なるが故に北向の人家が多くあり、而して泉水の出づる所は東鄰に在り、佛に於て學ぶ、緣が合する時には妄に我だの彼だのと相を現じ、而も其の形の本を尋ぬれば空虛にして覩む所のもの曾て無し、昔、廣成子なる達人ありしを聞く、今日の廣成子は、即ち我が身ならざることを知らんや、

【餘論】此の詩、三四の二句儒道、七八の二句佛道、九十の二句は仙道、所謂三道を融合して骨子と爲るもの、山林、山陰は例の小疵なり、

田家

舊穀行將盡。良苗未可希。
老年方愛粥。卒歲且無衣。
雀乳青苔井。鷄鳴白版扉。
柴車駕羸牸。草屨牧豪豨。
多雨紅榴折。新秋綠芋肥。
餉田桑下憩。旁舍草中歸。
住處名愚谷。何煩問是非。

舊穀行くゆく將に盡きんとし、良苗未だ希ふべからず、
老年方に粥を愛し、卒歲且衣無し、
雀は乳す青苔の井、鷄は鳴く白版の扉、
柴車羸牸を駕し、草屨豪豨を牧す、
多雨紅榴折け、新秋綠芋肥えたり、
田に餉して桑下に憩ひ、舍に旁うて草中に歸る、
住處愚谷と名く、何ぞ煩はしく是非を問はん、

【注解】卒歲、『詩經』に、無衣無褐、何以卒歲とあり、卒は終なり、雀乳、陳休奕の詩に、雀乳空井中とあり、柴車、敝惡の車を言ふ、『後漢書』に、趙壹、獨柴車草屏とあり、章懷太子註に、『韓詩外傳』周子高對齊景公曰、臣聞君之駟、疏食惡肉、可得而食、駑馬柴車、可得而乘とあり、羸牸、『世說』に、負重致遠、曾不若一羸牸とあり、草屨、『漢書』に、卜式既爲郎、布衣草履而

牧羊、師古曰、蹠即草駐也、南方謂之蹠、字本作蹠とあり、豪稊、稊は穉なり、北燕、朝鮮の間、之を稗と謂ひ、關の東西、之を蜀と謂ひ、或は禾と謂ひ、南楚之を稗と謂ふ、

【大意】舊穀は漸漸に盡きんとし、新苗の佳惡は豫め希ふ可からず、老年に及んで口に愛するものは粥なり、而も歲終らんとして身に著ける衣は無し、雀は青苔生する井畔に乳を施し、雞は午時を報じて白版扉頭に鳴く、羸幹に柴車を駕して之を牽かせ、或は草屨を穿ちて豪豬を攸す、雨多き爲め紅榴は實が折け、新秋なるが爲め綠芋は葉が肥ゆ、田頭に食し終りて桑下に休憩し、舍に旁うて草中に歸る、住處は其の名を愚谷と稱す、田家にして且愚谷、是非を論ずるの價値固より無し、人の類はしく問ふこと莫かれ、

【餘論】此の篇、田家に託して、自家の境地を敍す、體、淵明を學んで、自然を主と爲す、乃ち彼の古體を變じて排體と爲す、廣瀨淡窗が一祖四宗の詩、其れ此等のものを以て旌章と爲すべし、但し此の詩亦七韻、前の山中示弟は五韻、案ずるに排律は正律の變、正律は已に四韻なり、三韻にあらず、偶數を貴ぶべし、曾て沈歸愚の說を聞く、詩之長律、自顏謝諸公開出、至唐始盛、初只六韻、後增至八韻、少陵增至百韻、又駱賓王が靈隱寺の評に曰く、楊師道還山宅、五韻、此篇七韻、初唐有之、後人用偶不用奇、乃見正格、余始め歸愚が此の說ありしを知らず、此の說あるを知つて、良に知己を得たるの感あり、

過盧員外宅看飯僧共題

盧員外が宅を過ぎ、僧に飯するを看、共に題す

三賢異七聖、青眼慕青蓮、
三賢七聖に異なり、青眼にして青蓮を慕ふ、

乞飯從香積、裁衣學水田、
飯を乞うて香積に從ひ、衣を裁して水田を學ぶ、

上人飛錫杖、檀越施金錢、
上人錫杖を飛ばし、檀越金錢を施す、

趺坐簷前日、焚香竹下煙、
趺坐す簷前の日、焚香す竹下の煙、

寒空法雲地、秋色淨居天、
寒空法雲の地、秋色淨居の天、

身逐因緣法、心過次第禪、
身は因緣の法を逐ひ、心は次第の禪を過ぐ、

不須愁日暮、自有一燈然、
須ひず日暮を愁ふることを、自ら一燈の然ゆるあり、

【注解】三賢、三賢位の略稱、十住の位に處する菩薩、十行の位に處する菩薩、十回向の位に處する菩薩、之を三賢とすと謂ふ、七聖、四信行、隨法行、信解、見得、身證、時解脫、不時解脫、之を七聖と謂ふ、同じく聖と曰ふも、二は一より進み、三は二より進み、乃至七は六より進み、各の其の得力に因つて、此の名を得し人なり、青眼、晉の阮籍は俗士を視るに白眼、高士を視るに青眼を以てせり、青蓮、『大般若經』に、世尊眼相修廣、譬如青蓮花葉とあり、又、『維摩羅詰經』に、目淨修廣如青蓮とあり、乞飯、『維摩羅詰經』「香積佛品」に、有菩薩名衆香、佛號香積、與諸菩薩、方共坐食とあり、水田、衣を裁製するに、田畦の如くす、田は必ず水の左右に通ずるが如く、衣も絲にて、全部を縫へば、水、通ずる餘はず、是に於て馬齒縫、寶瓦縫等の名目ありて、全部を縫はず、縫目に二指程度、自由に入れる空隙を置く、故に之を水田衣と名く、慈水、智水、總て人の命を助く、『僧祇律』『四分律』に詳說す、

ぜり。上人、一般に德の高き僧を稱するが、今の上人は『維摩詰經』「弟子品」の非上人、非不上人の語を用ふ、飛錫杖、東西に行脚するを謂ふ、必ずしも虛空に飛ばす意味にあらず、檀越、梵語の陀那鉢底の略稱なり、施主の意義なり、我は法を施し、彼は財を施す、一語を以て彼我に通ずるが、今は專に普通の施主の意味とす、金錢、『賢愚經』に、波婆梨、自婚し所有、悉設大會、一切部衆、設會已訖、大施摠斷、人得五百金錢」とあり、法雲地、修行者が進境の階段に十地あり、初地を歡喜地と稱し、最上の十地を法雲地と稱す、今其の名を借りて以て、空虛の高きを言ふ、淨居天、欲界天、色界天、無色界天、之を三界と曰ふ、其の色界天の中に更に十八天あり、其の十八天の最光寛するを淨居天と名く、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天、此の五天を總稱して淨居天と謂ふなり、今借りて以て盧が家の高貴に在るを譬ふ、因緣法、『華嚴經』に、一切世間從緣生、不離因緣見諸法」とあり、『法華經』には、大通智勝如來、廣說十二因緣法」とあり、彼と此と結合するときは、因緣法生じ、彼と此と分離するときは因緣法滅す、生も死も、其の自然に任す、乃ち因緣は自然と同意義の語なり、次第禪、一より二、二より三、次第に進む禪、頓禪の反對なり、

【題義】盧員外が僧を招待して、淨齋を供養す、右丞も其の席に列し、此の詩を賦したるなり、

【大意】三賢は貴きは貴きなるも七聖とは差異あり、盧君は青眼にして青運を慕ふは七聖の人に近きなり、今僧を請じて供する所は香積の淨飯なり、請を受けて來る所の僧は如法殊勝なる水田衣を著用する、上人は錫杖を飛ばして來り、員外は淨金錢を之に布施する、三人共に趺坐して簷前の日に對し、又香を焚いて竹下に煙を生ずるを見る、其の居處は高くして法雲地にも譬ふべく、又淨居天にも譬ふ可し、況んや塞空は頑空にあらず、秋色は無色にあらず、員外が身は因緣法を追逐し、員外が心は頓禪の利根にて、次第の鈍根には超過する、余も同席して其の法味を嘗む、何ぞ日暮を愁へんや、自から一燈の耿耿として然ゆるあり、

濟州過趙叟家宴

濟州に趙叟が家を過ぎて宴す

雖與人境接閉門成隱居。　人境と接すと雖も、門を閉ぢて隱居を成す、
道言莊叟事儒行魯人餘。　道言莊叟の事、儒行魯人の餘、
深巷斜暉靜閭門高柳疎。　深巷斜暉に、閭門高柳疎なり、
荷鋤脩藥圃散帙曝農書。　鋤を荷うて藥圃を脩め、帙を散じて農書を曝す、
上客搖芳翰中厨饋野蔬。　上客芳翰を搖かし、中厨野蔬を饋る、
夫君第高飲景晏出林閭。　夫君第高飲、景晏れて林閭を出づ、

【餘論】此の篇、亦七韻の變體、十四句、七十字、而して結末二句を除く外、佛語を挾入せざる句は無し、而も其の運用の妙、所謂一心に存する者、後來、東坡、山谷、寺梵に關する詩、多く此等の詩に胚胎し來るなり、

【注解】道言、『南史』『顧歡傳』に、佛言華而引、道言實而抑とあり、莊叟、『北史』『蕭大圜傳』に、法隱牧羊、協潘生之志、蓄雜種黍、廬莊叟之言とあり、儒行、『禮記』に、哀公曰、敢問儒行とあり、散帙、謝靈運の詩に、散帙閒所知、帙は書衣、散は散開なり、林閭、顏延年の詩に、林閭時晏閒とあり、李善曰く野外之林と謂ふ、閭は里門なり、

【大意】趙叟が家は市街と接近して居るが、叟は常に門を閉ぢて隱居を成す、口に言ふ所は莊周が空虛の說なるも、身に行ふ所は孔子が仁義の道に在り、深巷の斜暉人行希なれば良に靜なり、隱者の閉門は秋暮なれば高柳も陰甚だ疎なり、或は鋤を荷うて藥圃を畊脩し、或は書帙を散開して農書を秋陽に曝す、偶ま至る上客は詩を賦し字を書す、中厨には蘿蔔や芋を饋る者あり、夫君は第高飮するのみ、日景が晏るるに及んで林間を出でて散策する、

【餘論】此の篇六韻、首尾皆趙叟が事を敍して、餘事に及ばず、詩體は淵明を學んで、能く其の髓を得たるものなり、高柳と高飮、之を小疵と爲す、顧可久評して正大古雅と曰ふ、古雅は可なり、正大とは何の謂ひぞ、

青龍寺曇壁上人兄院集　并序

青龍寺曇壁上人兄の院集　并に序

吾兄大開蔭中。明徹物外。以定力勝敵。以慧用解嚴。深居僧坊。傍俯人里。高原陸地。下映芙蓉之池。竹林果園。中秀菩提之樹。八極氛霽。萬彙塵息。太虛寥廓。南山爲之端倪。皇州蒼茫。渭水貫於天地。經行之後。趺坐而閒。升堂梵筵。餌客香飯。不起而游覽。不風而清涼。得世界於蓮花。記文章於貝葉。時江寧大兄。持片石命維序之。詩五韻坐上成。

吾が兄大に蔭中を開き、明かに物外に徹す、定力を以て敵に勝ち、慧用を以て解嚴す、僧坊に深居し、人里に傍俯す、高原陸地、下は芙蓉の池に映じ、竹林果園、中は菩提の樹秀で、八極氛霽れ、萬彙塵息す、太虛寥廓として、南山之が端倪を爲す、皇州蒼茫として、渭水天地に貫き、經行の後、趺坐して閒、堂に升れば梵筵、客に餌するは香飯、起たずして游覽し、風ならずして清涼なり、世界を蓮花に得、文章を貝葉に記す、時に江寧大兄、片石を持し、維に命じて之に序せしむ、詩五韻坐上に成る、

高處敞招提。虛空詎有倪。
坐看南陌騎。下聽秦城雞。
渺渺孤煙起。芊芊遠樹齊。
青山萬井外。落日五陵西。
眼界今無染。心空安可迷。

高處招提敞かに、虛空詎ぞ倪あらん、
坐看す南陌の騎、下聽す秦城の雞、
渺渺として孤煙起り、芊芊として遠樹齊し、
青山萬井の外、落日五陵の西、
眼界今無染、心空安んぞ迷ふ可けん、

【注解】蔭中。此の篇義ほ、有形無形共に通ずるが、今は有形として青龍寺中に別に樹蔭中を開拓して、一院を此に設け以て上人が

住するものならん、定力、戒力、定力、慧力、之を三學と曰ふ、定は禪定、禪を修し、此の心が定まる故に何事にも狐疑せず、又奮怒せざるなり、慧用、慧は學問を曰ふ、學問の用、卽ち活用を以て總ての疑問を解釈する、僧坊、『梵網經』及び『佛報恩經』に出づ、僧坊は一院を指す、別に僧房あり、一院中の一房を指す、高原陸地、『淨名經』に、高原陸地、不ゝ生ニ蓮花一とあり、今は蓮花を生ずとの意を含む、竹林果園、班固が「西都賦」に、竹林果園、芳草甘木とあり、竺土にも竹林精舍あり、菩提之樹、菩提は譯して道と曰ふ、卽ち道樹也なり、梵に畢鉢羅樹と謂ふ、歎幹黄白にして、枝葉青翠、冬夏凋落せず、佛陀が道を成ぜしは此の樹下に於てす、玄奘曰く、佛在世、高さ數百尺、屢ば殘伐を經、猶高さ四五丈と、『西域記』にあり、松谷は『唐會要』を引きて一名婆羅樹と曰ふは誤る、婆羅樹は堅固樹と譯して、佛陀の入滅は北の樹下に於てす、當縁なること同じきを以て或は誤るものあり、八林、『雜南子』に出づ、東西南北、及び東西南北の四隅なり、要するに目の絶まる處なり、萬象、萬象と同じ、太虛、天を指す、太虛遊間は孫綽が「天台山賦」中の語なり、渴倪、『莊子』に、反覆詭始、不ゝ知ニ端倪一とあり、山の終始を測り知る能はざるを謂ふ、皇州、都城は勿論、其の畿内を謂ふ、經行、『法華經』に、經行林中、勤求佛道とあり、林間を徐歩して、運動することなり、但し又手して胷に當て、牛王、象王が歩む如くす、梵筵、清淨の食筵、得世界於蓮花、『華嚴經』に、普賢菩薩、告ニ大衆一言、諸佛子、此十不可說佛刹微塵數香水海、在ニ華藏莊嚴世界海中一、如ニ天帝網一、分布而住、此最中央香水海、名ニ無邊妙華光一、以現ニ一切菩薩形一、摩尼王髻爲ニ底、出ニ大蓮花一、名ニ一切香摩尼王莊嚴一、有ニ世界種一而住、其上名ニ普照十方熾然寶光明一、以ニ一切莊嚴具爲ニ體とあり、江寧大兄、王昌齡、字は少伯、江寧の人、進士に第し、祕書郎に補す、汜水の尉に遷る、無行を譏らず、龍標の尉に貶せらる、世亂るるを以て郷に還り、刺史閭丘曉の爲めに殺さる、昌齡、工詩、緒清にして思清、時に王江寧と謂ふ、招提、四方僧物と譯す、今日の財團法人とか、社團法人とか云ふ意義、道を同じうする人が、集團する處、卽ち寺なり、芊芊、樹色にあれ、草色にあれ、其の盛んなる形容を謂ふ、

【題義】　青龍寺は長安に在る名刹、此に住する曇壁上人兄が小院にて參集する、參集するものは王昌齡と右丞が弟の縉と裴迪、上人を交ふれば合して五人なり、

【大意】　上人卽ち吾が兄は大に暗處を開拓して、內外共に明徹にせり、禪定の力を以て外敵に勝ち、修慧の力を以て深義を解き、僧坊に深居しながら、人里を傍觀して、救度の道を忘れず、高原陸地、下には芙蓉の梵池映じ、竹林果園、中には菩提の樹秀づ、四方氣霽れて、萬象一點の塵も無し、太虛の色は寥闊として、南山之が爲め特に端倪す、皇城の四方蒼茫として、渭水は天地を貫流するが如し、上人は經行の後、趺坐して閒、夏に升堂して梵筵を設け、客に供するに淨飯を以てす、特に起立せざるも游覽し、特に風無きも清涼なり、世界を蓮花の如く清白のものに修得し、文章を貝多羅葉に橫記す、時に江寧大兄は、一片の石を持し來り、余に命じて之に序せよと云ふ、是に於てか五韻の詩、席上に於て成す、『高處なるが故に招提が明敵に見える、虛空は固より寥闊なり、詎ぞ倪あらん、坐しながら南陌を奔る騎者を看、又下を俯して秦城に鳴く雞を聽く、渺渺として孤煙起り、芊芊として遠樹齊し、青山は萬井の外を圍繞し、落日は五陵の西に在り、眼に入るもの染汙するもの全く無し、心空の理に於て迷ふべきもの亦無し、

【餘論】　此の篇、序已に清梵、詩も亦清梵、骨子を高處の二字に置き、言言句句、高處を離れず、梵字の詩として上乘に屬す、本集に他三家の詩を附す、乃ち左の如し、

王縉

林中空寂舍。階下終南山。高臥一床地。廻看六合間。浮雲幾處滅。飛鳥何時還。問義天人接。無心世界閒。誰知大隱客。兄弟自追攀。

王昌齡

本來清淨處。竹樹隱幽陰。簷外含山翠。人間出世心。圓通無有象。聖境不能侵。眞是吾兄法。何妨友弟深。天香自然會。靈異識鐘音。

裴迪

靈境信爲絕。法堂出塵氣。自然成高致。向下看浮雲。遂逸峯巒列。參差閭井分。林端遠堞見。風末疎鐘聞。吾師久禪寂。在世超人羣。

王右丞集卷十一終

王右丞集　卷十二

近體詩　十六首

春過賀遂員外藥園

春賀遂員外が藥園に過ぎる

前年槿籬故。今作藥欄成。
香草爲君子。名花是長卿。
水穿盤石透。藤繫古松生。
晝畏開厨走。來蒙倒屣迎。
蔗漿菰米飯。蒟醬露葵羹。
頗識灌園意。於陵不自輕。

前年槿籬故りたり、今藥欄を作りて成る、
香草君子と爲す、名花是長卿、
水は盤石を穿ちて透り、藤は古松に繫りて生ず、
晝は厨を開きて走るを畏れ、來は屣を倒にして迎ふるこ[ことを蒙る、]
蔗漿菰米の飯、蒟醬露葵の羹、
頗く識る園に灌ぐの意、於陵自ら輕んせず、

【注解】槿籬、沈約の詩に槿籬疎復密とあり、人家多く木槿を種ゑ、以て籬落と作すなり、香草、楚辭章句に、離騷の文、詩に依つて興を取り、類を引きて譬喩す、故に善鳥香草、以て忠貞に配し、惡禽臭物、以て讒佞に比す、靈修美人、以て君に擬べ、宓妃佚女、以て賢臣に譬ふ、虬龍鸞鳳、以て君子に託し、飄風雲霓、以て小人と爲す、長卿、司馬長卿を謂ふ、風流艷麗の意に喩ふ、或は謂ふ、

司馬長卿にあらず、草中の徐長卿なりと、松谷曰く、『蜀本草』に、徐長卿、下邳川澤の間に生じ、苗は小麥に似、兩葉相對し、三月苗青く、七月八月、子を著け、蘼蕪子に似て小なり、九月苗實、十月凋む、奇異珍寶にあらず、名花と寶貴かず、開厨、晉の顧愷之、世に三絶と稱す、才絶、畫絶、癡絶、嘗て一厨の畫を以て、鎖して其の廚に題し、桓玄に寄す、曾其の深く珍惜する所の者、桓玄乃ち其の厨後を發きて、畫を竊取し、而して緘閉舊の如くし、以て之を還す、鈴きて云ふ未だ開かずと、愷之、封題初の如くにして、但其の畫を失へるを見、直ちに云ふ、妙畫、畫に通じ、變化して去る、亦猶ほ人の登仙するがごとしと、了に怪しむ色無し、倒屣、王粲の事、前に所ぜり、蒟醬、劉潤林が「蜀都賦」の注に、蒟醬は樹に緣りて生ず、其の子、桑椹の如く、熟時正に青し、長さ二三寸、醬を以て蘸して之を食ふ、味香烈、五觸を調ふとあり、

【題義】春日に員外郎の官たる賀遂が藥園に過ぎりて作れる詩なり、

【大意】前年に過訪の時は槿籬が整正ならざりし、今年過訪して見れば藥欄が整頓してある、藥園中の香草は良に君子の如く、名花は文人に譬ふれば司馬長卿の如くなり、園中を流るる水は盤石を穿ちて透明なり、而して藤蘿は古松に纏繫して生ず、此の藥園の畫圖を人に示さば人に竊取せらるるの畏あり、來客あれば主人は屣を倒にして迎ふる切情あり、客を遇するに蔗漿菰米の飯や、蒟醬露葵の羹の類の如き珍品を以てせらる、主人が灌園の意を僕は能く識る、其の意は古の於陵の如く閒居して自ら輕んせざるものと同じ、

【餘論】此の篇は六韻、排の正體とす、七八の二句、顯可久曰く、顯愷之と王粲が故事を隱用して言ふ、右丞善畫、當に是賀が畫を索めて違はざるなるべし、故に戲れに云ふ開厨畫走る、而も來つて倒屣の迎に就いて以て畫かんのみ、或は此の意もあるならん、蓋し題目に此の戲の意味無く、且自ら此に過ぎるなり、來るを待つて過ぎるは不審なり、

河南嚴尹弟見宿敝廬訪別人賦十韻

河南の嚴尹弟敝廬に宿せらる、別人を訪うて賦す、十韻

上客能論道、吾生學養蒙。　上客能く道を論ず、吾が生蒙を養ふことを學ぶ、
貧交世情外、才子古人中。　貧交世情の外、才子古人の中、
冠上方簪豸、車邊已畫熊。　冠上方を簪豸に、車邊已に熊を畫く、
拂衣迎五馬、垂手憑雙童。　衣を拂うて五馬を迎へ、手を垂れて雙童に憑る、
花醪和松屑、茶香透竹叢。　花醪松屑に和し、茶香竹叢に透る、
薄霜澄夜月、殘雪帶春風。　薄霜夜月澄み、殘雪春風を帶ぶ、
古壁蒼苔黑、寒山遠燒紅。　古壁蒼苔黑く、寒山遠燒紅なり、
眼看東候別、心事北山同。　眼に看る東候の別、心事北山同じ、

爲學輕先輩。何能訪老翁。　學を爲して先輩を輕んず、何ぞ能く老翁を訪はん、
欲知今日後。不樂爲車公。　今日の後を知らんと欲せば、樂まざるは車公の爲なり、

【注解】 髦蒙、『周易』に蒙以養正とあり、聖人の蒙を養ふは、道の自然を養ふことなり、簪冠、縉紳は官名、一角の神羊、克く曲直を判ずるを以て、法官の冠に、此の形を爲るなり、貴族、漢の武帝の天漢四年、諸侯王に令し、大國は朱輪、特虎を前にし、兒を左にし、棄を右にす、小國は朱輪、特熊前疾に居る、棄左右に居るは卿車なり、花醪、左思が「蜀都賦」に「鬱以清醪」とあり、李周翰曰く醪は清酒なり、候、封土、壇を爲り、以て里を記するを謂ふ、唐制、五里要候、十里雙候とあり、塢に作る亦可、北山、『車公詩說』に、北山大夫、行役、不ゝ得ゝ以養ゝ其父母ゝ而作ゝ此詩ゝとあり、先輩、松谷曰く、先輩に三義あり、一は尊敬の稱と爲す、國史補に云ふ、進士互に相推敬す、之を先輩と謂ふ、又、唐の世崇人、已第の者を呼んで先輩と爲す、又、先達の人を稱して先輩と謂ふ、今の句は先達の義なり、車公、『晉書』に、車胤、字は武子、賞會に善し、盛坐有る毎に、胤在らざれば、皆云ふ樂しからずと、謝安游集の日、輒ち宴を開きて之を待つ、

【題義】 河南府の嚴尹弟が右丞の家に宿せられ、更に兩人にて別人を訪ひ、此の十韻の詩を賦するなり、

【大意】 上客は能く道を論じ、吾生は蒙を養ふことを學ぶ、貧にして交を改めざるは世情の外なり、眞の才子は古人の中に於て求むべし、冠上に豸を簪したるは是司直の官なるを知る、車邊に熊を畫けるは是上卿なるを知る、其の來觀を聞き衣服を整頓して五馬を迎へ、手を垂れて二人の童子に扶けらる、別人は我等に供せらるるに花醪を松屑に和したるものを以てせらる、而して煎茶の香氣は竹叢に透る、薄霜は地に在り、夜月は天に澄む、周圍に殘雪あるも已に春風の氣を帶ぶ、古壁を看れば蒼苔の色黑く、寒山を仰げば遠燒の光紅なり、眼には東候の區別あるを見るも、心事は孝にして古の北山と同じ、學問の力已に先達を輕視する、然るに何ぞ能く老翁を訪ひたるぞ、今日より後の燕集に、余が樂しまざるは、君が其の會に列席する能はざればなり、

【餘論】 此の篇は解すべく、亦解すべからざる點もあり、訪別人の三字他に類の無き題目、餘計な文字に思へるが、右丞が家に宿するのが主要で無く、別人を訪ふのが主要ならん、卽ち花醪の句の如きも、右丞が彼に供するにあらずして、別人が彼に供することにして意味生ず、若し右丞が供するものとせば、自ら花醪と稱する理由なし、花醪以下の六句、句として良に清雅なるも、忽ちにして夜月、忽ちにして遠燒、想としては密ならざるの感あり、而して上二字、車二字、爲二字、要するに右丞集に在つては上乘のものにあらず、

送祕書晁監還日本國　并序

祕書晁監が日本國に還るを送る、并に序

舜覲羣后。有苗不格。禹會諸侯。防風後至。動干戚之舞。興斧鉞之誅。乃貢九牧之金。始頒五瑞之玉。我開元天地大寶聖文神武應道皇帝。大

道之行。先天布化。乾元廣運。涵育無垠。若華爲東道之標。戴勝爲西門之候。豈甘心于卭杖。非徵貢於苞茅。亦由呼韓來朝。舍于蒲萄之館。卑彌遣使。報以蛟龍之錦。犧牲玉帛。以將厚意。服食器用。不寶遠物。百神受職。五老告期。況乎戴髮含齒。得不稽顙屈膝。海東國日本爲大。服聖人之訓。有君子之風。正朔本乎夏時。衣裳同乎漢制。歷歲方達。繼舊好於行人。滔天無涯。貢方物於天子。司儀加等。位在王侯之先。掌次改觀。不居蠻夷之邸。我無爾詐。爾無我虞。彼以好來。廢關弛禁。上敷文教。虛至實歸。故人民雜居。往來如市。晁司馬結髮游聖。負笈辭親。問禮於老聃。學詩於子夏。魯借車馬。孔丘遂適於宗周。鄭獻縞衣。季札始通於上國。名成太學。官至客卿。必齊之姜。不歸娶於高國。在楚猶晉。亦何獨於由余。游宦三年。願以君羹遺母。不居一國。欲其晝錦還鄉。莊舄既顯而思歸。關羽報恩而終去。於是馳首北闕。裹足東轅。餞命賜之衣。懷敬問之詔。金簡玉字。傳道經於絶域之人。方鼎彝樽。致分器於異姓之國。瑕邪臺上。廻望龍門。碣石館前。復然鳥逝。鯨魚噴浪。則萬里倒廻。鵠首乘雲。則八風卻走。扶桑若齊。鬱島如萍。沃白日而簸三山。浮蒼天而吞九域。黃雀之風動地。黑蜃之氣成雲。淼不知其所之。何相思之可寄。嘻去帝鄉之故舊。謁本朝之君臣。詠七子之詩。佩兩國之印。恢我王度。諭彼蕃臣。三寸猶在。樂毅辭燕而未老。十年在外。信陵歸魏而逾尊。子其行乎。余贈言者。

舜、羣后を覲して、有苗格らず、禹、諸侯を會して、防風後れて至る、干戚の舞を動かし、斧鉞の誅を興して、乃ち九牧の金を貢し、始めて五瑞の玉を頒つ、我が開元天地大寶聖文神武應道皇帝、大道之行ひ、天に先だちて化を布く、乾元運を廣め、涵育垠無し、若華を東道の標と爲し、戴勝を西門の候と爲す、豈卭杖に甘心せんや、苞茅を徵貢するにあらず、亦、呼韓來朝し、蒲萄の館に舍り、卑彌使を遣はし、報するに蛟龍の錦を以てするに由る、犧牲玉帛、以て厚意を將ひ、服食器用、遠物を寶とせず、百神、職を受け、五老、期を告ぐ、況んや戴髮含齒、稽顙屈膝せざるを得んや、海東の國、日本を大なりと爲す、聖人の訓に服して、君子の風あり、正

朝、夏の時に本き、衣裳、漢の制に同じ、歳を歴て方に達し、舊好を行人に繼ぎ、天に滔りて涯無し、方物を天子に貢す、司儀等を加へて、位王侯の先に在り、掌次覲を改めて、蠻夷の邸に居かす、我爾を詐る無し、爾我を虞ること無し、彼好を以て來る、關を廢し禁を弛うす、上文敎を敷き、虛にして至り實にして歸る、故に人民雜居、往來市の如し、晃司馬、結髮、聖に游び、笈を負うて親を辭し、禮を老聃に問ひ、詩を子夏に學ぶ、魯、車馬を借して、孔丘遂に宗周に適き、鄭、縞衣を獻じて、季札始めて上國に通ず、名は太學に成り、官は客卿に至る、必ず齊の姜、高國に歸娶せず、楚に在るも猶ほ晉のごとし、亦何ぞ由余に獨りせん、宦に游ぶこと三年、願はくは君の羹を以て母に遺らん、一國に居らず、其の晝錦鄕に還らんと欲す、莊舄既に顧にして歸を思ひ、關羽恩を報じて終に去る、是に於て北闕に馳首し、東轅に裹足す、命賜の衣を篋にし、敬問の詔を懷にす、金簡玉字、道經を絕域の人に傳ふ、方鼎彝樽、分器を異姓の國に致す、琅邪臺上、龍門を廻望し、碣石館前、夐然として鳥の逝くがごとし、鯨魚浪を噴くときは、萬里倒に廻り、鵠首雲に乘るときは、八風卻き走る、扶桑蒼の若く、鬱島萍の如し、白日を沃ぎて三山を籠り、蒼天を浮べて九域を呑む、黃雀の風地を動かし、黑蜃の氣雲を成す、森として其の之く所を知らず、何ぞ相思の寄す可き、嘻帝鄕の故舊を去りて、本朝の君臣に謁し、七子の詩を詠じ、兩國の印を佩ぶ、我王度を恢にし、彼の蕃臣に論す、三寸猶在り、樂毅

蒸を辭して未だ老いず、十年外に在り、信陵魏に歸りて遂よ尊し、子其れ行けや、余は言を贈るものなり、

積水不可極。安知滄海東。
九州何處遠。萬里似乘空。
向國唯看日。歸帆但信風。
鰲身映天黑。魚眼射波紅。
鄕樹扶桑外。主人孤島中。
別離方異域。音信若爲通。

積水極む可からず、安んぞ知らん滄海の東、
九州何れの處か遠き、萬里空に乘るに似たり、
國に向つて唯日を看、歸帆但風に信す、
鰲身は天に映じて黑く、魚眼波を射て紅なり、
鄕樹扶桑の外、主人孤島の中、
別離方に異域、音信若爲ぞ通せん、

【注解】有苗、即ち三苗族なり、舜、位を攝する時、三危に竄す、即位後、又分別して之を遠徙す、禹攝位の初、又衆を恃んで反亂す、禹、將に之を伐たんとす、舜曰く、不可なり、德を上ぶこと厚からず、而して武を行ふは非道なり、乃ち修訓三年、干戚の舞を執る、有苗乃ち服す、防風、『博物志』に、禹、天下を平らげ、諸侯を會稽の野に會す、防風氏後れて至る、之を殺す、九牧之金、『左傳』に、昔、夏の德あるや、遠方、物を圖し、金を貢し、九牧、鼎を鑄物に象るとあり、牧は州の長官を曰ふ、五瑞之玉、公は桓圭、侯は信圭、伯は躬圭、子は穀璧、男は蒲璧を執る、是の圭璧を五等の瑞と爲す、諸侯、之を執りて、以て王者の瑞信と爲す、故に瑞と稱す、開元、『唐書』『玄宗本紀』に、天寶八載、閏六月丙寅、羣臣上尊號、爲開元天地大寶聖文神武應道皇帝、とあり、先天、『周易』に、先ヒ天

那天弄ゝ造、後ゝ天而奉ニ天時一」とあり、『藝文類聚』『書鈔』『大禹謨』に、帝堯虞舜とあり、孔安國曰く、廣は覆ふ所のもの大なるを謂ふ、運は及ぶ所のもの遠きを謂ふ、涵育、『宋書』『顧愷之傳』に、聖人は虛懷以て涵育し、靈明以て潤色すとあり、無垠、屈原九章に縣澎湃之無垠とあり、垠は涯なり、若華、多くの本草類に作る、『全唐詩錄』及び『唐詩類苑』若華に作る、若木扶桑の華を謂ふ、都は雜識なり、『山海經』に、西王母、其の狀、人の如く、豹尾虎齒にして善く嘯く、蓬髮戴勝とあり、蹲は蛙人の首の飾なり、西經ニ昆崙之邱一なれば、西方の絲を言ふ、候は候門なり、邛杖、『史記』に、博望侯張騫、大夏に使して來りて言ふ、大夏に居る時、蜀布邛竹杖を見る、從來する所を問はしむ、曰く、東南身毒國より、數千里ばかりにして、蜀の賈人の市に得たり、或は聞く邛西二千里ばかりにして身毒國ありと、騫因つて盛言す、大夏、漢の西南に在り、中國を慕へども、匈奴が其の道を隔つるを患ふ、誠に蜀と身毒國に通ずれば、盡侵近にして利有りて害無し、是に於て天子、乃ち王然于、柏始昌、呂越人等をして西夷に間出せしめ、西指して身毒國を求むと、『史記』『正義』曰く、邛都邛山、此の竹を出す、因つて邛竹と名く、苞茅、束れたる「チガヤ」なり、『左傳』僖公四年に、齊侯、陳侯の師を以て蔡を侵す、蔡潰ゆ、遂に楚を伐つ、楚子、師と言はしめて曰く、君は北海に居り、寡人は南海に處りて、唯是れ風する馬牛も及ばざるなり、君の吾が地に涉らんとは虞らざりしに、何の故ぞや、管仲對へて曰く、昔、召康公、我が先君大公に命じて曰く、五侯九伯、汝實に之を征し、以て周室を夾輔せよと、我が先君に履を賜ひて、東は海に至り、西は河に至り、南は穆陵に至り、北は無棣に至れり、爾の貢する苞茅入らず、王の祭、供ぼらず、以て酒を縮らすこと無し、寡人是れ徵すとあり、蒲萄之館、漢の元壽二年に、阜于及び烏孫、來朝せるを以て、宴帝、之を上林苑の蒲萄宮に舍す、呼韓邪は右丞の誤用なり、阜彌、『魏志』に後國亂る、相攻伐する歷年、乃ち一女子を共立して王と爲す、名けて阜彌呼と曰ふ、鬼道に事へて能く衆を惑ほす、景初二年六月、倭女王、大夫難升米等を遣はし、郡に詣で、天子に詣し朝獻せんと求む、其の年十二月、詔書倭女王に報じて、汝が獻する所の男生□四人、女生□六人、班布二疋二丈、汝が忠孝我甚だ哀れむ、今絳地交龍錦五匹、絳地錦粟罽十張、蒨絳五十匹、紺青五十匹、以て汝が貢直に答ふ、不實遠物、『尚書』益稷に、遠物を寶とせざれば、則遠人格るとあり、百神受職、『禮記』に、禮行ニ于郊一而百神受ゝ職焉とあり、『孔穎達正義』に、百神天之羣臣也、王郊ゝ天佞ゝ禮則星辰不ゝ忒、故云ニ受職一とあり、五老、『宋書』に、堯、舜等を率ゐ、首山に昇り、河渚に遊ぶ、

五老あり游ぶ、蓋し五星の精なり、相謂つて曰く、何圖斯に來らんとす、帝に告ぐるに期を以てす、我を知る者は重瞳、黃鵠、五老因つて飛んで流星と爲り、上りて昴に入るとあり、鼓琴含商、『列子』に、七尺の軀、手足の異、鼓琴含商、倚りて趨る者、之を人と謂ふとあり、王侯之先、『漢書』『匈奴傳』に、呼韓邪單于、天子に甘泉宮に朝す、漢、館するに殊禮を以てし、位、諸侯王の上に在り、贊謁、臣と稱して、名を稱せず、掌次、『周禮』に、掌次、王次等の法を掌る、重黎直案、大次小次の別あるなり、蠻夷之邸、鴻臚寺なる役邸あり、蠻夷來朝すれば皆此に置く、我無の八字は、左傳に、宋、楚と平ぐ、華元、質と爲る、盟して曰く、我無ニ爾詐一、爾無ニ我虞一とあり、問禮、學詩、共に『家語』に出づ、孔子問ニ禮於老聃一、子夏問ニ子詩一、能通ニ其義一とあり、魯僖車馬、『家語』に、孔子、南宮敬叔に謂つて曰く、吾聞く老聃、古に博く今を知り、禮樂の原に通じ、道德の歸を別らむと、則ち吾が師なり、今、將に往かんとす、對へて曰く、謹んで命を受けん、遂に魯君に言うて曰く、孔子將に周に適きて、先王の遺制を觀、禮樂の絕まる所を考へんとす、斯れ大業なり、君曷ぞ乘資の臣を以て請うて與に往かざる、公曰く諾、孔子に與ふるに車一乘、馬二匹を以てす、竪子、侍御敬叔、俱に周に至る、縞衣、『左傳』襄公二十九年に、吳の公子札、鄭に聘し、子產を見る、蓋相識の如し、之に縞帶を與ふ、子產、紵衣を獻ず とあり、乃ち縞帶と紵衣とを右丞誤記せしなり、上國、『左傳』昭公二十七年に、吳子、延州來の季子を以て上國に聘せしむとあり、服虔云ふ、上國は中國なり、蓋し吳は東南に詳在し、地勢卑下、中國は其の上流にあるを以て、故に中國を謂つて、上國と爲すなり、齊之姜、『詩經』に、豈其娶ゝ妻、必齊之姜とあり、高國、『左傳』に、齊侯、晉を伐つ、寅僖の敵無存の父、將に之に室せんとす、群して以て其の弟に與へて曰く、此の役や死せずんば、反りて必ず高國に娶らん、杜預曰く高氏國氏は、齊の貴族なり、無存、必ず功あり、還りて卿相の女を取らんと欲するなり、在楚猶晉、『左傳』に、荀有ニ寡君一、在ゝ楚猶ゝ在ゝ晉也とあり、『史記』『秦本記』に、戎王、由余を以て秦に使せしむ、由余は其の先晉人なり、亡げて戎に入る、晉言を能くす、繆公の賢なるを聞き、故に由余をして、秦を觀しむ、秦の繆公、示すに宮室積粟を以てす、由余曰く鬼をして之を爲らしめしならば、則ち神を勞せしならん、人をして之を爲らしめしならば、則ち亦民を苦しめしならん、繆公、之を怪み、問うて曰く、中國は詩書禮樂法度を以て政を爲す、然るに暗主に亂る、今戎夷は此なし、何を以てか治を爲す、亦難からずや、由余笑うて曰く、此れ乃ち中國の亂るる所以なり、夫れ上聖黃帝の禮樂法度を作

怨せしより、身以て之に先だち、僅かに以て小しく治まる、其の後世に及んでは、日に以て驕淫にして、法度の威を阻み、以て下を貴晋す、下、鼎鑊するときは、則ち仁義を以て上を愚望す、上下交も爭ひ怨みて、相蒐狀し、宗を滅ぼすに至るは、皆此の類を以てなり、或爽は然らず、上は淳德を含みて以て其の下を感し、下は忠信を懷きて以て其の上に事へ、一國の政は豁ほ一身の治のごとし、治まる所以を知らず、此れ眞に聖人の智なり、是に於て鄒公退いて内史膠に問うて曰く、孤聞く鄰國に聖人あるは、敵國の憂なりと、今由余は賢なり、某人の客なり、將に之を奈何せんとする、膠曰く、或王は詐譎に慮り、未だ中國の聲を聞かず、君試みに其れに女樂を遺りて、以て其の志を奪ひ、由余の爲めに請うて、其の間を疎くし、留めて遺ること莫く、以て其の期を失せしめよ、或王之を惟しみ、必ず由余を疑はん、君臣間あれば、乃ち席にすべきなり、且或王は樂を好む、必ず政を忘らん、鄒公曰く善と、因つて由余と與に曲席して坐し、器を傳へて食し、其の地形と、其の兵勢とを問ひ、竭く告し、而るのち内史膠をして、女樂二八を以て或王に遺らしむ、或王受けて之を說び、終年還らず、是に於て秦は乃ち由余を歸す、由余數ば諫むれども聽かず、鄒公又數ば人をして間かに由余を要せしむ、由余遂に去つて秦に降る、鄒公、客禮を以て之を禮し、或を伐つの形を問ふとあり、遺母、『左傳』に、穎考叔は潁谷の封人たり、公に獻ずることあり、公、之に食を賜ふ、食するに肉を舍く、公、之を問ふ、對へて曰く、小人、母あり、皆小人が食を嘗む、未だ君が羹を嘗めず、請ふ以て之に遺らん、不居一國、『漢書』に、賢者不二國居一、范蠡、偏二游天下一、由余去レ戎入レ秦とあり、套鈞、前漢の朱買臣は會稽太守と爲る、武帝之に詔つて曰く、富貴にして故鄉に歸らざるは、錦を衣て夜行するが如し、今、故鄉に還る、富貴、子に於て何如、買臣頓首すと前漢紀に在り、莊舄、『史記』に、越人莊舄、楚に仕へて執珪たり、頃くあつて病む、楚王曰く、舄は故越の鄙細人なり、今楚に仕へて執珪たり、富貴なり、亦越を思ふや不や、中謝對へて曰く、凡そ人の故を思ふ、其の病に在るなり、彼、越を思ほば、則ち越の聲ならん、越を思ほずんば、則ち楚の聲ならん、人をして往きて之を聽かしむ、猶尚越の聲なり、圍羽、『三國志』に、曹操、圍羽を獲にして以て歸る、拜して偏將軍と爲し、之を禮すること甚だ厚し、而して其の心神を察するに、久しく留まるの意無し、曹、張遼に謂つて曰く、卿試みに之を情問せよ、遼以て羽に問ふ、羽嘆じて曰く、吾絶めて曹公が我を待する厚きを知る、然れども、吾、劉將軍の厚恩を受け、誓ふに共に死するを以てす、之に背く可からず、吾終に留まらず、吾要ら予當に效を立て、以て曹公に報い乃ち去るべし、羽、顏良を殺すに及んで、曹必ず其の去るを知り、重く賞賜を加ふ、羽盡く其の賜ふ所の印書を封じ、告辭して先主に袁軍に奔る、義足、『後漢書』『郭惲傳』に、赤色首黃足而去耳とあり、敬問、『後書』に、孝文前六年に、匈奴に書を遺りて曰く、皇帝敬問、匈奴大單于無恙と、金簡玉字、『吳越春秋』に、禹王、宛委山に登り、金簡の書を發く、金簡の玉字を案じ、通水の理を得たりとあり、方鼎、『左傳』に、晉侯、子產に二方鼎を賜ふとあり、四鬴の鼎を方鼎と曰ふ、彝樽、宗廟を祭るの酒器なり、彝卽ち尊、尊卽ち彝、二物にあらず、琅邪臺、『山海經』に、琅邪臺は渤海の間、琅邪の東に在り、郭璞曰く、海邊に山あり、嶕嶢特起、狀高臺の如し、此れ卽ち琅邪臺なり、龍門、山の名、冀州韓城縣の北、五十里に在り、禹貢に所謂、何を積石より導き、龍門に至る、是なり、碣石、『水經注』に、濡水又東南し、樂縣の碣石山に至る、文穎曰く、碣石は遼西に在り、樂縣は王莽の遷武なり、樂縣并せて臨渝に屬す、王莽、臨渝を更めて遷德と爲す、漢の武帝、亦嘗て之に登り、以て瓦海を望み、而して石を此に勒すと、今日朝鮮と接する碣石にはあらず、鳥逝、晉の木華が『海賦』に、寥海遠決、悶然鳥逝とあり、鮫魚、水族中第一の大魚とす、長さ數十丈、常に五月六月の間を以て、岸邊に就きて子を生む、七月八月、其の子を從へて大海中に還る、浪を鼓して雷と成り、噴沫、雨と爲る、水族驚長し、皆逃れて敢て當る莫し、蝶を鮫と稱し、蝶を鮫と稱す、鐵首、『淮南子』に、龍舟鐵首、浮吹以娛とあり、八風、『淮南子』に、東北を炎風、東方を條風、東南を景風、南方を巨風、西南を涼風、西方を閶風、西北方を麗風、北方を寒風と曰ふ、扶桑、『十洲記』に、扶桑、碧海の中に在り、地方萬里、上に大帝宮あり、太蒼東王父、治する所の處、地、林木多し、桑皆桑の如し、又椿樹あり、長きもの數千丈、大二千餘圍、樹兩兩同根偶生、更相依倚す、是を以て扶桑と名く、仙人其の椿を食ふ、而して一體皆金光色を作し、飛んで空元に翔る、其の樹、大なりと雖も、其の葉、椿なり、中夏の桑の如きなり、但し椿葉にして色赤し、九千歲、一たび實を生ずるのみ、味は絕甘香美と、又『南史』に、扶桑國は齊の永元元年、其の國の沙門慧深、來りて荊州に至り、說きて曰く、扶桑は大漢國の東、二萬餘里に在り、地は中國の東に在り、其の上に扶桑木多し、故に以て名と爲す、扶桑の葉、桐に似て、初生筍の如し、國人之を食ふ、實は梨に似て赤し、其の皮を績ぎ布を爲る、以て衣と爲し、亦以て錦と爲す、我が邦、竹山先生扶桑木說、扶桑考等參照すべし、若搜、『圓氏家訓』に、羅浮山記に云ふ、平地を望めば、樹、蓊の若しとあり、鮑昌の詩にも、今上圓山

蟹、長安樹如ㇾ齊とあり、鸞鳥『水經注』に、東北の海中、大洲あり、之を都洲と謂ふ『山海經』に、所謂都山在二海中一者也、而して言ふ、是の山、蒼梧より此に徙る、山上に猶ほ南方の草木あり、今、都州の治と、『太平寰宇記』に之を稱して田横島と曰ふ、然らば田横島は二說あり、一は山東省即墨縣東北、一は江蘇省東海縣東北の小高山、田横、其の徒五百人と此に居る。後說、可なるが如し、九域、韓詩に云ふ、方二命賦后一、奄二有九域一、九域は九州なり、黃雀之風、『周歲風土記』に、六月則ち東南の長風あり、俗に黃雀風と名く、時に海魚變じて黃雀と爲る、因つて名く、黑蜃之氣、『埤雅』に、蜃形、蛇に似、而して大腹以下鱗盡く逆なり、或は曰ふ、狀は蟠龍に似、耳あり角あり、背蒼紅色を作す、氣を噓き樓臺を成す、之を望めば、丹碧隱然、煙霧に在るが如し、高鳥飛ぶに倦み、之に就きて以て息はんとし、且に玉ちんとするを喜ぶ、氣觀ち之を吸うて而して下る、今俗之を蜃樓と謂ふ、將に雨ふらんとすれば即ち見はる、七子之詩、魏の曹丕の『典論』に、魯國の孔融、廣陵の陳琳、山陽の王粲、北海の徐幹、陳留の阮瑀、汝南の應瑒、東平の劉楨、斯の七子は學に於て逮す所無く、辭に於て假す所無し、或、自から以爲へらく、騏驥を千里に騁せ、仰いで足を齊しうして並び驤すとあり、王度、『左傳』に、思二我王度一、式如ㇾ玉、式如ㇾ金とあり、樂毅、『戰國策』に、昌國君樂毅、燕の昭王の爲めに、五國の兵を合し、而して齊を攻め、七十餘城を下す、盡く之を郡縣とし、以て燕に屬せしむ、三城未だ下らず、而して昭王死す、惠王、位に即く、齊人の反間を用て、樂毅を疑ひ、騎劫をして之に代はらしむ、樂毅、趙に奔る、趙封じて望諸君と爲す、信陵、『史記』「信陵君列傳」に、公子、趙に留まること十年、歸らず、秦、公子が趙に在るを聞き、日夜、兵を出して、東、魏を伐つ、魏王、之を患へ、使をして往きて公子に請はしむ、公子歸りて魏を救ふ、魏王、公子を見、相與に泣く、上將軍の印を以て公子に授く、公子遂に五國の兵を將率して、秦軍を河外に破り、蒙驁を走らす、遂に勝に乘じ、秦軍を逐うて函谷關に至り、秦兵を抑ふ、秦兵、敢て出でず、是の時に當りて、公子の威、天下に震ふ、積水、『荀子』に、積ㇾ土而爲ㇾ山、積ㇾ水而爲ㇾ海とあり、積水は即ち海の異名なり、九州、日本の所謂筑前、筑後、肥前、肥後等の九州なるや、漢土人が從來使用する九州の意義なるや、判然せず、余は假りに日本の九州を相すと見る、蠻身、蠻は龜の大なるものなり、

【題義】祕書晁監は即ち日本の阿倍仲麿なり、仲麿は元正天皇の靈龜二年八月、遣唐使多治比縣守に隨つて入唐し、姓名を易へて朝衡と稱し、玄宗に用ひられて祕書監と爲り、彼に在りて重用せらる、天寶十二年、遣唐大使藤原清河と同船して歸朝せんとす、右丞是の詩、其の時に成るものなり、然るに難船して、仲麿は海に沒し、救はれて安南に止まり、安南都護北海郡開國公と爲り、以て彼の地に歿す、仲麿が事蹟は要するに多く後人の想像より出で、一も信を置くに足るもの無し、晁譽の『仲麿入唐記』四卷の如きは一笑に供するに足る、余は別に『仲麿考』を出さんと欲す、茲に贅せず、

【大意】舜帝が羣后を統御せし時も、有苗族の如きは猶ほ其の德に服せず、次いで禹王が諸侯と會盟する時、多くの者は干戚の舞の爲め服したるも、防風氏は後れて至るを以て、已むを得ず防風には斧鉞の誅を加へたり、服したる所の國は或は九牧の金、或は五瑞の玉、種種珍奇なる品物を貢して其の誠意を表せり、而して今日、開元天地大寶聖文神武應道皇帝は、特に大道を行はんと欲して、先天に化を布き、乾元に運を廣め玉ふ、其の涵育の偉功は垠無し、若華は東道の標なり、戴勝は西門の侯たり、唯邛杖を獻じ、苞茅を致すの近くして且小なるもののみに甘心せんや、單于も來朝すれば、之を蒲萄の館に滯在せしむ、卑彌なる國の女王よりも、貢する事あれば、皇帝よりも之に蛟龍の錦を與ふ、其の他犧牲玉帛を呈するものもあり、或は服食を以て厚意を致すものもあり、而かも皇帝の志は道に在り、遠來の珍物を寶とし玉はず、之が爲め百神は各の其の職を受け、五老は聖瑞の期を告ぐ、正しき文化を知る人、此の如し、況んや戴髮含齒の野蠻人、何ぞ來りて稽顙屈膝せざるものあらんや、

海東の國は少からず、而も日本を以て一番に大國なりと爲す、其の日本の人は、聖人の訓に服して、君子の風を有す、其の正朔は夏時に本づき、其の衣裳は漢制に同じうす、其の往來は歲を歷て方に遠す、使者を派遣して舊好を繼ぎ、天に滔る如く涯無く、貢物を我が天子に致す、朝儀を掌る所の官等を加へて、遣唐使たる位は、各王侯の先に在り、其の席次も觀を改めて、蠻夷來貢の時に居らしむる邸には居かず、我、既に爾を詐る無し、爾も亦我を虞ること無かれ、彼好意を以て來る、我が國に定めたる門禁なぞ、總て廢弛する、日本の使節は我が國を見玉へ、上文敎を敷くを以て、來るもの虛にして至り、其の歸るや文化の實を抱いて歸るにあらずや、是の故に各國の人民雜居し、往來は市の如し、晁司馬よ、君は結髮して聖人の道に游び、笈を負うて日本の親を辭し、禮を老聃の如き人に問ひ、詩を子夏の如き人に學ぶ、之を譬ふれば、昔、孔子は魯の人なれども、周に適いて道を問ひ、鄭は縞帶を獻じて中土に來り、季札も吳の人なれど、又、中國に來りて道を學ぶ、君の名は太學に於て成就し、君の官は客卿として遇せらる、昔、齊の姜も、高國に歸娶せざらん、楚に在りて恩を受くるも、猶ほ自分の生地たる晉に在るの心を以てす、人人皆同じ、何ぞ唯由余のみが、自國を慕はんや、游宦する三年、而かも歸國して君が賜ふ所の裘を以て、其の母に遺らんとす、一國に居らず、必ずや錦を衣て、晝其の鄕に還らんと欲す、莊舄にもせよ、關羽にもせよ、決して他國に永住せんとは思はず、是に於てか、北闕卽ち中土の天子に拜辭し、裹足し、東轅し、命賜の衣を篋に收め、敬問の詔書を懷中にし、金簡玉字、道經を絕域卽ち君子國の人に傳へんと欲す、方鼎彝樽、分器を異姓の國に致さんとす、琅邪臺上、龍門山を廻望し、礪石館前、負然として鳥の如く逝く、其の舟に乘じて往くや、鯨魚は浪を噴き、萬里倒に廻り、鵠首雲に乘るや、八風卻走す、扶桑樹は薺の如く、鬱島は萍の如く、而して波の勢たる、白日に沃いで三山を簸る、又、蒼天を浮べて、九域を呑むの概あり、黃雀の風は海地を動かし、黑蜃の氣は海雲を成す、淼淼として其の之く所を知らず、自今相思するも、信を寄する術なし、嗟、帝鄕卽ち中國の知友と離別して、日本の君臣に謁せんとす、七子の詩を咏じ、日本と唐土との兩印を佩び、我が王度を恢張して、彼の蠻臣に說諭する、三寸の舌猶ほ在り、樂毅は燕を辭し、十年外國に在るも猶ほ老いたりとせず、信陵君の如きは魏に歸りて名逾よ尊し、子よ其れ行け、余は知己としての言を贈るものなり、」大海は肉眼にて到底極むべからず、安んぞ知らんや、滄海の東に國あらんとは、其の著船する處は、九州ならんが、是も見る可からずして遠し、萬里空に乘ずるの感あらん、海中は見るべきもの無し、見るべきものは唯日輪のみ、舟帆も但風に信せて走るのみ、時ありては見る、紫身の天に映じて黑きと、魚眼の波を射て紅なるとを、鄕樹は扶桑の外、主人は孤島の中、今、別離すれば我は唐土、君は日本と、異域と爲る、音信を通せんと欲するも、若爲でか通ずるを得ん、

【餘論】右丞集中に於て序文の長き此の如きもの例少なし、而して此の序を省略せる本多し、願可久

と趙松谷の二人は則ち此の序を載す、決して省略すべからざるものなり、詩は六韻にして、向國以下二十字、正大雄渾、驚くべきものなり、桃谷の『極玄集』には此の詩を以て壓卷と爲す、或は然らん、同時に之を送るの人、右丞と包佶と趙驊と三人、左に錄すべし、

送晁補闕歸日本國　趙驊

西接承休澣。東隅返故林。來稱鄒子學。歸是越人吟。馬上秋郊遠。舟中曙海陰。知君懷魏闕。萬里獨搖心。

送日本國聘賀使晁巨卿東歸　包佶

上才生下國。東海是西鄰。九譯蕃君使。千年聖主臣。野情偏得禮。木性本含眞。錦帆乘風轉。金裝照地新。孤城開蜃闕。曉日上朱輪。早識來朝歲。塗山玉帛均。

銜命使本國　仲應

銜命將辭國。非才忝侍臣。天中戀名主。海外憶慈親。伏奏違金闕。驊騮去玉津。蓬萊鄉路近。若木故園鄰。西望懷恩日。東歸感義辰。平生一寶劍。留贈結交人。

失題

慕義名空在。輸忠孝不全。報恩是何日。歸國定何年。

右二題仲應の詩は、『文苑英華』に載する所、自作なるや、唐人の僞作なるや明白ならず、仲應を憐んで詩を作る者、廣瀨淡窗と爲す、禮樂由來啓我民。當年最重入唐人。西風不爲歸帆便。莫說晁卿是叛臣、仲應を罵つて詩を作る者、家里松島と爲す、徒慕李家文物盛。枉教皇國武威輕。入唐畢竟作何事。遺恨當年留學生。

送徐郎中

東郊春草色。驅馬去悠悠。
況復鄉山外。猿啼湘水流。
島夷傳露版。江館候鳴騶。
卉服爲諸吏。珠宮拜本州。
孤鶯吟遠墅。野杏發山郵。
早晚方歸奏。南中絕忌秋。

徐郎中を送る

東郊春草の色、馬を驅り去つて悠悠、
況んや復鄉山の外、猿啼きて湘水流る、
島夷露版を傳へ、江館鳴騶を候す、
卉服諸吏と爲り、珠宮本州を拜す、
孤鶯遠墅に吟じ、野杏山郵を發す、
早晚か方に歸奏する、南中絕だ秋を忌む、

【注解】湘水、『地理通釋』に、湘水は全州清湘縣陽朔山より出で、直して洞庭に入り、北して衡州衡陽縣に至り、以て江に入る、露版、『文心雕龍』に、露版不封、布諸視聽とあり、後魏高祖曰く、上馬馳擊曰驛、下馬作露版とあり、軍に勝ちし報告書、封ぜずして、直書のままなるを露版と曰ふ、卉服、卉は百草の總名、草にて製する服、珠宮、廉州古郡の名、山郵、山驛と同じ、南中、

『華陽國志』に、晉の泰始六年、初めて蜀の南中諸郡を置くとあり、南中は昔日に在りては、夷越の地なり、

【大意】　徐なる人が郎中の官を以て行くを送る、『東郊は今正に春草が青青たり、此の中馬を驅りて悠悠として去る、況んや復鄉山の外に在り、猿啼くの時湘水の流を涉るをや、途中にて出會する島夷の人は、露版を傳へ、江館にては鳴驚を候す、卉服して初めて小官吏と爲りしより、進んで珠官郡に長と爲る、途中の景色は如何、孤鶯は遠墅に吟じ、野杏は山驛を圍んで發く、君は早晩か歸り來りて視察の狀を奏上するや、南中は流行病が盛んなるが故に秋を忌む、故に秋に及ばざる前に歸り玉へ、

【餘論】　此の篇は送詩として、尋常一樣の作、山の字複するは例の小疵とす、

送熊九赴任安陽　　熊九が安陽に赴任するを送る

魏國應劉後。寂寥文雅空。　魏國應劉の後、寂寥として文雅空し、
漳河如舊日。之子繼清風。　漳河舊日の如く、之子清風を繼ぐ、
阡陌銅臺下。閭閻金虎中。　阡陌銅臺の下、閭閻金虎の中、
送車盈灞上。輕騎出關東。　送車灞上に盈ち、輕騎關東を出づ、
相去千餘里。西園明月同。　相去ること千餘里、西園明月同じ、

【注解】　應劉、汝南の應璩、字は休璉、東平の劉楨、字は公幹、是の二人は魏國の大文章たりしなり、漳河、漳水は相州鄴縣の西に在り、之子、熊九を指す、銅臺、『水經注』鄴城の西北に三臺あり、皆城に因つて基と爲す、雖然樂事、其の高さ山の如し、建安十五年、魏武が起つる所、其の中なるを銅雀臺と曰ふ、高さ十丈、屋あり百餘間、金虎、『魏志』に、建安十八年九月、金虎臺を作る、築を築して漳水を引き、白渠に入り以て河に通ず、灞上、『元和郡縣志』に、白鹿原、高年縣の東二十里に在り、亦之を灞上と謂ふ、漢文帝を其の上に葬むる、之を灞陵と謂ふ、漢の王仲宣の詩に、南登灞陵岸、回首望長安、とあり、西園、曹植の詩に、公子敬愛客、終宴不知疲、游夜游西園、飛蓋相追隨、明月澄清景、列宿正參差、とあり、文帝が月夜を以て、文人才子を集め、共に西園に游びしなり、園は魏武が作る所とす、

【通義】　熊九なる人が安陽卽ち相州鄴郡に赴任するを送る詩なり、三國の魏に屬するを以て、詩中多く魏國の事を敍せしなり、

【大意】　魏國には應瑒や劉楨が逝いて後、寂寥として文雅の道は空と爲る、漳河の流のみ依然として舊日の如し、然るに君は應劉の清風を繼いで起る、東阡南陌多く銅臺の下に連り、西閭北閭も亦皆金虎の中を遶りて續く、君を送るの車は灞上に盈ち、君は輕騎にして關東を出づ、送地と任地とは相去る千餘里、而して西園を照らす明月も、此の地を照らす明月と同じ、

【餘論】　此の篇も、亦五韻の作とす、伎巧を弄せざる所に、此の詩の妙處を認む、唐代の應劉は熊九にあらずして、右丞は其れ應劉たるなり、

送李太守赴上洛

商山包楚鄧。積翠藹沈沈。
驛路飛泉灑。關門落照深。
野花開古戍。行客響空林。
板屋春多雨。山城晝欲陰。
丹泉通虢略。白羽抵荆岑。
若見西山爽。應知黃綺心。

李太守が上洛に赴くを送る

商山楚鄧を包み、積翠藹として沈沈、
驛路飛泉灑ぎ、關門落照深し、
野花古戍に開き、行客空林に響く、
板屋春雨多く、山城晝陰からんと欲す、
丹泉虢略に通じ、白羽荆岑に抵る、
若し西山の爽なるを見ば、應に知るべし黃綺が心を、

【注解】商山、商州の上洛郡に在る山の名。楚鄧、商州よりして東の方鄧州に至る七百里、古は楚地に屬す。關門、函關と武關、共に商州上洛郡に向ふ關門なり。丹泉、『水經注』に、丹水は京兆上洛縣の西北、冢嶺山より出づ、東流して河南の界に入る。虢略、『左傳』に、東虢を虢略とあり、孔穎達の『正義』に、虢略虢之境界也とあり、『後漢書』に、宏農郡陝縣西有虢略地。白羽、杜預曰く、析、楚邑、一名白羽、今南陽の析縣なり。荆岑、鄧州に屬す。荆岑、王粲が『登樓賦』に荆山之高岑とあり。西山爽、『世說』に、王子猷、桓の車騎參軍と爲る、桓、王に謂つて曰く、卿、府に在ること久し、比ろ當に相料理すべし、初め答へず、直ちに高視し、手板を以て牀を拄へて云ふ、西山朝來、爽氣あることを致す。黃綺心、『高士傳』に、四皓は皆河内朞の人なり、或は汲に在り、一を東園公と曰ひ、二を角里先生と曰ひ、三を綺里季と曰ひ、四を夏黃公と曰ふ、皆道を修め、己を潔くし、義にあらざれば動かず、秦の始皇の時、秦の政の虐なるを見、乃ち遠きて藍田山に入り、而して歌を作つて曰く、莫莫高山、深谷逶迤、曄曄紫芝、可以療飢、應當世違、吾將何歸、駟馬高蓋、其憂甚大、富貴之長人、不如貧賤之肆志、乃ち共に商洛の曠地始山に入り、以て天下の定まるを待つ、秦敗るるに及んで、虞高、之を召す、至らず、深く自から終南山に匿る。

【大意】太守が今赴かるる上洛は、商山が楚鄧を深く包み、積翠は藹として沈沈たり、其の驛路には飛泉が灑ぎ落ち、關門は正に落照の深きに當りて閉づ、野花は自然にして古戍の地に發き、行客の足響は空林に有りて聞こゆ、板屋は春雨多く、山城は晝も陰鬱の氣分なり、丹泉の流れは虢州の界に通じ、白羽即ち楚邑は荆山まで抵る、若し西山の爽氣を見ば、應に必ず古の四皓が山を出でざる心を知るべし、

【餘論】此の篇は、六韻を以て成る、全篇其の行色を敍して絶えて遺憾なし、强ひて疵を求むれば山が三字あり、泉が二字あり、沈歸愚は『別裁』に評して曰く、似欲諷其歸意、確評と思はる、歸意を諷するが故に、西山、黃綺等の句を用ひられしなり、排律として右丞集の上乘に屬す、

游感化寺

翡翠香煙合。瑠璃寶地平。
龍宮連棟宇。虎穴傍簷楹。

感化寺に游ぶ

翡翠香煙合し、瑠璃寶地平かなり、
龍宮は棟宇に連り、虎穴は簷楹に傍ふ、

谷靜唯松響。山深無鳥聲。
瓊峯當戶拆。金澗透林鳴。
郢路雲端迥。秦川雨外晴。
雁王銜果獻。鹿女踏花行。
抖擻辭貧里。歸依宿化城。
繞籬生野蕨。空館發山櫻。
香飯青菰米。嘉蔬綠芋羹。
誓陪清梵末。端坐學無生。

谷靜にして唯松響き、山深くして鳥聲無し、
瓊峯戸に當りて拆け、金澗林に透りて鳴る、
郢路雲端迥かに、秦川雨外に晴れたり、
雁王果を銜んで獻じ、鹿女花を踏んで行く、
抖擻貧里を辭し、歸依化城に宿す、
籬を繞りて野蕨生じ、空館山櫻發く、
香飯青菰の米、嘉蔬綠芋の羹、
誓つて清梵の末に陪し、端坐して無生を學ばん、

【注解】翡翠、樣の鬱支帝が詠懷の詩、欲持翡翠色とあり、瑠璃、『法華經』に、地平如掌、瑠璃所成とあり、蓋樓、詣惠遠の詩に、落日陰蓋樓とあり、金澗、鮑照の詩に、霜崖減土膏、金澗側泉脈とあり、雁王、『佛報恩經』に、五百の雁王あり、北方より來りて、空に飛んで南過す、中に雁王あり、悲鳴吐血し、即ち兩翅を鼓して、來りて雁王に投ず、五百の雁王、虛空を徘徊し、亦復去らず、優師念言すらく、鳥獸も尚ほ共に相無慈、身命を惜しまず、我今當に何の心を以て、是の雁王を殺すべきや、時に、網を開き、放ち去らしむ、又『法苑珠林』に、京師建林寺に沙門僧伽達多あり、經論に博通し、偏に禪思を以て業と爲す、元嘉の初を以て、宋境に來游す、達多常に山中に在りて坐禪す、日時將に過らんとす、忽、受齋を欲す、乃ち雀鳥あり、果を銜んで飛來し之に授く、達多思惟す、昔、聞說、雀を養る、佛も亦受けて之を食ふ、今、飛鳥、食を授く、何爲れぞ不可ならん、是に於て受けて之を食ふ、鹿女、『佛報恩經』に、國あり、波羅奈と號す、城を去る遠からず、山あり、密所游居と名く、其の山に一仙人あり、南窟に住居す、復一仙あり、北窟に住居す、二山の中間、一泉水あり、其の泉水の邊に、一平石あり、爾の時、南窟仙人、此の石上に在り、浣衣洗足す、去つて後未だ久しからず、一雌鹿あり、來りて泉水を飲む、次第して浣衣の處に到り、此の石上浣衣の垢汁を飲む、此の衣垢汁を飲んで、廻頭反顧、自から小便の處を舐む、爾の時、雌鹿孕いで便ち懷胎す、月滿ちて產生す、鹿の產生の法、要らず還りて本得胎の處に向ふ、即ち水邊に還り、本の石上に住まる、悲鳴宛轉し、一女を產生す、南窟仙人、此の鹿の大悲鳴の聲を聞き、即ち出で往いて看る、此の雌鹿が一女を產生するを見る、草衣を以て裹み拭ひ、將て還りて衆妙果を採り、臨時弊變す、漸漸長大、年十四に至る、其の父愛念す、常に宿火をして、斷絕せざらしむ、忽ちにして一日、心、護慎せず、便ち火をして滅せしむ、其の父、其の女に語つて曰く、北窟に火あり、汝往いて取るべし、爾の時鹿女、即ち北窟に往詣す、步步舉足、皆蓮花を生ず、其の蹤跡に隨つて、行伍次第、衢陌に似たるが如し、往いて北窟に至り、彼の仙人に從つて、少火を求めんと乞ふ、爾の時仙人、此の女人、嚴儀是の如く、足下に蓮花を生ずるを見、報じて言ふ、火を得んと欲せば、汝當に我が窟を右繞し、滿足七匝、行伍次第、了了分明にすべし、其の舉足に隨つて皆蓮花を生ず、繞ること七匝、其の女に語りて曰く、復當に此の右邊に在りて、還歸し去るべし、常に汝に火を與ふべし、爾の時鹿女、火を得んが爲めの故に、教に隨つて去る、貧里、一人の子あり、初め富家に生れ、已にして流浪して去り、貧里に生活し、初め富家の子たるを知らず、之を窮子と稱す、歸依、歸命依憑と成語す、佛陀の教に歸命し、依憑と爲すなり、野蕨、『書經』の詩に、野蕨漸紫莖とあり、富蘭、郭璞に蕨を自然之富蘭の語あり、綠芋羹、沈約の詩に綠芋蓼蓼差とあり、『漢書』『張方遂傳』に、飯二我豆、食二芋魁一とあり、師古曰く、芋根を以て羹と爲すなり、清梵、庾信の詩に清梵雨邊來とあり、

【大意】佛龕前より出づる翡翠の香煙は合し、瑠璃の寶地は良に平正なり、經典を收むる龍宮藏は棟宇に連りて在り、而して虎穴は簷楹に傍うて在り、谷は靜寂にして唯松聲のみ響く、山は幽深にして

鳥聲すら無し、獨坐は寺戸に當りて拆け、金澗の水は林に透りて鳴る、郢に向ふ路は雲端に迴かにして、秦川の流れは雨外に晴れて見ゆ、雁王は果を銜んで高僧に獻じ、鹿女は步步花を踏んで行く、余は抖擻して貧里を辭し去り、歸依し來りて此の化城に宿す、化城の狀は如何、籠を繞りて生ずるは野蕨なり、發く所の山櫻は空館に接す、供せらるるものは何ぞ、香飯青菰の米と、嘉蔬綠芋の羹となり、誓うて我も淸梵の末徒に陪し、端坐して無生の理を修學せんとす、

【餘論】此の篇は、十韻を以て成る、佛語を運用して蔬筍の氣無きものは、所謂大家の大家たる所以、歸愚も「別裁」に之を收め、抖擻以下說二己之游一と評したるも、眼で見る所、耳で聞く所、皆己の游びならざるは無し、無字複し、生字複したるは小疵と謂ふべし、

游悟眞寺

聞道黃金地。仍開白玉田。
擲山移巨石。咒嶺出飛泉。
猛虎同三逕。愁猿學四禪。
買香燃綠桂。乞火踏紅蓮。
草色搖霞上。松聲汎月邊。
山河窮百二。世界滿三千。
梵宇聊憑視。王城遂渺然。
灞陵纔出樹。渭水欲連天。
遠縣分諸郭。孤邨起白煙。
望雲思聖主。披霧憶羣賢。
薄宦慙尸素。終身擬尙玄。
誰知住菴客。曾和柏梁篇。

悟眞寺に游ぶ

聞道らく黃金の地、仍ほ開く白玉田、
山を擲ちて巨石を移し、嶺を咒して飛泉を出だす、
猛虎三逕を同うし、愁猿四禪を學ぶ、
香を買うて綠桂を燃やし、火を乞うて紅蓮を踏む、
草色霞上に搖き、松聲月邊に汎ぶ、
山河百二を窮め、世界三千に滿つ、
梵宇聊か憑視す、王城遂に渺然、
灞陵纔かに樹を出で、渭水天に連らんと欲す、
遠縣諸郭を分ち、孤邨白煙を起す、
雲を望んで聖主を思ひ、霧を披いて羣賢を憶ふ、
薄宦尸素を慙ぢ、終身尙玄を擬す、
誰か知らん住菴の客、曾て和す柏梁の篇、

【注解】黃金地、『釋迦譜』及び『法苑珠林』に、須達長者、祇陀太子に請ひ、園を買うて精舍を造らんと欲す、太子言ふ、若し能く黃金を布きて、地に空間無からしめば、便ち當に相與ふべし、須達曰く諾、誼んで其の價に隨ほん、便ち人をして象に金を負うて出でしめ、八十頃の中、須臾に滿たんと欲す、殘餘少地なり、須達思惟す、何の藏金か足り、多ならずや、少ならざらん、當に取りて之を滿たすべし、祇陀問うて言ふ、貴を維うて之を覆くか、答へて言ふ然らず、自から念ふ、金藏何者か足るべき、當に補滿するを得べしと、太子念言すらく、佛は必ず大德ならん、止めて要に金を出すこと勿からしめん、是に於て言ふ、園地は悉に屬し、樹木は我に屬す、我、自から佛に奉り、共に精舍を立てん、白玉田『後漢書』『郡國志』に、藍田出二美玉一とあり、寺は藍田に在るを以てなり、咒嶺、『十六國春秋』に、曇無讖、王に隨つて山に入る、王、湯して水を須む、卽得する能はず、讖乃ち密咒す、石、出水を爲す、因つて贊

じて曰く、大王憑澤の感ずる所、遂に枯石をして泉を生ぜしむ、耶國聞く者、嘆伏せざるは無し、四禪、初禪天と二禪天と三禪天と四禪天となり、綠桂、『拾遺記』に、王母、昭王と燧林に游び、綠桂の膏を取りて燃し、以て夜を照らすとあり、百二、『漢書』に、秦は形勝の國也、何を帶び、山を阻て、千里を懸隔す、持敎百萬、秦は百二を得たり、蘇林曰く、百二とは百中の二、二萬人を得たるなり、秦地險固、二萬人、諸侯の百萬人に當るに足るなり、三千、小千世界、中千世界、大千世界、合して三千世界と爲る、世界の極、此の外に在る無し、佛陀が濟度する人、皆此の三千世界を漏れざるなり、『長阿含經』及び『起世因緣經』に其の所以を辨ず、文長ければ錄せず、望雲、『史記』に、帝堯者、望之如雲、就之如日とあり、拔雲、『晉書』に、尙書令衞瓘、樂廣を見て之を奇とし、諸子に命じて遣らしむ、曰く、此れ人の水鏡なり、之を見れば霍然、雲霧を拔きて青天を覩るが若し、尸素、『漢書』に、今、朝廷の大臣、上、主を匡すこと能はず、下、以て民を益すること亡し、皆尸位素餐す、徒らに官祿を食んで、治民の才無きもの、皆是れ尸位素餐の徒と爲す、尙玄、漢の楊子雲の故事、住菴者、結草爲菴、獨止其中と『神仙傳』の語に因りて、草菴客に作る本あり、住菴にて何等妨げ無し、

【大意】悟眞寺は雍州藍田縣の東に在り、名刹なるを以て、諸家の題詠多く存す、白香山に百三十韻の詩あり、右丞以外に別に手眼を出す、白氏集に就いて看よ、

【餘論】聞道く此の黃金地は、何ぞ西天の遠きにあらん、今茲に白玉田に於ても開くを見る、寺を開創する時は、神僧が山を擲つて巨石を移し、又嶺に向うて咒し以て飛泉を出す、猛虎は人を畏れず三逕を同じうして歩す、愁猿も亦四禪を修學するが如し、我は香を買うて綠桂を燃やし、火を乞うて紅蓮を踏む、而して知る草色の霞上に搖くと、松聲の月邊に汎ぶとを、寺の地形は如何、所謂山河は百二を窮めたる所、世界は滿三千、此の梵宇に遇りて視るときは、眼下に認むる王城は遂に渺然たり、灞陵の邊は纔かに樹の出づるを認む、渭水は天に連らんとする勢をも認む、而して遠縣は諸郭を區分し、孤邨は白煙を起す、寺は王城に近きが故に、雲を望んで天子を思ひ、霧を拔きて羣賢を憶ふ、自分は薄官、而も薄宦たるの用を爲さず、慙愧せざるを得ず、終身古の楊子雲の如く、唯學問に耽るのみ、誰か知らんや住菴の客を、此の客は天子の命にて羣賢と同じく、聯句の詩を作りし一人なるを、

【餘論】此の篇は、十二韻を以て成る、右丞としては長律の方に屬す、樂天の此の題の詩に、欲雨生白煙、舌根如紅蓮、無益同素餐、以此自慙愧、從此終身閒等の句あり、右丞が此の詩を粉本として成ること、何人も疑ふ所無し、況んや韻字を同じうするに於てをや、但し佛語運用の力は、樂天何ぞ右丞を凌駕することを得ん、細心に讀む者は、余が言の誤まらざるを知るなり、

與蘇盧二員外期游方丈寺而蘇不至因有是作

蘇盧二員外と方丈寺に游ぶを期す、而して蘇至らず、因つて是の作あり

共仰頭陀行、能忘世諦情。　共に仰ぐ頭陀の行、能く忘る世諦の情、
廻看雙鳳闕、相去一牛鳴。　廻看す雙鳳闕、相去る一牛鳴、
法向空林說、心隨寶地平。　法は空林に向うて說き、心は寶地に隨つて平か、

手巾花氎淨。香帔稻畦成。　手巾花氎淨く、香帔稻畦成る、
聞道邀同舍。相期宿化城。　聞道して同舍を邀へ、相期して化城に宿す、
安知不來往。翻以得無生。　安んぞ知らん來往せず、翻つて以つて無生を得ることを、

【注解】頭陀行、頭陀又は杜多と書く、『翻譯名義集』及び『法苑珠林』に明記せり、頭陀は梵語を直寫せしなり、譯して抖擻と爲す、總ての煩惱、都ての塵垢を拂ひ除く意味、故に修治とも譯す、十二頭陀行あり、一に作阿蘭若、二に常乞食、三に納衣、四に一坐食、五に節量食、六に中後（今日の十二時後）不飲漿、七に冢間住、八に樹下住、九に露地住、十に常坐不臥、十一に次第乞食、十二に但三衣、是の十二を總べて頭陀行と稱す、世諦、實諦、眞諦、空諦、義諦、假諦、俗諦、佛教にては盛に諦を說く、世諦とは何ぞ、名ありて實の無きものを世諦と曰ふ、名もあり、實も有るものを第一義諦と爲す、一牛鳴、寺を建立するに都落や城市を離るる地、卽ち一拘盧舍、五百弓、日本里程として十二三丁隔てて設ける法とす、一牛が都なり、里なりに鳴いて、漸く其の聲を聞かざる位の程度を善とす、市中の寺は眞の寺にはあらざるなり、心隱寶地平、『首楞嚴經』に、持地菩薩、謂ふ我が心地平なれば、世界地一切皆平なり、花氎、釋迦佛の納母、摩訶波闍波提、佛已に出家す、手自から紡績す、預じめ一縷金色の氎を作り、積心係想、如來に奉上すと『釋迦譜』に在り、稻畦成、水田衣、福田衣と同じ、聞道、顯本に同道に作る、誤なり、

【題義】蘇氏と盧氏との二員外と方丈寺に游ぶ約を爲し、而して蘇は至らず、是の故に盧氏と二人にて游ぶ、其の意を以て作りしものなり、

【大意】平生共に贍るは佛徒の頭陀行である、頭陀行を修する者は、自然と能く愚にも付かざる世諦の情とは忘れる、而して寺に來て廻看すれば雙鳳闕を認む、寺は邨里と相去る一牛鳴の地に在り、山僧は法を空林に向つて說く、無情も亦有性なるが爲めなり、其の心は實地の平と同じく平にして不平あらず、手巾は則ち花氎の淸淨なる物あり、香帔卽ち袈裟は稻畦の法を以て裁したるものを用ふ、道を聞くが爲めに同舍卽ち同調の友を邀へ、相期して化城に宿せんとす、安んぞ知らんや、佛法本來の意義、來もせず、往きもせず、而して翻つて以て無生の理を證得することを、

【餘論】此の篇は、六韻を以て成る、一二は自然を敍し、三四は寺の所在を敍し、五六七八は寺僧を敍し、九十十一十二は自己と友人とを敍して結末とす、作法明白、後進以て法と爲すべし、相字複あり、他は議すべき無し、

曉行巴峽

曉巴峽に行く

際曉投巴峽。餘春憶帝京。　晩に際して巴峽に投じ、餘春帝京を憶ふ、
晴江一女浣。朝日衆鷄鳴。　晴江一女浣ひ、朝日衆鷄鳴く、
水國舟中市。山橋樹杪行。　水國舟中の市、山橋樹杪の行、
登高萬井出。眺迥二流明。　高きに登れば萬井出で、迥を眺むれば二流明かなり、
人作殊方語。鶯爲舊國聲。　人は殊方の語を作し、鶯は舊國の聲を爲す、

賴諳山水趣、稍解別離情。　賴に諳んず山水の趣き、稍解く別離の情、

【注解】巴峽、陶淵明が「蜀都賦」註に、三峽巴東、永安縣、有二高山一相對、相去可二二十丈一(左右星甚高、人謂二之峽一江水過二其中一)とあり、餘春、謝の簡文帝の「晚春賦」に、待二餘春一子北閣一とあり、顧可久本に餘香に作る、非なり、樹杪、樹木の杪末を謂ふ、珠方、『漢書』に珠方萬里とあり、要するに外國と云ふ意義なり、

【大意】早曉に際して巴峽に投ず、時正に晚春、帝京の景を憶はざるを得ず、晴江を見れば一女の衣を浣ふあり、朝日を報ずる衆鷄も亦鳴く、蜀は水國なれば舟中に市を成す、山橋を見るに高くして人は樹末より行く、高處に登るに從つて下方に萬井の出づるを見、遠方を眺めて二流の明かなるを知る、會ふ人の言語は所謂殊方の語にて、我には通せざること多し、唯鶯の聲は故國の鶯聲と同じ、賴に山水の趣味を諳んずるを以て、稍や別離の情を慰むるを得、

【餘論】此の篇は、六韻を以て成る、巴峽の景狀を敍し、良に眞に逼るを覺ゆ、後來『入蜀記』『臭船錄』の粉本と爲るもの、歸愚の『別裁』に賴諳を賴多と爲す、改むべからず、賴諳を以て正しと思ふ、水に複字あるは小疵とす、

賦得清如玉壺冰

清は玉壺の冰の如きを賦し得たり

藏冰玉壺裏、冰水類方諸。　冰を藏す玉壺の裏、冰水方諸に類す、

未共銷丹日、還同照綺疏。　未だ共に丹日に銷せず、還綺疏を照すに同じ、

抱明中不隱、含淨外疑虛。　明を抱きて中隱さず、淨を含んで外虛なるかと疑ふ、

氣似庭霜積、光言砌月餘。　氣は庭霜の積むに似、光は砌月の餘と言ふ、

曉凌飛鵲鏡、宵映聚螢書。　曉は飛鵲の鏡を凌ぎ、宵は聚螢の書に映ず、

若向夫君比、清心尙不如。　若し夫君に向うて比せば、清心尙如かず、

【注解】方諸、鄭康成が『周禮註』に、鑒鏡の屬、水を取るもの、世に之を方諸と謂ふ、『淮南子』にも、方諸見レ月、則津而爲レ水とあり、『晉書天文志』には、方諸可二以取一水于月一とあり、月光より水を取るの鏡を謂ふ、綺疏、『後漢書』『樊英傳』に、宮闕皆有二綺疏背瑣一とあり、『草堂太子註』に、綺疏謂二鏤爲一綺文一也とあり、宵の美麗なるなり、飛鵲鏡、『神異傳』に、夫婦あり、相別れて鏡を破り、人各の半を執り以て信と爲す、其の妻、人と通ず、鏡化して鵲と爲り、飛んで夫の前に至る、夫乃ち之を知る、後人因つて鏡を鑄るに、鵲を爲りて背上に安す、吳均の詩に、鵲爲二飛鵲鏡一圓圓照二離別一とあり、聚螢書、晉の車胤は悲勤にして倦まず、博學多通、家貧にして、常に油を得る能はず、夏月には練囊に數十の螢火を盛り、以て書を照し、夜を以て日に繼ぐ、

【趣義】梁の鮑照が白頭吟に清如玉壺冰の句あり、其れに倣うて、自家の心中の清白を歌ふものが、此の詩の意味なり、冰已に清く、玉壺の清は論勿し、微塵も汚濁なき氣分を表はす文字なり、

【大意】冰を玉壺の裏に藏して見よ、其の冰水は方諸に收むるに類するを覺ゆ、丹日卽ち盛夏の日にも冰は銷滅せず、銷滅せざるのみならず、還綺窗を照すが如くなるを覺ゆ、冰は其の質明にして、中

に微塵も隱すべきもの無し、至體清淨にして外觀は虛無なるかと疑ふ、而して冰氣は庭霜の積むに似て、冰光は砌月の餘と言ふ、曉天には飛鵲の鏡を凌ぐの光あり、宵夜には螢螢の書を照すと同じ輝きあり、若し大人夫君に向うて比べて見れば、夫君の情心は冰以上に清ければ、冰は到底夫君の清に及ぶ能はず、

【餘論】此の篇六韻、右丞年十九の作なりと傳ふ、明淨の二字、以て此の篇を評すべし、

春日直門下省早朝

春日門下省に直して早朝す

騎省直明光。鷄鳴謁建章。
遙聞侍中佩。暗識令君香。
玉漏隨銅史。天書拜夕郎。
旌旗映閶闔。歌吹滿昭陽。
官舍梅初紫。宮門柳欲黃。
願將遲日意。同與聖恩長。

騎省明光に直し、鷄鳴建章に謁す、
遙かに聞く侍中の佩、暗に識る令君の香、
玉漏銅史に隨ひ、天書夕郎を拜す、
旌旗閶闔に映じ、歌吹昭陽に滿つ、
官舍梅初めて紫、宮門柳黃ならんと欲す、
願はくは遲日の意を將て、同じく聖恩と長からんことを、

【注解】騎省、唐の宮禁、日華門の東に在るを門下省と謂ひ、月華門の西に在るを中書省と謂ふ、此の兩省に各の散騎常侍の官あり、之を騎省と謂ふ、明光は宮名、建章も宮名、侍中佩、『宋書』「禮樂志」に、左右の侍中、皆水蒼玉を佩ぶ、漢末喪亂、玉佩の法、絕えて傳はらず、魏の侍中王粲、古を識り、佩法始めて創を更むとあり、令君香、『襄陽記』に、荀令君至二人家一坐處三日香とあり、銅史、金漏を鑄造する役人なり、鑄る所の金銅仙人は左壺に居り、晉徒は右壺に居る、皆、左手を以て箭を抱き、右手鉤を指し、以て天時の早晚を別つ、夕郎、前に辨ぜり、遲日、『詩經』に、春日遲遲とあり、毛萇曰く、遲遲とは舒緩なり、孔穎達曰く、遲遲とは日長うして喧なるの意、故に舒緩と曰ふ、春夏秋冬、晝夜に長短あり、日に長短ありとせば、漏にも急と緩とあるべきなり、

【題義】右丞が門下省卽ち左省に宿直し、而して早朝に參內する意味を歌ひしものなり、

【大意】騎省として明光宮に宿直し、鷄鳴を聞きて早天に建章宮に謁見する、其の中途にて、遙かに侍中が佩を鳴らす音を聞き、而して暗に識る令君が坐邊には已に香煙の薰ずるを、玉漏の音は銅史に隨つて響き、天書を拜受したる夕郎もあり、旌旗は已に閶闔門頭に翻へり、箏や琴の音は已に昭陽宮に滿つ、官舍には梅初めて紫色を呈するに、宮門には柳色が已に黃ならんとするを見る、願ふ遲日の意を將て、遲日の長きと同じく君恩の長からんことを、

【餘論】此の篇も、六韻を以て成る、宮禁の事を敍するが主なる故に、平平凡凡にして、別に論すべき無し、但し耳に入る音響のもの多きは、賈至が大明宮詩に對して和したる、絳幘雞人詩に衣裳に關すること多きと同じく、右丞の辭處と見るべし、歸愚が『別裁』に之を採りしは、我其の意を知るに苦しむなり、

上張令公

珥筆趨丹陛。垂璫上玉除。
步簷青瑣闥。方轎畫輪車。
市閱千金字。朝開五色書。
致君光帝典。薦士滿公車。
伏奏廻金駕。横經重石渠。
從茲罷角抵。希復幸儲胥。
天統知堯後。王章笑魯初。
匈奴遙俯伏。漢相儼簪裾。
賈生非不遇。汲黯自堪疎。
學易思求我。言詩或起余。
嘗從大夫後。何惜隷人餘。

張令公に上る

筆を珥んで丹陛に趨り、璫を垂れて玉除に上る、
歩簷青瑣闥、方轎畫輪車、
市に千金の字を閱し、朝には五色の書を開く、
君を致して帝典に光らしめ、士を薦めて公車に滿つ、
伏奏金駕を廻らし、横經石渠を重んず、
茲より角抵を罷め、復儲胥に幸すること希なり、
天統堯の後を知り、王章魯初を笑ふ、
匈奴遙かに俯伏し、漢相簪裾儼たり、
賈生は不遇にあらず、汲黯自から疎なるに堪へたり、
易を學んで我に求むることを思ひ、詩を言うて或は余を起す、
嘗て大夫の後に從ふ、何ぞ惜まん隷人の餘、

【注解】珥筆、筆を冠の側に插んで、以て記事に備へるなり、曾子建の表に、安宅京室、執〻觀珥〻筆とあり、呂向曰く、珥は執なり、垂璫、鮑照の詩に、垂璫散佩益〻玉除の句あり、璫は耳に付ける玉、步簷、「子虛上林賦」に步櫩周流とあり、簷と櫩とは同義の字、『蒙齋』にも曲屋步櫩とあり、「ノキ」なり、簷の下、行步すべきなり、青瑣闥、范彥龍の詩に、掖官青瑣闥、遙望鳳凰池とあり、方轎、轎は轎輿、熱塵を避ける爲め蔽くる車上の「ホロ」なり、方は四角な形を謂ふ、紀少瑜の詩に、日落庭光轉、方轎屢移〻除とあり、千金字、『史記』に、是の時、辯士多し、荀卿の知きは著書天下に布く、呂不韋、卽ち其の客、人人をして聞く所を集論せしめ、以て八覽、六論、十二紀、二十餘萬言と爲し、以爲らく天地萬物、古今の事を備ふと、號して呂氏春秋と曰ふ、咸陽の市に布き、門に千金を懸け、諸侯の辯士賓客を延き、能く一字を增損する者有らば、千金を與へんと、五色書、詔書は皆五色紙に書す、帝典、王僧、精潤が碑文、光〻我帝典〻、縛〻我民黎〻とあり、廻金駕、顏延年の詩に、金駕映〻松山〻とあり、李善曰く、金駕卽ち金輅なり、『後漢書』に、帝曾て出門を輕視す、姚期、車前に軾首して曰く、臣聞く、古今の或は、變不意に生ず、願はず陛下微行數〻出づるなり、帝、之が爲めに興を廻らして還る、石渠、『漢書』に、韋玄成、詔を受け、太子太傅蕭望之、及び五經諸儒と、同異を石渠閣に論平とあり、角抵、相撲なり、『漢書』『武帝紀』に、武帝元封三年春、作〻角抵戲〻とあり、文穎曰く、角抵とは兩兩相當り、力を角し技を角す、元帝紀、初元五年、罷〻角抵〻とあり、儲胥、『三輔黃圖』に、漢の武帝、迎風館を甘泉山に作り、後に露寒と儲胥との二館を加ふ、皆雲陽甘泉中に在り、天統、『漢書』に、漢、堯の運を承け、德祚已に盛んなり、她を斷り符を著はし、旗幟赤を上び、火德に協ふ、自然の應、天統を得たるなりとあり、王章、王者の制を謂ふ、『左傳』に、晉侯請〻隧、弗〻許曰王章也、魯訓、『禮記』『檀弓下』に、夫魯有〻訓、公室卑〻懿碑〻とあり、初とは古より傳來する故禮を謂ふ、賈生、賈誼なり、劉向云ふ、賈生が三代と秦との治亂を言ふの意、其の言甚だ美、國體に通達す、古の伊尹、管仲と雖も、遠く過ぐること能はず、生年二十、孝文帝に召されて、博士と爲り、太中大夫に至る、正朔を改め、禮樂を起さんことを請ふ、諸大臣、之を忌み、長沙王の太傅に貶せらる、後、梁の懷王の太傅と爲る、年三十三にして卒す、『新書』『賈長沙集』の著あり、世に其の貶せられたる點を以て不遇と稱するも、決して不遇の人にはあらず、汲黯、漢の濮陽の人、字は長孺、武帝の時、東海太守と爲る、東海大に治まる、召して九卿と爲す、面折廷諍す、帝、之を嚴憚す、嘗て曰く、古、社稷の臣あり、黯の如きは之に近し、後出でて淮陽太守と爲る、淮陽政清し、七歲にして卒す、求我、『易』に童蒙求〻我と

あり、隷人、『左傳』に、隷人牧圉とあり、隷人は罪人が木義、轉じて賤役を執るものを謂ふ、例せば奴隷なぞと云ふが如し、

【題義】張令公は張說なりとの說と、張九齡なりとの說とあり、張說は誤る、張九齡なり、開元二十一年に張九齡は中書令と爲る、二十五年に貶せられ、二十八年に卒す、右丞は張九齡の爲め右拾遺に擢んでらる、張說と張九齡は共に先後して中書令と爲る、故に誤るもの多し、

【大意】筆を珥んで以て天子の丹陛に趨り、璫を垂れて以て天子の玉除に上る、步簷して出づるは青瑣闥なり、方轎にして出づる車は畫輪車なり、市に於ては已に千金の字を閱し、朝に於ては五色の詔書を開く、君を輔けて帝典に光輝あらしめ、士を薦めて公車に滿たしむ、時あり伏奏して游獵の爲めの駕を停めしめ、時あり書を橫たへて石渠の重んずべきを知らしむ、宮中に於て角抵などの游戲を罷めしむ、是の故に儲胥卽ち政治以外の游處に幸すること希なり、唐の天統は堯の後なることを知らしめ、唐の王者の制は魯人の詫る制を却つて笑ふに至らしむ、屢ば中國の患を爲す匈奴も遙に俯伏し、漢相と同じき公は良に譬裾儼然たり、自ら思ふに賈生は眞に不遇の人にあらず、汲黯なぞは自ら自身を疎んずるが如し、易を學ぶの公は我に敎を求むるが如きも、詩を言うて卻つて予が志を起さしめらる、嘗て大夫の後に從ひし身、賤役と爲るも惜しむ所にあらず、

【餘論】此の篇、十一韻を以て成す、珥筆より漢相に至る八十字は、張令公が事を敍し、賈生以下は自序するものの如し、案するに、此の作、右丞年四十一二にして、令公は六十三四の時に當る、然るに顧可久は、此の詩を以て、安祿山の反後の作とす、祿山の反するは、九齡の卒後十五年の事なり、祿山が契丹を討ち、敗績したる時の作なり、是の故に、此の詩は、令公の德に感じたるを以て呈し、兼ねて自己の懷抱を敍したるに止まる、隷人を以て祿山の僞官を受けた罪を敍すと言ふ者は、深く歷史を考へざるが爲めなり、題に上令公墓とあらば或は然らん、生きて居る人に上るには能はざる藝當なり、詩として論ずべきは、金の字複し、從の字も亦複す、余は傳寫の誤ならんと思へども、今何等考ふべき方なし、顧可久、此の詩を評して最妙最妙と言ふ、右丞、知るあらば、九泉の下に苦笑すべきなり、

哭褚司馬

褚司馬を哭す

妄識皆心累、浮生定死媒。
誰言老龍吉、未免伯牛災。
故有求仙藥、仍餘遁俗杯。
山川秋樹苦、隱戶夜泉哀。
尙憶青驪去、寧知白馬來。

妄識皆心累、浮生定んで死媒、
誰か言ふ老龍吉と、未だ免れず伯牛が災、
故に仙を求むる藥あり、仍ほ俗を遁るる杯を餘す、
山川秋樹苦しみ、隱戶夜泉哀しむ、
尙憶ふ青驪の去るを、寧ぞ知らん白馬の來るを、

漢臣修史記。莫蔽褚生才。　漢臣史記を修せば、褚生が才を蔽ふこと莫かれ、

【注解】妄識、眞識の反對、聖者の識を除く外、皆妄識なり、老龍吉、『莊子』に、何荷甘は神農と同じく老龍吉に學ぶ、神農、几に隱りて、戶を閉ぢ寢眞す、何荷甘は、日中戶を啓いて入りて曰く老龍死すと、神農、杖に隱り、杖を拋して起ち、嘘唏杖を投じて笑うて曰く、天予が歸陷慢誕を知る、故に予を棄て死亡す、夫子、予の狂言を發する所無くして死するかな、伯牛、『史記』に、伯牛惡疾あり、孔子往いて之を問ふ、青驪、善の李少君、死後百餘日、人、何東蒲坂に、青驪に乘りて行くを見る、帝、之を聞き、棺を發けば、見る所無し、白馬、後漢の范式、少うして大學に游び、褚生と爲る、汝南の張劭と友と爲る、劭、字は元伯、二人並びに鄉里に歸るを告ぐ、式は仕へて郡の功曹と爲る、忽ち夢に元伯を見る、元是乘駕履屐にして呼んで曰く、巨卿、吾、某日を以て死す、當に爾の時を以て葬むるべし、永く黃泉に歸らん、子未だ我を忘れざるも、豈能く相及ばんや、式悅然として覺め、悲嘆して泣下る、便ち朋友の喪に服し、其の葬日に投じ、馳せ往きて之に赴く、式未だ到らざるに、喪已に發引す、既に壙に至る、將に窆せんとして柩進まず、其の母、之を撫して曰く、元伯豈望むこと有るか、柩を停め時を移す、乃ち見る式が素車白馬、號哭して來るを、其の母、之を望んで曰く、是れ必ず范巨卿ならん、既に至り哭して曰く、死生、路を異にす、永く此れより辭す、會葬する者千人、感嘆めに涕を揮ふ、式因つて繡を執りて柩を引く、是に於て乃ち前む、褚生、『史記』、索隱に張晏が曰く、褚先生は潁川の人、章陵云ふ褚少孫、宣帝の時博士と爲る、沛に寓居し、大儒王式に事ふ、故に先生と號す、太史公が書を讀ぐ、

【題義】褚氏なる人が司馬の官にて死せるを悲しんで作りし詩とす、

【大意】我輩淺人等の是とか非とかの妄識は、畢竟するに皆心の累である、浮生は必定して死の媒と爲る、生がなければ死も亦無きなり、誰か言ふや老龍吉の死や奇なりと、人間は未だ免れず、伯牛の災あることを、是の故に長生を欲して仙を求む藥もあり、又浮生の憂を忘れんと欲する通俗の酒杯もあり、山川も春樹は樂なるも秋樹は苦なり、窗戶を繞りて夜泉の音も哀し、蓋し死と雖も青驪に乘りて去りし人もあることを憶ふ、又白馬に乘り來りて友を哭せし人もありしことを知る、唐代に若し漢臣の如き史家あらば、褚先生の如き才人の名を蔽ふこと莫かれよ、

【餘論】此の篇、六韻を以て成る、輓詩として上乘に屬するもの、山川、窗戶の二句を除く外、例を皆古の賢人奇士に取り、以て今日の褚司馬に當てる、右丞の詩に於ける大家たるは論勿し、但し一面大歷史家と謂うて可なるものなり、

過沈居士山居哭之　　沈居士が山居を過ぎて之を哭す

楊朱來此哭。桑扈返于眞。　楊朱來つて此に哭す、桑扈眞に返る、
獨自成千古。依然舊四鄰。　獨自千古と成る、依然たり舊四鄰、
閒簷喧鳥雀。故榻滿埃塵。　閒簷鳥雀喧しく、故榻埃塵滿つ、
曙月孤鶯囀。空山五柳春。　曙月孤鶯囀じ、空山五柳春なり、
野花愁對客。泉水咽迎人。　野花愁へて客に對し、泉水咽びて人を迎ふ、
善卷明時隱。黔婁在日貧。　善卷明時隱れ、黔婁在日貧なり、

逝川嗟爾命。邱井嘆吾身。　逝川爾が命を嗟し、邱井吾が身を嘆ず、
前後徒言隔。相悲詎幾晨。　前後徒らに言に隔たる、相悲詎ぞ幾晨ぞ、

【注解】楊朱、『列子』に、龍伯之死、楊朱撫其尸而哭とあり。桑扈、『莊子』に、子桑戸、孟子反、子琴張の三人、相與に友とし善し、其然たり、間く有りて、子桑戸死す、未だ葬らず、孔子、之を聞き、子貢をして往きて事を待たしむ、或ものは曲を調み、或ものは琴を鼓し、相和し歌うて曰く、嗟來桑戸や、嗟來桑戸や、而已に其の眞に反り、而して我猶人たり、騎、子貢趨つて進んで曰く、敢て問ふ、尸に臨んで而して歌ふは禮か、二人相見て笑うて曰く、是れ惡ぞ禮の意を知らん、善卷、『高士傳』に、善卷は古の賢人なり、堯、位を禪ると聞きて、乃ち北面して之を師とす、堯終を受くるの後に及んで、舜、又天下を以て卷に讓る、卷が曰く、予、宇宙の中に立ちて、冬は皮毛を衣、夏は絺葛を衣、春は耕種し、形は以て勞動するに足り、秋は斂收し、身は以て休息するに足る、日出でて而して作し、日入りて而して息ふ、天地の間に逍遙して、心意自得す、吾何ぞ天下を以てせん哉、夫子の余を知らざるを惡しむ、遂に受けず、去つて深山に入り、其の終りを知らず、黔婁、『列女傳』に、魯の黔婁先生死す、曾子、門人と往きて之を弔す、之を哭して曰く、歿乎先生の終るや、何を以て謚とせん、其の妻曰く、廉を以て謚とせん、曾子曰く、先生在時、食は口に充たず、衣は形を蓋はず、死して手足斂まず、旁に酒肉無し、生きて其の美を得ず、死して其の榮を得ず、何ぞ此に樂しんで、謚して廉と爲すや、其の妻曰く、昔、先生、君嘗て之に幾くるに政を以てし、以て相國と爲さんと欲す、辭して爲さず、是れ餘貴あるなり、君嘗て之に粟三十鍾を贈ふ、先生辭して受けず、是れ餘富あるなり、彼の先生は天下の滯味を甘しとし、天下の卑位を安しとし、貧賤に戚戚たらず、富貴に忻忻たらず、仁を求めて仁を得、義を求めて義を得たり、其れ謚して廉と爲す、亦宜ならずや、逝川、鮑照の詩に、東海井に逝川に西山導に落暉とあり、「王僧孺墓碑文」に、感逝川之無拾、哀清暉之渺默とむり、邱井、『淨名經』に、是身如邱井、爲老所逼とあり、邱墟枯井なり、

【題義】沈居士は定めて學問ありて世と交はらず、不遇にして死せし人ならん、其の舊居を過ぎて之を哭するなり、

【大意】今日の楊朱たる我は友の爲め來りて此に哭す、桑扈から見れば眞に反ると言うて悲しまざるべし、獨自永眠して千古と成る、生きて居る者は來りて知る、依然たる舊四鄰であることを、閉簷には啾啾として鳥雀が喧し、而も故榻は埃塵に滿ちてある、曙月卽ち早曉には主人亡しと雖も、孤鶯は囀ず、空山には五柳尙ほ青色を呈して春なり、野花は愁へて客に對する如く、泉水は咽んで人を迎ふるに似たり、昔善卷は、明時に隱れて生も死の如くなりし、黔婁は富貴意の如くなるも强ひて自ら一生を貧に終る、逝川を見ては、爾が命と同じと嗟き、邱井を看れば、吾が身も此の如きかと嘆ずる、前と後と徒らに言に隔たる、相悲しむこと詎ぞ幾晨ぞや、

【餘論】此の篇は、八韻を以て成る、哭詩として、至情の至るものなるを知る、楊朱、桑扈、善卷、黔婁、四人皆古の賢人、是の人を以て是の人を哭す、沈居士が清廉の士たる良に知り易し、獨自の十字と、逝川の十字を以て、歸愚は特に佳句と爲す、余は閉簷の十字と、野花の十字を以て佳句と爲す、歸愚曰く、邱井用佛語猶空井と、大に誤る、邱には空の意義初めより無し、邱墟枯井を以て解せざるべからず、

哭祖六自虛

否極嘗聞泰。嗟君獨不然。
憫凶纔稚齒。羸疾至中年。
餘力文章秀。生知禮樂全。
翰留天帳覽。詞入帝宮傳。
國訝終軍少。人知賈誼賢。
公卿盡虛左。朋識共推先。
不恨依窮轍。終期濟巨川。
才雄望羔雁。壽促背貂蟬。
福善聞前錄。殲良昧上玄。
何辜鍛鸞翮。何事與龍泉。
鵬起長沙賦。麟終曲阜編。
城中君道廣。海內我情偏。

祖六自虛を哭す

否極まつて嘗て泰を聞く、嗟す君が獨り然らざるを、
憫凶纔かに稚齒、羸疾中年に至る、
餘力文章秀で、生知禮樂全し、
翰は天帳に留めて覽、詞は帝宮に入りて傳ふ、
國は終軍が少きを訝り、人は賈誼が賢を知る、
公卿盡く左を虛しうし、朋識共に先を推す、
恨みず窮轍に依ることを、終に巨川を濟ることを期す、
才雄羔雁を望み、壽促貂蟬に背く、
善に福して前錄を聞き、良を殲して上玄昧し、
何の辜ありて鸞翮を鍛ひ、何事ぞ龍泉を與ふる、
鵬は長沙の賦を起し、麟は曲阜の編を終ふ、
城中君道廣く、海內我が情偏し、

乍失疑猶見。沈思悟絕緣。
生前不忍別。死後向誰宣。
爲此情難盡。彌令憶夏纏。
本家清渭曲。歸葬舊塋邊。
永去長安道。徒聞京兆阡。
旌車出郊甸。鄉國隱雲天。
定作無期別。寧同舊日旋。
候門家屬苦。行路國人憐。
送客哀終進。征途哭復前。
贈言爲挽曲。奠席是離筵。
念昔同攜手。風期不暫捐。
南山俱隱逸。東洛類神仙。
未省音容閒。那堪生死遷。

乍ち失うて猶ほ見るかと疑ひ、沈思絕緣を悟る、
生前別るるに忍びず、死後誰に向うて宣べん、
此が爲め情盡き難く、彌よ夏に纏ふかと憶はしむ、
本家す清渭の曲、歸葬す舊塋の邊、
永く去る長安の道、徒に聞く京兆の阡、
旌車郊甸を出で、鄉國雲天に隱る、
定んで無期の別を作す、寧ぞ舊日の旋に同じからんや、
候門家屬苦しみ、行路國人憐む、
客を送りて哀んで終に進み、征途哭して復前む、
言を贈りて挽曲と爲し、奠席是離筵、
念ふ昔同じく手を攜へしことを、風期暫らくも捐てず、
南山俱に隱逸し、東洛神仙に類す、
未だ省せず音容の閒なることを、那ぞ堪へん生死の遷るに、

花時金谷飲。月夜竹林眠。
滿地傳都賦。傾朝看藥船。
羣公咸屬目。微物敢齊肩。
謬合同人旨。而將玉樹連。
不期先掛劍。長恐後施鞭。
爲善吾無已。知音子絕焉。
琴聲縱不沒。終亦斷悲絃。

花時金谷の飲、月夜竹林の眠、
滿地都賦を傳へ、傾朝藥船を看る、
羣公咸目を屬し、微物敢て肩を齊しうせんや、
謬つて同人の旨に合し、而して玉樹と連なる、
期せず先づ劍を掛けんとは、長く恐る後鞭を施すことを、
善を爲して吾已むこと無し、知音子絕焉、
琴聲縱ひ沒せざるも、終に亦悲絃を斷たん、

【注解】否絰雪聞琴、『抱朴子』に、寒裘代謝、否絰則琴とあり、憫凶、『左傳』に、寡君少遭憫凶、不能文とあり、憫は憂なり、父母の喪を謂ふ、稚齒、『王融曲水詩序』に、者年聞市井之游、稚齒登車馬之好とあり、幼稚を謂ふ、羸疾、『晉書』に、陶潛、躬耕自資、遂抱羸疾とあり、即ち「ツカレヤミ」なり、天帳、『書斷』に、梁鵠、字は孟皇、安定烏氏の人、少うして書を好み、法を師宜官に受け、八分の書を善くするを以て名を知らる、孝廉に舉げられ郎と爲る、靈帝、之を重んず、亦、鴻都門下に在り、幽州刺史に遷る、魏武甚だ其の書を愛し、常に帳中に置く、以て宜官に勝ると爲す、終軍、『漢書』に、終軍、字は子雲、濟南の人なり、少うして學を好み、辯博能く文を屬するを以て郡中に聞こゆ、年十八、選ばれて博士弟子と爲る、府に至りて受道す、太守、其の異才有るを聞きて召見す、甚だ之を奇とす、賈誼、年十八、詩書を誦し、能く文を屬す、虛左、左席を空虛にして、以て其の人の來るを待つ、窮廬、『晉書』に、阮籍、時に車宣獨駕、經路に由らず、車迹窮する所、輒ち慟哭して返るとあり、瓦川、『尚書』に、若濟瓦川、用汝作舟楫とあり、蓋厲、『說苑』に、卻以蓋爲贄、蓋は羊なり、羊は羣して富せず、故に卿以て贄と爲す、大夫は雁を以て贄と爲す、雁は行列、長幼の聽あり、故に大夫以て贄と爲す、『詩經』に蓋羊の名あり、羊は「ヒツジ」の小なるもの、福善、『尚書』に天道福善とあり、優、『詩經』に優=我良人=とあり、優は優渥、良人を殺し盡くすなり、上玄、「揚雄賦」に將=郊=上玄=とあり、上玄は天を謂ふ、鵾賦、賈誼、長沙に居り、鵾鳥を看、其の不祥を惡しんで賦を作る、鵾鯤、孔子云ふ、丘、春秋を作り、元に始まり、麟に終る、王道成るなり、曲阜、『史記』に、周公旦を少昊の墟、曲阜に封ず、是を魯公と爲す、曲阜は魯の城中に在り、委曲長さ七八里、京兆阡、漢の武帝の時、京兆の令尹曹氏、茂陵に葬る、民、其の道を謂つて京兆阡と爲す、郊甸、潘岳の詩、登=高望=郊甸=とあり、風期、庾信の詩、風期帝共存とあり、神仙、『後漢書』に、郭林宗、洛陽に游び、始めて河南の尹李膺を見る、李膺、大に之を奇とし、遂に相友として善し、是に於て名京師に振ふ、後、鄉里に歸る、衣冠の諸儒、送りて河上に至る、車數千兩、林宗唯李膺と同舟にして濟る、衆賓、之を望み、以て神仙と爲す、金谷、石崇が金石詩序に曰く、余、元康六年を以て、太僕卿に從ひ、出でて使持節、監青徐諸軍事、征虜將軍と爲る、別墅あり、河南縣の界、金谷澗の中に在り、或は高く、或は下く、清泉、茂林、衆果、竹柏、藥草の屬あり、蓋く備はらざるは莫し、又、水碓、魚池、土窟あり、其の娛目懷心の物備はる、時に征西大將軍祭酒王詡、當に長安に遷るべし、余、衆賢と共に、送りて澗中に往き、晝夜游宴し、屢ば其の坐を遷す、或は高きに登り下きに臨み、或は水濱に列坐し、時には琴瑟笙筑、車中に合載す、而して各の詩を賦し、以て中懷を敍す、或は能くせざる者は、罰酒三斗と、竹林、魏氏春秋、嵇康、河內の山陽縣に寓居す、之と游ぶ者、未だ嘗て其の喜慍の色を見ず、陳留の阮籍、河內の山濤、河南の向秀、籍が兄の子の咸、瑯琊の王戎、沛の人劉伶、友と爲り、善游す、世に竹林七賢と稱す、都賦、『世說』に、庾仲、初めて「揚都賦」を作る、成りて以て庾亮に呈す、亮、親族の懷を以てす、大に其の名價を爲す、人人競ひ寫し、都下の紙之が爲め貴し、藥船、『晉書』「夏統傳」に、三月上巳、洛中王公以下、並びに浮橋に至る、士女群嘯し、車服路を燭す、統時に船中に在り、市る所の藥を賣らす、諸貴人車乘來る者雲の如し、統並びに之を顧みずとあり、同人、『周易』に同人卦あり、玉樹、『世說』に、魏の明帝、后が弟の毛曾と夏侯元とを共に坐せしむ、時人謂ふ、蒹葭、玉樹に倚ると、掛劍、『史記』に、季札初めて北に使し、徐君を過ぐ、徐君、季札の劍を

野しとす、曰敢て言ふこと勿し、季札心に之を知る、上國に使するが爲めに、未だ獻ぜず、還りて徐に至る、徐君已に死す、是に於て乃ち其の寶劍を解き、之を徐君が冢樹に繫けて去る、從者曰く、徐君已に死す、尙誰に與ふるか、季子曰く、然らず、始め吾已に心に之を許す、豈死を以て吾が心に倍かんや、爲善、『左傳』に、子產、子皮の卒するを聞き、哭し且曰く、吾已に善を爲すことを爲す無し、唯夫子、我を知る、知音、『楚辭章句』に、鍾子期死す、伯牙、琴を破り絃を絕ち、遂に復鼓せず、世に知音無きを以てなり、

【大意】天下の事否極まれば泰と爲ることを聞く、嗟乎君は然らざるなり、少年の時父母を喪ふの不幸に遭ひ、而して身體は羸疾にして中年に達す、羸疾ながら文章を作ること秀出せり、而して天性禮樂の全きを知らる、書の妙と、詞の奇は、天帳や帝宮に認めらる、舉國皆訝かる終軍が重用せらるるに似す年少なるを、人人壺く賈誼が賢なるをも知る、是に於て公卿は君を遇するに左席を以てし、朋識は君を以て先輩に推す、君は恨みず身の屢ば窮迫するを、志は大なるを以て人を善導せんと期す、才雄なるは羔雁を望み、壽促すは貂蟬としての位に背く、天道は善人に禍することは前錄にて已に聞く、又良人を殲滅することは上玄も昧しと言はざるべからず、天道は畢竟何の辜ありて鸞翮を鍛ふや、何事に依つて龍泉を與ふるや、鵩賦は賈長沙が最後の文章なり、春秋は孔夫子が最後の名著なり、城中は要するに君道廣く、海內は大なりと雖も我が情は偏し、今や乍ら君を失うて疑ふ猶ほ見るかと、沈思すれば君は眞に世と絕緣の人であることを悟る、生前已に別れるに忍びず、而も會ふときもあり、死後は會ふの時なし、我が志は、今後誰に向つて宣べんや、此の如き事を思考すれば、情は滾滾として盡きず、盡きざるのみならず、反對に彌よ種種なる心が纏綿し來る、君は本淸渭の曲に家す、又君の詩は淸渭の曲の如く淸し、今や舊塋域の邊に歸葬す、永く此の長安の道を去つて、徒らに京兆の阡の名を後人は聞くのみ、旌車は郊甸を出でて墓處に向ふ、鄉國は早已に雲天に隱る、必定して此の別は再會の期無し、昔別は再會あり、故に旋る、此の別は旋らず、門に候する家屬は皆惱苦す、此の行路たるや國人も皆憐れむ、黃泉の客を送るの哀の曲も終に進み、會葬する者、次第して哭して前む、贈言は挽曲と爲す、奠席は是離筵と爲す、念ふに昔日は同じく手を攜へて、好風と佳期には暫らくも捐てず、南山に隱逸を俱にし、東洛に神仙に類する游を爲せり、未だ省せず音容の間隔あらんとは、那ぞ堪へんや生死の遷移するに、花時は金谷に飲み、月夜は竹林に眠る、滿天地に都賦を傳へ、滿朝廷に藥船を看しむ、羣公咸屬目す、我等如き微物敢て君と肩を齊しうするに足らん、而も謬つて同人としての旨趣に合す、蒹葭の如き微物も玉樹と連なるの光榮を得、期せざりき我君が爲めに劍を掛けんとは、長く恐る後れて鞭を施することを、善を爲すも吾已むこと無し、知音なる君は聲已に絕つ、琴聲縱ひ沒せざるも、終に亦悲絃は必ず斷たん、

【餘論】此の篇、三十二韻を以て成る、輓詩多く其の人の事業功績を敍するが爲め、動もすれば、四十韻、五十韻、乃至百韻と爲る、三十二韻は其の中を得たるもの、右丞年十八の作と傳ふ、同字の多き今一一擧示せず、但し年十八にして此の如く典據を有する文字を使用する、其の力は良に天授と謂

ふ可し、

王右丞集　卷十二終

王右丞集　卷十三

近體詩　七十三首

答裴迪

裴迪に答ふ

森森寒流廣。蒼蒼秋雨晦。
君問終南山。心知白雲外。

森森として寒流廣く、蒼蒼として秋雨晦し、
君終南山を問ふ、心に知る白雲の外、

【大意】裴迪が右丞の近況を問はるるに答ふる詩、終南山の麓は森森として寒流の水が廣く、且つ蒼蒼として秋雨の爲め四面晦し、君、終南山の近狀如何と問ふ、我が心は悠然として但白雲の外に在るのみ、

輞口遇雨憶終南山因獻絶句

裴迪

積雨晦空曲。平沙滅浮彩。輞水去悠悠。南山復何在。

【餘論】裴迪が詩、仄韻を以て成る、和詩亦仄韻とす、和詩を作るの禮法とす、清澄空明の四字を以て此の詩を評すべし、『陝西志』を案ずるに、輞川は藍田縣の南、嶢山の口に在り、縣を去ること八里、

水流灑、車輞の如し、然して川の盡くる處、鹿苑寺あり、卽ち王維が別業と、右丞歿せざる前に之を寺と爲す、

山中寄諸弟妹

山中、諸弟妹に寄す

山中多法侶。禪誦自爲羣。　山中法侶多し、禪誦自ら羣を爲す、
城郭遙相望。唯應見白雲。　城郭より遙かに相望めば、唯應に白雲を見るべし、

【注解】山中、終南山中なり、法侶、佛學を修習する者を謂ふ、僧伽、道侶、緇侶、禪侶、法侶、僧侶、近來の俗、僧侶の語を用ふ、惡魔の語、嘔吐三斗の餘ひあり、禪誦、坐禪と誦經とを謂ふ、或定慧を佛徒は之を三學と稱す、禪誦は卽ち定と慧となり、或を略したるのみ、此の三學を備へたる者、之を法侶と稱す、

【題義】『萬首唐人絶句』には、山中寄二弟妹一とあり、『唐詩正音』には山中寄二諸弟一とあり、案ずるに右丞に諸弟の有ることを知らず、又妹の有ることも『唐書本傳』に記載無し、乃ち知る此の題目は、佛敎にて、彼にも此にも、善男子、善女人、又は善姉、善妹の語を用ふると同じく、實際の自分の肉弟や肉妹を謂ふにあらずして、共に佛を奉じて自分より年の下る人を指して謂ふものなりと、然らば則ち山中寄二諸弟妹一の六字を以て、正しきものと謂ふ可し、

【大意】山中には法侶が多く住す、皆、禪誦し以て自ら羣を爲して和合す、城郭より相望むも、此の內容は見る能はず、唯、應に白雲の渺渺たるを見るのみならん、

【餘論】五絶の清妙、五排以上のもの多し、此等の詩、平平凡凡なるに似て、其の輕妙雲の如くなるを知るべし、

聞裴秀才迪吟詩因戲贈

裴秀才迪が詩を吟ずるを聞き、因つて戲れに贈る

猿吟一何苦。愁朝復悲夕。　猿吟じて一に何ぞ苦なる、朝を愁へ復夕を悲しむ、
莫作巫峽聲。腸斷秋江客。　巫峽の聲を作す莫れ、腸は斷ゆ秋江の客、

【題義】裴迪が詩を朗吟する聲を聞きて、以て戲れに贈る詩、此の戲たる所謂、善戲謔不レ爲レ虐とか、又は前言戲レ之耳なぞの戲にて、道に於て妨げ無きなり、『中論』に、君子口無二戲謔之言一、言必有レ防と、是は一概の說にて、要するに狹義の解釋と見るべし、

【大意】猿の鳴聲を聞けば、一に何ぞ苦しむや、朝にも夕にも何事か愁悲して居るにやと思ふ、乃ち君の詩を吟ずるは可なり、然れども巫峽の聲、卽ち巫峽に於て鳴く猿聲に似たる聲を作すなかれ、其の吟聲を聞く秋江の客は恐らくは腸を斷つであらう、

贈韋穆十八

韋穆十八に贈る

與君青眼客、共有白雲心。　君と青眼の客、共に白雲の心あり、
不向東山去、日令春草深。　東山に向つて去らず、日に春草をして深からしむ、

【大意】韋君と我とは同じく青眼の客なり、相互に白雲の心あり、而も東山に向つて去らず、日日に春草をして徒らに深からしむ、

【餘論】白雲の心ある故を以て、東山に歸臥すれば可し、而も歸臥せば、東山は徒らに春草の深きに任す、劉須溪評する如く、瀟瀟有情、伎巧を弄する作とは同一ならず、

皇甫岳雲溪雜題　五首

皇甫岳が雲溪雜題　五首

鳥鳴磵

人閒桂花落、夜靜春山空。　人閒にして桂花落ち、夜靜かにして春山空し、
月出驚山鳥、時鳴春澗中。　月出で山鳥を驚かし、時に鳴く春澗の中、

【題義】皇甫岳は皇甫恂の子、其の人事蹟詳かならず、雲溪は總名にて、五景勝を有するならん、

【大意】人閒なるが故に桂花の落ちるを知る、夜靜かなるは春山に俗事空なればなり、月の出づる光に驚いて山に宿する鳥が飛び、時に鳴く春澗の中に、

【餘論】明の顧可久曰く、如此好景、安得不歆動好情、神古と、清の沈歸愚曰く、聲息臭味、迥出常格之外、後人摹彷不到、其故難知と、一讀すれば、氣垢の全く離るるを知る、

蓮花塢

蓮花塢

日日採蓮去、洲長多暮歸。　日日蓮を採りて去る、洲長くして暮歸多し、
弄篙莫濺水、畏濕紅蓮衣。　篙を弄して水を濺ぐこと莫れ、紅蓮衣を濕さんことを畏る、

【注解】塢は小陸、小さき土手を謂ふ、洲長、水中の居るべき處を洲と曰ふ、砂が高く盛りあがる處、弄篙、篙は舟を進むる棒、

【大意】蓮花塢と稱する側に洲があり、蓮花多くあり、乃ち日日に蓮を採りて去る、洲が長途なれば、悠悠として多くは暮に及びて歸る、暮に及びて歸るは可し、篙を弄して水を濺ぐことは不可なり、何故なれば紅蓮衣を濕すことを畏るればなり、

鸕鷀堰

乍向紅蓮沒復出清浦颺。　乍ち紅蓮に向うて沒し、復出でて清浦に颺る、
獨立何襪襪銜魚古査上。　獨立何ぞ襪襪たる、魚を銜む古査の上、

【注解】鸕鷀は和名「ジマツドリ」水鳥、形は烏に似て黑し、喙は白し、嘴曲りて鉤の如し、魚を食うて喉に入れば、則ち獲る、『神異經』に鸕鷀不二卵生一、口吐二其雛一とあり、水鳥にして高木の上に巢ふ、人之を飼養して、魚を捕へしむ、堰は土を築き、水の流れを塞ぐ所、堰堨と成語す、襪襪は、毛羽の衣の貌を謂ふ、又毛羽始めて生じ、けばたつ形なり、古査、査は槎と同じ、水中の浮木を謂ふ、

【大意】鸕鷀が乍ち紅蓮に向うて沒せしかと見れば、復清浦の方面に面を出して颺る、其の獨立して居る形は何ぞ襪襪たるぞ、魚を銜んで古査の上に在る、

【餘論】顧可久、此の詩を評して、此の鳥の本色を寫得すと曰ふ、眞に顧評の如くなり、

上平田

朝畊上平田暮畊上平田。　朝に畊す上平田、暮に畊す上平田、
借問問津者寧知沮溺賢。　借問す問津の者、寧ぞ知らん沮溺の賢を、

【大意】塵事に關せず、朝にも暮にも、唯上平田を畊すのみ、道なぞを說いて、天下を周游する、問津者に我は問ふが、君等は一心に畊作する長沮や桀溺の賢人なるを知らざるべし、

【餘論】論語中の語にして、大に人に關係する倫理の問題を、平易に二十字中に收む、高手と歎せざるを得ず、

萍池

春池深且廣會待輕舟廻。　春池深うして且つ廣し、會ま待つ輕舟の廻るを、
靡靡綠萍合垂楊掃復開。　靡靡として綠萍合し、垂楊掃うて復開く、

【注解】萍池、萍は浮萍、卽ち浮草なり、會待、會は要なり、合なり、又必然の辭なり、故に「メマタマ」と訓み、又「カナラズ」と訓むときあり、今は「メマタマ」にて可なり、靡靡、宣義を二三に用ふる例あるが、今は浮草の南北相順ひ相隨ふ貌を謂ふ、

【大意】春日の萍池は水が深くして且廣し、會ま待つ輕舟の廻るに興趣あることを、輕舟が廻るが故に綠萍が靡靡として合し、又垂楊の條枝が左右に開く、

【餘論】劉須溪評して曰く、每每靜意、得之偶然、顧可久曰く、諸作皆平澹、寫去自玄古と、

輞川集 并序

輞川集 并に序

余別業在二輞川山谷一。其游止。有二孟城坳。華子岡。文杏館。斤竹嶺。鹿柴。木蘭柴。茱萸沜。宮槐柏。臨湖亭。南垞。欹湖。柳浪。欒家瀨。金屑泉。白石灘。北垞。竹里館。辛夷塢。漆園。椒園等一。與二裴迪一。閒暇各賦二絶句一云爾。

余が別業は、輞川の山谷に在り、其の游止に、孟城坳、華子岡、文杏館、斤竹嶺、鹿柴、木蘭柴、茱萸沜、宮槐柏、臨湖亭、南垞、欹湖、柳浪、欒家瀨、金屑泉、白石灘、北垞、竹里館、辛夷塢、漆園、椒園等あり、裴迪と、閒暇各の絶句を賦すと云ふ爾、

孟城坳

孟城坳

新家孟城口。古木餘二垂柳一。　新に家す孟城の口、古木垂柳を餘す、

來者復爲誰。空悲昔人有。　來者は復誰と爲す、空しく悲しむ昔人の有なりしを、

【注解】輞川は前に辨ぜり、坳は凹と同義の字、塊が凹にして下きを謂ふ、和訓、之を「ヲボミ」と謂ふ、岡は邱岡、山脊を謂ふ、欒は欒樹、小木を編みて欄と爲し、以て鹿や犬の類の侵入を防ぐ、俗に「シガラミ」と稱す、沜、沂に讀り易し、水涯を沜と謂ふ、沜沜と成語すれば水流を形容するなり、垞は小邱を謂ふ、塢は小障を謂ふ、漆園、漆は「ウルシ」の樹、周に漆園あり、吉、莊周、之が宋と爲る、

【大意】新に家を孟城の坳口に設く、古木としては唯垂柳を餘すのみ、現在に棲まんと欲する者は己なるが、後來此に居住する者は誰と爲すか、我は悲しむ昔人が此を有したりしことを、

【餘論】小小の語言中に、一二は現在を謂ひ、三は未來を謂ひ、四は過去を謂ふ、人事代謝の感窮まらざるなり、劉須溪云ふ、俯仰曠達不レ可レ得と、顧可久云ふ、玄思長慨、遒語宛曲、沈歸愚云ふ、言後レ我而來者、不レ知二何人一、又何必悲二昔人之所一レ有耶、達人每作二是想一、三家の評、皆是佳と爲す、

孟城坳

裴迪

結レ廬古城下。時登二古城上一。古城非二疇昔一。今人自來往。

華子岡

華子岡

飛鳥去不レ窮。連山復秋色。　飛鳥去りて窮まらず、連山復秋色、

上下華子岡。惆悵情何極。　上下す華子岡、惆悵情何ぞ極まらん、

【大意】華子岡を飛び去る鳥は、無數に皆飛んで去る、連山を見るに復秋色を呈す、我は華子岡を上つたり下つたりして、惆悵たる情は曾て究極する無し、

華子岡

裴迪

落日松風起。還レ家草露稀。雲光侵二履跡一。山翠拂二人衣一。

文杏館

文杏栽爲レ梁。香茅結爲レ宇。　文杏栽して梁と爲し、香茅結んで宇と爲す、
不レ知棟裏雲。去作人間雨。　知らず棟裏の雲、去つて人間の雨と作ることを、

【注解】文杏の文は、香茅の香に對して謂ふ、杏は「アンズ」梅に似たる果樹なり、栽は、栽植「ウエル」が普通なるも、今は反對に裁りての意義、樑は、棟梁と成語す、屋棟を支へる大なる横木、俗は「ハリ」と解す、香茅、茅は菅茅「チガヤ」なり、宇、大にも小にも種種に用ふる義を有す、今は屋宇にて、小屋を謂ふ、

【大意】文杏館は杏樹を以て梁と爲し、草茅を以て屋宇と爲す、梁棟の裏より生ずる所の雲が、戸を出でて以て人間の雨と變ずることを知らず、

【餘論】余は曾て日光山に寓し、又、山中を往來することを好む、甲斐の天目山棲雲寺を訪ふこと三度、破壞の極なる本堂に在りて、乃ち此の三四の句の實況なるを歎嘘せり、顧氏曰く、景色虛曠可レ想と、信に然り、

文杏館　裴迪

迢迢文杏館。躋攀日已屢。南嶺與二北湖一。前看復廻顧。

斤竹嶺

檀欒映二空曲一。青翠漾二漣漪一。　檀欒空曲に映じ、青翠漣漪に漾ふ、
暗入二商山路一。樵人不レ可レ知。　暗に商山の路に入る、樵人知る可からず、

【注解】斤竹、松谷曰く、裁飢の『竹譜』劉美の『續竹譜』、釋贊寧の『筍譜』、皆、斤竹の名無し、唯謝靈運が斤竹澗より嶺溪を越えて行く詩あり、又靈運の『游名山志』に、神子溪、南山、與二七里山一分流、去二斤竹澗一數里とあり、斤竹の名は始めて此に見るなり、檀欒、竹の細くして長き貌なり、

【大意】細竹が檀欒として其の影は空潭の曲に映じ、而して細竹の青翠は潭中の漣漪に漾ふを見る、此の斤竹嶺を過ぐれば暗に商山の路に入るに同じ、樵人は蓋し其の趣味を知るべからざるなり、

斤竹嶺　裴迪

明流紆且直。綠篠密復深。一逕通二山路一。行歌望二舊岑一。

鹿柴

空山不見人。但聞人語響。　空山人を見ず、但人語の響を聞く、
返景入深林。復照青苔上。　返景深林に入り、復青苔の上を照す、

【注解】空山、人の住せざる靜かな山を謂ふ、返景、『初學記』に、日、西に落ち、光、東を返照す、之を返景と謂ふ、劉孝綽の詩に返景入池林とあり、

【大意】空山は人が住せず、住せざるが故に人を見ず、何ぞ計らん何處とも分明ならざるが人語の響を聞くとは、而して返景の正に深林に入るを見る、入りしと思ふ返景が復青苔の上を照す、

【餘論】此の詩は五絶中の最上乘なるものにして、千古の名篇と謂はるるなり、劉が池林とあるを、深林と改めしのみにて、實に劉を凌駕して上る、北周の庾信、周の宗廟歌の詩に、終封三尺劍、長卷一戎衣の句あり、唐の杜甫、之に倣うて、風塵三尺劍、社稷一戎衣と、庾を凌駕すること千仞の上に在り、古人を學んで、而して古人に駕す、是皆大宗師の力量、庸人の云爲するを許さざる所なり、沈歸愚、此の詩を評して、佳處不レ在二語言一、與ヲ陶公采二菊東籬下一、悠然見南山上同、黃香石曰く、五絶乃五古之短章、最難二簡古渾妙一、唐人此體、右丞可レ稱二妙手一、我が邦の廣瀨淡窗曰く、採二菊東籬下一、悠然見二南山一、山氣日夕佳、飛鳥相與還、王摩詰一世の佳句、大抵此の中より點化し來れり、善く讀む者、自から之を知らん、此の詩を評して云云するもの多きも、煩を避けて之を略す、

日夕見二寒山一。傳爲二獨往客一。不レ知松林事。但有二麋鹿跡一。

木蘭柴　　木蘭柴

秋山斂餘照。飛鳥逐二前侶一。　秋山餘照を斂め、飛鳥前侶を逐ふ、
彩翠時分明。夕嵐無二處所一。　彩翠時に分明、夕嵐處所無し、

【注解】斂、收斂、餘照が山に藏れたるを謂ふ、前侶、侶は朋友を謂ふ、處所、居る所なり、宋玉の「高唐賦」に、風止雨霽、雲無二處所一とあり、

【大意】秋山には餘照が已に斂まる、後の飛鳥は前の飛鳥を逐ふが如くに歸を急ぐ、天彩と林翠とは時に分明なるも、夕日の嵐氣は全く居所を消滅する、

【餘論】此の詩は『別裁』に無く、『三昧集』に有り、頗可久評して曰く、是詠二木蘭柴一時景色一逼レ人、造化盡在二筆端一と、大に當る、

木蘭柴　　裴迪

蒼蒼落日時。鳥聲亂二溪水一。緣レ溪路轉深。幽興何時已。

茱萸沜　　茱萸沜

結實紅且綠。復如花叟開。　實を結んで紅にして且つ綠、復花叟に開くが如し、
山中偷留客。置此茱萸杯。　山中偷し客を留めば、此の茱萸杯を置かん、

【注解】茱萸、和名「カハハゼカミ」、漢土の俗、九月九日、高山に上り、此の實を頭に插めば以て邪氣を拂ふと謂ふ、茱萸杯、庾信の詩に芙蓉承酒杯とあり、是の故に茱萸杯は芙蓉杯の誤なりと稱す、余が所藏の明板不分卷の王維集、顧元緣本、凌本、皆芙蓉杯に作る、之に從ふべし、芙蓉は杯の名とす、

【大意】茱萸が實を結び紅色と綠色とあり、其の實が美麗にして花が兩度開くかと疑はる、山中に偷し客を留宿さすることあれば、芙蓉杯に宜しく茱萸の實を入れて飲むを薦めよ、

茱萸沜　　裴迪

飄香亂椒桂。布葉間檀欒。雲日雖迴照。森沈猶自寒。

宮槐柏　　宮槐柏

仄徑蔭宮槐。幽陰多綠苔。　仄徑宮槐に蔭し、幽陰綠苔多し、
應門但迎掃。畏有山僧來。　應門但迎掃す、畏らくは山僧の來る有らんことを、

【注解】仄徑、仄は側と同じ、大路にあらず、旁側の徑を謂ふ、應門、『詩經大雅』に廟立應門、應門將將とあり、宮城の正門を謂ふ、夏に轉じて來客の取次を爲す者を謂ふ、晉の李密、內無應門五尺之僮とあり、今の句は後の義に用ふ、

【大意】仄徑は離宮の槐樹に蔭せられ、幽陰は綠苔頗る多し、應門して客を迎へ地を掃ふは、乃ち客として山僧の來るあるかを思へばなり、

宮槐柏　　裴迪

門南宮槐柏。是向敞湖一道。秋來山雨多。落葉無人掃。

臨湖亭　　臨湖亭

輕舸迎上客。悠悠湖上來。　輕舸迎へて客を上せ、悠悠として湖上に來る、
當軒對樽酒。四面芙蓉開。　軒に當りて樽酒に對すれば、四面芙蓉開く、

【大意】輕舸を以て迎へて客を舸に上らしめ、悠悠として湖面の中心に來る、而して亭の軒窗に當りて樽酒に對坐すれば、東西南北に盡く芙蓉の開くを看る、

【餘論】顧可久評して曰く、遠景彌幽、近景可即、澹適乃爾、意興極玄著、此の詩の結句、芙蓉開、前首の茱萸杯、山僧來、皆平三聯なり、五絕は卽ち五古の短章、此の義明白とす、

臨湖亭　裴迪

當ㇾ軒彌混漾。孤月正徘徊。谷口發聲發。風傳入ㇾ戸來。

南垞　南垞

輕舟南垞去。北垞淼難ㇾ卽。　輕舟南垞に去る、北垞淼として卽き難し、
隔ㇾ浦望二人家一。遙遙不二相識一。　浦を隔てて人家を望めば、遙遙として相識らず、

【大意】輕舟に乘じて南垞の方面に向うて去る、北垞は遙よ遠くなりて淼淼として卽き難し、舟中より浦を隔てて以て人家を望めば、遙遙として何の邨なるや相識る能はず、

南垞　裴迪

孤舟信ㇾ風泊。南垞湖水岸。落日下二崦嵫一。清波殊淼漫。

欹湖　欹湖

吹ㇾ簫凌二極浦一。日暮送二夫君一。　簫を吹いて極浦を凌ぎ、日暮れて夫君を送る、
湖上一廻ㇾ首。青山卷二白雲一。　湖上一たび首を廻らせば、青山白雲卷く、

【注解】吹簫、簫は竹管を列べ、編みて作るもの、大簫は二十四管、小簫は十六管、底の有と無との二種あり、庾信の詩に吹ㇾ簫迎二白鶴一とあり、夫君、妻が良人を敬稱する語なるが、意義を廣くして一般に稱することあり、『楚辭』に望二夫君一分不ㇾ見とあり、青山、拾谷本に山青に作る、余が所藏の明刻本に青山とあり、之を用ふ、

【大意】簫管を吹いて極浦を凌ぐは、日の暮るるを怖れて夫君を送らんと欲すればなり、乃ち湖上に於て一たび首を廻らせば、青山の方角に白雲が縱横に卷くを見る、

【餘論】秦の世に蕭史なる人あり、善く簫を吹く、妻よりして之を蕭郎と稱す、『列仙傳』中の人なれば、此の詩も暗に其の意を含めるものの如し、『三昧集』に此の詩を重視するは識ありと謂ふ可し、

欹湖　裴迪

空闊湖水廣。青熒天色同。艤ㇾ舟一長嘯。四面來二清風一。

柳浪　柳浪

分行接二綺樹一。倒影入二清漪一。　分行綺樹に接し、倒影清漪に入る、
不ㇾ學御溝上。春風傷二別離一。　學ばず御溝の上、春風別離を傷むことを、

【注解】分行、意義明白ならざるが、甲乙が其の行を分離する義と察するなり、綺樹は樹の名詞にあらず、玉樹と同じく、字を綺麗に飾るなり、

【大意】柳浪の旁を行く者、分分に綺樹に接して行く、而して其の影を倒して清淵に入る、學ぶにはあらず、御溝の上に、春風に別離を傷むことを、

柳浪　裴迪

映ㇾ池同一色。逐ㇾ吹散如ㇾ絲。結ㇾ陰既得ㇾ地。何謝陶家詩。

樂家瀨

颯颯秋雨中。淺淺石溜瀉。　颯颯たり秋雨の中、淺淺として石溜瀉ぐ、
跳ㇾ波自相濺。白鷺驚復下。　波を跳らして自ら相濺ぐ、白鷺驚きて復下る、

【注解】石溜瀉、謝朓の詩に、雲歸青莎被、澌澌石溜瀉とあり、跳波、張華の詩に素蟻自跳波とあり、

【大意】颯颯と聲を爲す秋雨の中、淺淺たる響は石溜瀉ぐなり、其の水は波を跳らして自ら相濺ぎ、白鷺は其の波聲に驚いて飛んで復下る、

【餘論】此の詩は、韻脚正しきも、平仄は近體の如くならず、五絶の作法、良に易易たり、

樂家瀨　裴迪

瀨聲喧極浦。沿步向南津。汎汎鬼鳴渡。時時欲ㇾ近人。

金屑泉

日飲金屑泉。少當千餘歲。　日に金屑泉を飲み、少うして當に千餘歲なるべし、
翠鳳翔文螭。羽節朝玉帝。　翠鳳文螭翔り、羽節玉帝に朝す、

【注解】金屑、唐の段成式が撰する『酉陽雜俎』に、魏の明帝の時、昆明國、群雀鳥を貢す、金屑を吐きて粟の如し、とあり、蓋し泉とは關係なし、今の金屑は猶ほ玉屑の如きか、玉屑を飲めば、長生なるのみならず、一生無病なりと、是も『酉陽雜俎』に其の事を載す、翠鳳、『拾遺記』に、西王母、翠鳳の輦に乘じて來り、前導するに文虎文豹を以てし、後には麗麟常羊を列すとあり、羽節、羽蓋と毛節を謂ふ、共に是仙人の儀衛なり、『眞人昇仙記』に、五色霞の内に、霓旌羽節仙童靈官百餘人を見るとあり、

【大意】毎日毎日金屑泉を飲む者は、少年の容貌の如く見ゆるも已に千餘歲の人なり、千年も生きる人は、翠鳳の車に乘じて文螭を驅役し、羽蓋毛節の盛儀を爲して以て天の玉帝に朝謁することを得、

金屑泉　裴迪

潔渟澹不ㇾ流。金碧如ㇾ可ㇾ拾。迎ㇾ晨含ㇾ素華。獨往事ㇾ朝汲。

白石灘

清淺白石灘。綠蒲尙堪ㇾ把。　清淺白石灘、綠蒲尙ほ把るに堪へたり、

家住水東西。浣紗明月下。　家は住す水の東西、紗を浣ふ明月の下、

【注解】灘は所謂石灘、石多く、水急流にして、舟行困難の所を謂ふ、日本にて遠州灘、玄海灘、播磨灘などと稱するは、舟行の困難なればならん、貨は遠州洋、玄海洋、播磨洋と稱すべきなり、大船は灘を行く能はず、小舟のみ困難なる所を灘と稱す、是の故に、淸淺の文字を注意して見よ、直ちに首肯するなり、玄海、遠州、何ぞ是れ淸淺ならんや、灘は河川に於て用ふ、海に於て用ひず、尙を諸本尙に作る、余は所藏本の朋板に依る、浣紗、灘なればこそ浣ふべし、洋に於ては浣ふべからず、

【大意】白石灘は水が淸淺なり、綠蒲も尙ほ以て把るに堪ふ、人家は灘の東西に住在して、各の紗を浣ふ明月の下に、

【餘論】此の詩は、『三昧集』之を採る、『別裁』には採らず、余は六朝の餘音あるかと思ふなり、

白石灘　　裴迪

跂石復臨水。弄波情未極、日下川上寒。浮雲澹無色。

北坨　　北坨

北坨湖水北。雜樹映朱欄。　北坨湖水の北、雜樹朱欄に映ず、

逶迤南川水。明滅青林端。　逶迤たる南川の水、明滅林端青し、

【注解】逶迤、逶蛇と同義、斜に水の流るる貌、青は顧可久本に淸に作る、非なり、

【大意】北坨は湖水の北に在りて、坨を繞る雜樹は橋の朱欄に映ずるを看る、而して逶迤として流るる南川の水は、或は明、或は滅して林端が青く映る、

北坨　　裴迪

南山北坨下。結宇臨二欹湖一。每欲二採櫈去一。扁舟出二菰蒲一。

竹里館　　竹里館

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。　獨坐幽篁の裏、彈琴復長嘯、

深林人不知。明月來相照。　深林人知らず、明月來りて相照す、

【注解】幽篁、『楚辭』に、余處二幽篁一兮、終不見天と、王逸曰く、幽篁竹林也とあり、呂向曰く、幽深也、篁竹叢也とあり、長嘯、『漢書向相傳』に、相少爲二書生一、不好語、而好爲二長嘯一とあり、

【大意】幽篁の裏に獨坐して、或は彈琴し、或は長嘯す、彈琴するも、長嘯するも、深林なれば人は曾て知らず、唯明月のみありて來りて相照す、

【餘論】此の詩は、諸家の選本採らざるもの無し、後世右丞の圖を作るもの、大底は、此の狀を寫す、黃家鼎曰く、人不知而月相照、正應二首句獨坐二字一と、顧華玉曰く、一時淸興、適與景會と、

竹裏館　　裴迪

來過竹里館。日與レ道相親。出入唯山鳥。幽深無二世人一。

辛夷塢

木末芙蓉花。山中發二紅萼一。　木末芙蓉の花、山中紅萼發く、
澗戸寂無レ人。紛紛開且落。　澗戸寂として人無く、紛紛として開き且落つ、

辛夷塢　　裴迪

【注解】辛夷、和名「コブシ」喬木にて落葉す、其の初發の狀筆尖の如し、北人呼んで木筆と爲し、其の花最も早開なれば南人は呼んで迎春花と爲す、芙蓉は蓮の異名たることは普通なり、又別に木芙蓉と稱する灌木あり、蓮花に似て紅白の花を著く、熱るに今の芙蓉は辛夷を指すにあれば、總て美麗なるものに此の字を轉用するものと思ふ、木末、『楚辭』に、搴二芙蓉兮木末一とあり、紅萼、萼は鄂と同じ、「ハナブサ」、「ハナノウテナ」是なり、紛紛を絲絲に作る本あり、非なり、

【大意】喬木の末端に芙蓉の花を著く、山中に於て紅萼を發く、萼發くも之を賞するものは誰ぞ、澗戸は寂寂として人無し、唯花が紛紛として開き且落つるのみ、

【餘論】此の詩は、幽寂中に於て、別に活動せるの意味を含み、余の最も愛誦するものなり、沈歸愚曰く、幽極、借二用楚詞一、因二顏色相似一也と、顧可久曰く、思致平澹閒雅と、二評共に宜し、

綠堤春艸合。王孫自留翫。況有二辛夷花一。色與二芙蓉一亂。

漆園

古人非二傲吏一。自闕經世務。　古人傲吏にあらざるも、自ら闕く經世の務、
偶寄二一微官一。婆娑數株樹。　偶ま一微官に寄す、婆娑たり數株の樹、

【注解】傲吏、『史記』に、莊子者蒙人也、名周、周嘗爲二蒙漆園吏一、と、郭璞の詩に、漆園有二傲吏一、傲は傲倨、傲慢、傲然、傲岸なぞと成語して、俗に「ダカブル」、「オゴル」、人を凌ぐ意義を持す、自闕、闕は缺と義同じ、婆娑、『晉書』に、殷仲文、與レ桑至二大司馬府一、府中有二老槐樹一、顧レ之良久而嘆曰、此樹婆娑、無二復生意一、普通には婆娑は舞ふ貌と注す、舞と無生意と何の關係かある、婆娑は舞ふ貌のみを指すにあらず、樹木の葉が疎にして、風に舞ふの貌と見るべきなり、

【大意】莊周と云ふ古人は必ずしも傲吏にあらざるも、自ら孔子の如く經世の務を闕く、偶ま漆園に身を寄せて小官吏と爲りて、婆娑たる數株の樹に在る、

【餘論】此の詩は、莊周を歌ふを以て、而して自況する意あり、非傲吏と謂ひ、自闕と謂ひ、微官と謂ひ、漆園の題目に託して右丞自身を歌ふものの如し、顧可久が評して、此漆園、不二必有二景色一、自與二古人高情一會と曰ふは、實に我が心を獲たり、傲の字、樂の意味に使用することも知らざるべからず、

漆園　　裴迪

好〻同早成〻性。果此諧〻宿諾〻。今日漆園游。還同〻莊叟樂〻。

椒園　　椒園

桂尊迎〻帝子〻。杜若贈〻佳人〻。　桂尊帝子を迎へ、杜若佳人に贈る、
椒漿奠〻瑤席〻。欲〻下〻雲中君〻。　椒漿瑤席に奠し、雲中君を下さんと欲す、

【注解】椒は茱萸に似て刺あり、葉堅うして脂澤あり、蜀人茶を作り、吳人茗を作り、皆、其の葉を合煮して以て香と爲すなり、桂尊、酒を造るに桂の水を以てす、是た酒の尊と爲す、帝子、『楚辭』に帝子降〻兮北渚〻とあり、杜若、『楚辭』に采〻芳洲兮杜若〻、將以遺〻兮下女〻、和語の「ヤブメウガ」なり、燕子花にはあらず、杜衡、杜連、白連、白芷、若芝の多名を有す、椒漿、『楚辭』に、貫〻桂酒兮椒漿〻とあり、王逸曰く、以〻椒置〻漿中〻と、雲中君、顧可久は雲中身に作る、五絃なれば古體の單味にて、十一眞と十二文とを同一に見ればなり、雲神を解して雲中君と謂ふ、『楚辭』にも雲中君の字あり、

【大意】桂尊を捧げて以て帝子を迎へ、杜若を采りて以て佳人に贈る、而して椒漿を以て瑤席に供奠し、雲中君の下界に下らんことを祈る、

【餘論】此の詩は多く詞を『楚辭』に取るが故に、帝子と謂ひ、佳人と謂ひ、共に單に比事にして、誰を指すと云ふことは無し、所謂俗人と言ひ難きもの、卽ち此の調を云ふ、顧可久曰く、雲中身身字、代〻雲中君字〻、亦是作法と、然らば顧が所見の本は雲中君に作らず、雲中身とあるものの如し、然りと雖も、通韻を以て雲中君と作る本多ければ、今其の多きに隨ふなり、

椒園　　裴迪

丹刺眞〻人衣〻。芳香留〻過客〻。幸堪〻調鼎用〻。願君垂〻採摘〻。

臨高臺送黎拾遺　　臨高臺黎拾遺を送る

相送臨高臺。川原杳何極。　相送る臨高臺、川原杳として何ぞ極まらん、
日暮飛鳥還。行人去不〻息。　日暮飛鳥還る、行人去りて息はず、

【注解】臨高臺、漢代の鼓吹曲の名、傷情の氣味を歌ふものなり、「高臺ニ臨ム」と點したる本あり、臨高臺と平讀するを可とす、黎は姓、拾遺は官名、黎の名は昕、

【大意】相送る處は臨高臺なり、高臺より望む所の川原は杳として極まり無し、日暮に及んで飛鳥は還るも、行人は去りて止息することなし、

【餘論】此の詩は『別裁』にも『唐詩選』にも『三昧集』にも皆採りて、佳章と爲す、顧可久曰く、景中寓〻情不〻盡、古澹沈著と、沈歸愚曰く、寫〻離情〻、能不〻露〻情態〻と、二家の評極めて亦可、

送別　　別を送る

山中相送罷。日暮掩柴扉。　山中相送り罷んで、日暮柴扉を掩ふ、
春草明年綠。王孫歸不歸。　春草明年綠なるも、王孫歸るや歸らざるや、

【注解】送別、必ずしも其の人あるにあらず、送別の意味を著はすが主なり、明年、顧可久本に年年に作る、余は所蔵の明刊本を正しとす、王孫は多年生草、深山に產す、莖高さ四五寸、莖の中部、四葉輪生し、形は楕圓にして長し、其の端、甚だ尖、夏月、莖頂に一花を開く、四瓣にして色は黃綠、根は藥料と爲る、早蕨、牡蒙は其の別名なり、

【大意】山中にて人を送り罷み、日暮に及んで以て柴扉を掩ふ、謂ふに王孫なる春草は明年も今年の如く綠ならん、而して王孫なる人間は明年は歸るや歸らざるや、

【餘論】此の詩も、各種の選本收めざるもの無し、『萬首唐人絕句』『唐詩正音』『唐詩品彙』『唐賢三昧集』『唐詩別裁』皆之を取る、格調派の者も神韻派の者も、性靈派の者も、此等の詩に於ては一致して嘆ずる所の神品なり、『抱朴子』に王孫公子、優游貴樂とありて、王孫や公子は安住して修靜すること能はず、南北東西に享樂を逐うて游び、而して歸るを忘る、此等の事を諷するが本旨を以て成るの詩、明の高靑邱は美游不如歸と歌へり、蓋し亦此の意、顧可久曰く、自謂因歸人、感懷惆悵不窮、婉曲含蓄多味、高古、

別輞川別業　　輞川の別業に別る

依遲動車馬。惆悵出松蘿。　依遲として車馬を動かし、惆悵として松蘿を出づ、
忍別青山去。其如綠水何。　青山に別れ去るに忍びんや、其れ綠水を如何にせん、

【注解】依遲、捨つるに忍びざる貌、王融の詩、參差興別襟、依遲起離慕とあり、松蘿は松蘿と稱する一種の蔓草と爲す說と松上に生ずる蘿を謂ふとの二說あり、余は松に挂かる蘿と見るなり、

【大意】心進まざるが故に、依遲として車馬を動かし、心は惆悵として松門藤蘿の中を出で去る、青山と暫時なるも別れ去るに忍びず、其れ此の綠水を如何せんや、

【餘論】語淺くして情深しとは、此等の詩を指して言ふか、本集に弟の王縉の詩を載す、左に錄すべし、

別輞川別業　　王縉

山月曉仍在。林風涼不絕。慇懃如有情。惆悵令人別。

崔九弟欲往南山馬上口號與別

崔九弟、南山に往かんと欲す、馬上の口號、與に別る

城隅一分手。幾日還相見。　城隅一たび手を分ち、幾日か還相見ん、
山中有桂花。莫待花如霰。　山中桂花あり、花の霰の如くなるを待つこと莫れ、

【注解】花如霰、梁の元帝の詩に、上林朝花色如霰とあり、鮑令暉が詩に、春花落如霰とあり、

【大意】城隅に於て今日一度分手すれば、再會は要するに幾日であるか判らず、但し山中には桂花が有る、是の桂花の發く時に歸るがよし、桂花が飛散して霰の如くなるの時は宜しからず、

【餘論】此の詩の題目に就いて、一番詳悉なるを十三字の今の題とす、馬上以下の六字は無き本もあり、顧可久曰く、言外意不盡、冲澹自然、本集に裴迪が詩を載す、

同詠　　裴迪

歸山深淺去。須盡邱壑美。莫學武陵人。暫游桃源裏。

留別崔興宗

崔興宗に留別す

駐馬欲分襟。清寒御溝上。　馬を駐めて襟を分たんと欲す、清寒御溝の上、
前山景氣佳。獨往還惆悵。　前山景氣佳なり、獨往還惆悵す、

【大意】己が馬を駐めて分襟して談話を交へんと欲するも、御溝の上は信に清寒にして久駐しがたし、前山を望めば景氣が良に佳なり、乃ち別れて獨往するも心は惆悵たるなり、

息夫人

息夫人

莫以今時寵。能忘舊日恩。　今時の寵を以て、能く昔日の恩を忘るる莫し、
看花滿眼淚。不共楚王言。　花を看る滿眼の淚、楚王と共に言はず、

【注解】息夫人、『左傳莊公十四年』に、蔡の宮侯、息の爲めの故に、息嬀を娶めて、以て楚子に語ぐ、楚子、息に如き、食を以て入りて享し、遂に息を滅し、息嬀を以て歸り、堵敖と成王とを生まず、息嬀未だ言はず、楚子、之を問ふ、對へて曰く、吾、一婦人にして二夫に仕ふ、縱ひ死すること能はずとも、其れ又奚ぞ言はん、『本事詩』に、寒王重貴盛なり、寵妓數十人、皆絕藝上色なり、宅の左に餅を賣る者あり、其の妻麗白明潤、王、一見して屬目し、厚く其の夫に遣りて之を取る、寵惜、等に逾ゆ、環歲、因つて之に問ふ、故、復餅師を憶ふや否や、默然として對へず、王、餅師を召し、之を見せしむ、其の妻注視し、雙淚頤に垂れ、情に勝へざるが若し、時に王の座客十餘人、皆當時の文士、悽異ならざるは無し、王、命じて詩を賦せしむ、王右丞の詩先づ成る、座客肯て繼ぐ者無し、王乃ち餅師に歸し、以て其の志を慰へしむ、

【大意】今日は非常に寵を蒙るも、而も能く舊日の恩を忘るる莫し、花を看れば樂しむべきに然らず、滿眼に淚を垂る、決して楚王と共に言はず、

【餘論】此の詩を作る、右丞年二十なり、寒王の座客中、恐らくは最年少ならん、而も長者をして、

繼ぐ者無からしむ、良に然るべきものならん、正面息夫人を借り、側面に餅師の妻を歌ふ、寧王をして怒らすして嘆せしむ、右丞の力たらしむるも、寧王も亦情を解する人と謂ふ可し、我が邦の冢田大峯は、『作詩質的』に、此摩詰詩、或以二第一二句一爲二一句一讀、非矣と、余曰く二句一讀法と爲すも、一句一讀法と爲すも、意味に於て異なること無し、經學者、文章家の詩を評する、總て理窟を以て解せんとす、誤らずと雖も、詩の眞を失するを免れず、清人の『珊瑚鈎詩話』に云ふ、杜牧之、息夫人詩、細腰宮裏露桃新、脉脉無言幾度春、至竟息亡緣二底事一、可レ憐金谷墜樓人、與二此王維詩一、語意遠矣、蓋學有二淺深一、識有二高下一、故形二于言一者不レ同也、今案ずるに杜牧之が詩も亦名篇とす、必ずしも清人の論の如くにはあらず、我が邦の齋藤拙堂曰く、摩詰詩、言二其情一、杜牧之詩、責二其義一、王と杜と作意に於て、當初より異なる、何ぞ必ずしも學の淺深と言はん、然りと雖も、詩は情を言ふものを以て第一義とす、此の第一義諦より、之を觀れば、右丞が詩は兄たり、小杜が詩は弟たるを免れず、黃培芳は崔九弟欲レ往二南山一の詩を嘆じて、此の詩を賞せざるは、余其れ何の意たるを知らず、

班婕妤　三首

玉窗螢影度。金殿人聲絶。　班婕妤　三首

玉窗螢影度り、金殿人聲絶ゆ、

秋夜守二羅幃一。孤燈耿明滅。　秋夜羅幃を守る、孤燈耿として明滅、

【注解】班婕妤、前漢の成帝が元帝に隨ざ卽位するや、班氏の女を後宮に容れ、始め少使と爲す、衆かにして大に寵し、婕妤と爲す、其の後、趙飛燕の姉妹、微賤より興りて、入內し、帝の爲めに寵せられ、班婕妤も退きて、太后に長信宮に供養す、而して賦を作り自から傷む、右丞乃ち此の題目に依りて、以て班氏が失寵後の情を敍ふものとす、明滅を不滅に作る本あり、非なり、

【大意】長信宮の玉窗を開けば螢影の度るを見る、金殿中は寂寞として人聲が絶ゆ、秋夜の長きを獨り羅幃を守りて居る、我に伴ふものは孤燈の光、耿として或は明或は滅と爲る、

宮殿生二秋草一。君王恩幸疎。　宮殿秋草を生ず、君王恩幸疎なり、

那堪聞二鳳吹一。門外度二金輿一。　那ぞ堪へん鳳吹を聞くに、門外金輿度る、

【注解】鳳吹、笙簫の聲を謂ふ、綱樂なり、「古樂府」に鳳吹方參差とあり、金輿、『史記』に、金輿鑣衝、以繫二其餘一とあり、

【大意】長信宮殿の庭には秋草生ず、草の生ずるは君王が恩幸疎なればなり、那ぞ堪へん忽ち鳳吹の聲を聞くに、此の鳳吹にて天子の行幸を知れども、其の金輿は門外を度りて、此の宮殿に來るにあらず、

【餘論】三首中、『別裁』は一首も取らず、『三昧集』は此の一首を取る、古人が唐絶に於て其の所好を異にすることを見るべし、

怪來妝閣閉。朝下不相迎。　怪來す妝閣の閉づるを、朝より下りて相迎へず、
總向春園裏。花間笑語聲。　總て春園の裏に向ふ、花間笑語の聲、

【注解】怪來、來の字は助語にて、何等の意義も無し、「怪シム」の意に過ぎず、朝下、帝側を辭して、長信宮に退下したるなり、

【大意】妝閣が開きてあれば人は怪しまざるも、閉ぢてあるから人は怪しむならん、而も怪しむ道理は無し、妾は朝廷を辭して、只今は君王をも迎へず、又、君王より召さるる身にもあらず、多くの宮女は總て春園の裏に游戯し、花間に笑語の聲の漏るるを傳ふ、

【餘論】此の詩は、古來より二樣に解釋す、明の吳吳山、我が邦の宇東山は總向の二句を解して曰く、此の間、太后や女中などと一つになりて、長信の花の間に、面白相に游ぶなり、恨みがあるからとて、悲しんで居られるものでない、大典師の如きは曰く、他の宮女輩、恩を受け方に春園の宴に向つて、花間に語笑す、一の聲字、婕妤が閤中に居りて、獨り聞くの狀を見る、共に正反對の意味と爲る、蓋し悲しんで居るも益も無し、或は花間に笑語する事もあらんが、此の詩を解するに笑語聲を婕妤が侍女等と共に作すなりと解するは、東山の所謂詩に不案内なる徒の說なり、典師の謂ふ如く、婕妤が閤中に在りて、他の恩寵を受くるものが、花間に笑語する聲を聞くと解するが正し、三首中、『唐詩選』には、此の詩を採りて餘の二首を採らず、『三昧集』と選を異にす、各家の意見を察すべし、明の顧與新は『唐詩品彙』に評して曰く、詠二婕妤一而猶爲二含レ嚬希レ寵之語一、似レ非二婕妤本相一、右丞少年の時の詠、老人と其の情異なる、一概の評を爲すもの、詩聖の爲め笑はれん、

題友人雲母障子

友人の雲母障子に題す

君家雲母障。持向野庭開。　君が家の雲母障、持して野庭に向うて開く、
自有山泉入。非因彩畫來。　自から山泉の入るあり、彩畫に因つて來るにあらず、

【注解】雲母は「キララ」と稱す、雲英と同じ、『漢書王莽傳』に、常服二雲母屏一、面非二親近一、莫レ得レ見也とあり、花崗岩中の主要成分を雲母と曰ふ、五色亂文なるもの、以て窗を飾ひ、亦屏障を造るべきなり、唐時、屏障を呼んで障子と爲す、杜甫に李尊師松樹障子歌あり、齊已に二龍障子歌あり、張祜に山水障子詩あり、

【大意】君が家に傳ふる天然の雲母障、持して以て野庭に向うて開く、自から山泉の此の中に入ることあるも、人間が彩畫に因つて製し來るものにあらず、

【餘論】此の詩、右丞年十五の時の作とす、獅子は初めより獅子なり、牛馬が老いて獅子と爲るにはあらず、

紅牡丹

綠艶閒且靜。紅衣淺復深。　綠艶閒にして且つ靜なり、紅衣淺にして復深なり、
花心愁欲斷。春色豈知心。　花心愁へて斷えんと欲す、春色豈心を知らんや、

【大意】葉は綠艶、閒にして且つ靜に、花は紅衣にして淺色と深色とあり、而して花心は何事か知らざるが、愁へて斷絶するが如し、春色は豈花の心を知らんや、

左掖梨花

閒灑堦邊草。輕隨箔外風。　閒に堦邊の草に灑ぎ、輕く箔外の風に隨ふ、
黃鶯弄不足。嗛入未央宮。　黃鶯弄して足らず、嗛んで未央宮に入る、

【注解】左掖、宮城正門の外、別に門あり、之を掖門と稱す、唐の門下北省は、日華門に在り、左掖と名け、又は東省と名く、中書北省は、月華門に在り、右掖と名け、又、西掖と名く、其の左掖門の旁に在る梨花を詠ぜしなり、箔外、箔は簾箔と成語して「スダレ」なり、金屬製もあり、珠玉製もあり、

【大意】花片が飛んで堦邊の草に灑ぎ、輕く飛ぶの花片は箔外の風に隨ふ、黃鶯は花片を弄して而も猶ほ足らず、嗛んで以て未央宮に入りて去る、

【餘論】此の詩は、邱爲と同じく賦したるものの如く、本集に邱爲が詩あり、詩としても、邱爲が兄にて、右丞は弟たり、『唐詩選』に邱爲が此の詩を採る所以なり、

左掖梨花　邱爲

冷艶全欺雪。餘香乍入衣。春風且莫定。吹向玉階飛。

口號又示裴迪

安得舍塵網。拂衣辭世喧。　安んぞ塵網を舍て、衣を拂うて世喧を辭し、
悠然策藜杖。歸向桃花源。　悠然として藜杖を策し、歸りて桃花源を向ふを得んや、

【注解】口號は、樂の簡文帝始めて用ふ、唐人多く之に倣ふ、所謂口に隨つて吟するなり、是の故に短章の題目にあり、長詩の題目に無し、安得、到底能はざることを謂ふ、塵網、陶淵明が詩に誤落塵網中とあり、藜杖、『莊子陸德明注』に、以藜爲杖とあり、藜は「アカザ」、之を以て杖を造る、輕ければなり、

【大意】平生の願は塵網を舍て、衣を拂うて斷然世喧を辭し、而して悠然として藜杖を策して、歸り

て桃花源に向はんと欲するなるが、此の願は得べからず、

雜詩　三首

家住孟津河、門對孟津口。　家は住す孟津河、門は對す孟津口、
常有江南船、寄書家中否。　常に江南の船あり、書を家中に寄するや否や、

【注解】孟津、津の名、河南省孟縣の南、今、河陽渡と曰ふ、周の武王、紂を伐ち、諸侯を此に會す、唐代は河清と稱す、河清にては詩情薄し、故に古名を用ふ、何處も同じく、津頭河口は、南北の人、東西の舟、往來して、或は此に留連し、或は津女の爲め、家を忘る、自樂天の琵琶行も亦津頭たるを忘るべからず、題して雜詩と曰ふ、孟津以外の詩も、此の題中に收むればなり、

【大意】家は孟津河に住在し、門は孟津口に對向す、常に江南より來泊する船あり、船中の客は書を家中に寄するや、或は忘るるや、

【餘論】家住の家は娼家なり、家中の家は各の其の客の家を指す、然らざれば、此の詩を讀むも意味解せざるなり、顧可久曰く、意甚濃至、沖澹雋永、

君自故鄉來、應知故鄉事。　君故鄉より來る、應に故鄉の事を知るべし、

來日綺窗前、寒梅著花未。　來る日綺窗の前、寒梅花を著くるや未だしや、

【大意】君は妾が故鄉より來ると聞く、然らば應に故鄉の事を熟知するなるべし、來る日妾が家の綺窗の前、寒梅花が開きしや、或は未だ開かざりしや、

【餘論】此の詩は、『三昧集』も『別裁』も共に採る、淵明が詩、爾自山中來、早晩發天目、我居南窗下、今生幾叢菊、宋の王半山が詩、道人北山來、問松我東岡、舉手指屋背、云今如許長、松谷曰く、此二首と右丞が此の詩と、同一杼軸、皆情到の辭、修飾を假らず、趣意遠からざるを覺ゆ、右丞只短句を爲し、一吟一詠、更に悠揚不盡の致あり、一語を贅せんと欲するも得ず、

已見寒梅發、復聞啼鳥聲。　已に寒梅の發くを見、復啼鳥の聲を聞く、
愁心視春草、畏向玉階生。　愁心春草を視、玉階に向つて生ずるを畏る、

【大意】已に寒梅の開くを見、復啼鳥の聲を聞く、乃ち知る時節が仲春に逼るを、今より愁心を以て春草の青青と生ずるを視ん、尋常通路の青青はよし、玉階前に青青と生ずるは是妾が愁へ且畏るるなり、

【餘論】忽にして冬、忽にして春、忽にして少、忽にして老、節序變じ易く、人時移り易きを宮女が愁ふる意味を寫し出すもの、良に五言の上乘とす、顧可久曰く、王孫遊兮不歸、春草生兮萋

蓑、脱胎換骨、要爲深婉、六朝の綺詩、往往此の如きものあり、『別裁』『唐詩選』『品彙』皆此を採る、愁心を顧可久本は心心に作る、愁心を以て正と爲す、

崔興宗寫眞

畫君年少時。如今君已老。　君が年少の時を畫く、如今君已に老いたり、
今時新識人。知君舊時好。　今時新識の人、知んぬ君が舊時好きことを、

【大意】君が年少の時の寫眞を見る、今日君に當面すれば、君は已に老人たり、今時君が新識の人は、必ず言はん、君が年少の時がよろしと、

山茱萸

朱實山下開。清香寒更發。　朱實山下に開く、清香寒うして更に發く、
幸有叢桂花。窗前向秋月。　幸に叢桂花有り、窗前秋月に向ふ、

【注解】山茱萸、黄過の茱萸は秋に花開き、秋に實を結ぶ、山茱萸は春二月花開きて、夏四月實を結ぶものの如し、『圖經本草』に詳說あり、然るに今は叢桂花に配するを見れば、秋と爲すものの如し、賢者の一考を乞ふ、

【大意】茱萸の朱色を呈する實が山下に開き、其の清香は寒潔にして更に發く、又幸に之に配するに兩株の桂花あり、窗前秋月の下に茱萸の香と桂香とを同時に嗅ぐ、

哭孟浩然

故人不可見。漢水日東流。　故人見る可からず、漢水日に東流す、
借問襄陽老。江山空蔡洲。　借問す襄陽老、江山空しく蔡洲、

【注解】孟浩然は襄州襄陽の人、少うして節義を好み、喜んで人の患難に赴く、鹿門山に隱る、年四十、乃ち京師に游び、嘗て大學に於て詩を賦す、一座嘆伏し、敢て抗する無し、張九齡、王維、雅より之を稱道す、維、私かに邀へて内署に入る、俄かにして玄宗至る、浩然、床下に匿る、維、實を以て對ふ、帝喜んで曰く、朕、其の人を聞いて、而かも未だ見ず、何ぞ懼れて匿れん、詔して浩然を出さしむ、帝、其の詩を問ふ、浩然再拜し、自から爲る所を誦す、不才明主棄の句に至り、帝曰く、卿、仕を求めず、而して朕未だ嘗て卿を棄てず、奈何ぞ我を誣ふるや、因つて放還せしむ、張九齡、荆州と爲り、辟して府に置く、府罷む、開元の末、疽を病んで卒す、集四卷あり、蔡洲、『水經』に、沔水、又、東南して蔡洲を經、酈道元曰く、漢の長水校尉蔡瑁、之に居る、故に蔡洲と名く、蔡洲は襄陽府城の東北、漢水の中に在り、一島を爲す、

【大意】故人は見んと欲するも見る可からず、漢水は日日に東流し去る、余は襄陽の遺老に問はんと欲す、蔡洲の江山は善詩人去つて後は、歌ふもの無くして、遂に空しく形あるのみ、

【餘論】此の詩は、全く浩然の體を學んで作る、是れ故人に對する情なればなり、世に王孟韋柳を四家と稱すること久し、四家としても、各の異體もあり、蓋し幽澹閑寂を主として作りたるものは、一致する所あれば、四家と幷稱する、良に其の理あり、此の詩の如き、表面は澹にして、裏面は實に腴なり、

王右丞集 卷十三終

王右丞集 卷十四

近體詩 三十三首

田園樂 七首

出入千門萬戸。　千門萬戸を出入し、
經過北里南鄰。　北里南鄰を經過す、
蹀躞鳴珂有底。　蹀躞として珂を鳴らす底か有る、
崆峒散髮何人。　崆峒に髮を散ずるは何人ぞ、

【注解】蹀躞は、顧本に躞蹀に作る、馬行の貌、又往來頻數の貌と注す、崆峒は山の名、甘肅省平涼府に在り、蓋し今は甘肅の山を指すにあらず、高き山の意味に見よ、

【大意】游官の人は千門と萬戸を我がものの如く出入し、豪俠の人は、北里と南鄰を、是亦我がものの如く經過す、別に蹀躞として珂を鳴らすは底物にや、崆峒に上りて髮を散ずるは是何人ぞや、

【餘論】田園樂は要するに宦人や俠客以外に別に規則に縛せられざる田園の境界を歌ふものとす、元の劉須溪は曰く、無二一語可俗と、

再見封侯萬戸。　再見して侯に萬戸に封せられ、
立談賜璧一雙。　立談して璧一雙を賜ふ、
詎勝耦耕南畝。　詎ぞ勝らん南畝に耦耕するに、
何如高臥東窗。　何如ぞや東窗に高臥するに、

【注解】立談、楊雄が「解嘲」に「或立談間而封侯」とあり、賜璧、『史記范雎傳』に、「虞卿一見、趙王賜白璧一雙、黄金百鎰」「再見拜爲上卿」「三見本受相印」「封萬戸侯」とあり、耦耕、『論語』にあり、東窗、西窗は寝室の異名なれば、臥西窗の文字は多くあり、東窗は右丞の此の詩に於て始めて之を見る、

【大意】一見や再見にて、萬戸侯に封を受けし人もあり、又立談の間に白璧一雙を賜はりし人もあり、而も詎ぞ勝らんや、愉愉快快として南畝に耦耕し、時あり東窗に高臥して自然を楽しむ人に、

採菱渡頭風急。　菱を採りて渡頭風急なり、
策杖郵西日斜。　杖を策いて郵西日斜なり、
杏樹壇邊漁父。　杏樹壇邊の漁父、
桃花源裏人家。　桃花源裏の人家、

【注解】杏壇、『荘子』に、孔子、緇帷の林に游び、杏壇の上に休ふ、弟子、書を讀み、孔子絃歌して琴を鼓す、曲未だ半ならず、漁父なる者あり、船より下りて來り、鬚眉交白、左手、膝に據り、右手、頤を持し以て聽く、

【大意】菱花を採取するときは、渡頭風急なり、策杖を卓立するときは、郵西日斜なり、乃ち思ふ杏樹壇邊の漁父の聞と、桃花源裏の人家の靜なるを、

萋萋芳草春綠。　萋萋たる芳草春綠に、
落落長松夏寒。　落落たる長松夏寒し、
牛羊自歸郵巷。　牛羊自ら郵巷に歸り、
童稚不識衣冠。　童稚衣冠を識らず、

【注解】芳草春綠、顧本には春草秋綠とあり、非なり、長松、孫綽が「天台山賦」に「蓊蓊萋萋之鬱草」、蔭落落之長松」とあり、萋萋は草の美なる貌、落落は松の高き貌、

【大意】萋萋として生ずる芳草は、春正に綠色を呈し、落落として高き長松は、夏日も涼聲が尚ほ寒し、牛羊は童稚に引かれて、自ら郵巷に歸る、童稚は己が疎服以外、人間に衣冠と云ふものの有ることを識らず、

山下孤煙遠郵。　山下は孤煙遠郵、
天邊獨樹高原。　天邊は獨樹高原、

一瓢顏回陋巷。　一瓢顏回の陋巷、
五柳先生對門。　五柳先生は門に對す、

【大意】山下は方に孤煙起るを見る、是は遠郵の炊煙なり、天邊の方に獨樹を認む、是は高原である、主人は如何、一瓢の貧、顏回の如く陋巷に道を樂しむ、又、五柳先生の如く、悠然として門に對立することもあり、

桃紅復含宿雨。　桃紅にして復宿雨を含み、
柳綠更帶春煙。　柳綠にして更に春煙を帶ぶ、
花落家僮未掃。　花落ちて家僮未だ掃はず、
鶯啼山客猶眠。　鶯啼いて山客猶ほ眠る、

【大意】桃花は紅にして復宿雨を含み、柳條は綠にして更に春煙を帶ぶ、花は地に落つるも、家僮未だ掃はず、鶯は庭に啼けども、山客は猶ほ眠りて起きず、

酌酒會臨泉水。　酒を酌んで會ま泉水に臨み、
抱琴好倚長松。　琴を抱いて好し長松に倚るに、
南園露葵朝折。　南園の露葵朝に折り、
東舍黃粱夜舂。　東舍の黃粱夜舂く、

【大意】酒を酌んで會ま泉水に臨んで坐し、琴を抱いて好し長松に倚つて彈ずるに、而して南園の露葵は朝に折りて食ひ、東舍の黃粱は夜舂くを聞く、

【餘論】以上六言七首、田園樂を主とするを以て、野人として其の樂みの存する所を言ふ、詩として佳惡を定むる能はず、然れども、余は萎萎より以下の四首を以て最も其の情景一致して、不盡の致あるを覺ゆ、自ら信ず、其の好む所に阿るにあらざることを、

【注解】露葵、前に辨ぜり、黃粱、粱に、黃白青の三種あり、味の美は黃を第一とし、白と青、之に次ぐなり、

少年行　四首

新豐美酒斗十千。　新豐の美酒斗十千、
咸陽游俠多少年。　咸陽の游俠多くは少年、
相逢意氣爲君飲。　相逢うて意氣君が爲めに飲む、

【注解】新豐、撰人不明なる『西京雜記』に、漢の高祖、長安に徙り、深宮に居り、悽愴として樂しまず、平生好む所、少年、酒を沽ひ、餅を

繫馬高樓垂柳邊。　馬を繫ぐ高樓垂柳の邊、

【題義】無賴の少年、皇族の親類關係とか、或は富豪の子弟とか、他の威光に頼りて、以て我が儘に行ひを爲す事を詠出して、以て此等の徒を罵倒するのが主なり、然りと雖も詩の當面、露骨なるべからず、故に婉曲に之を歌ふ、詩を知らざる者は、之を稱揚して作ると思へり、游俠なぞを稱揚するは、詩人にあらず、正士にあらず、唯博徒の類のみ、裏面より觀察して、不良少年と見るべし、

【大意】新豐は美酒を釀造して、固より斗十千も飲むを得べし、咸陽城中を往來して游俠と稱する者、多くは是少年なり、途上にても相逢はば、壯んなる意氣を示して君が爲めの故に飲むと稱す、馬は酒を飲まざる故に、之を高樓卽ち料亭垂柳の邊に繫ぎ、以て己等は樓上にて會飲する、

【餘論】四首中、『三昧集』は、此の詩と一身能擘の詩とを採る、

出身仕漢羽林郎。　出身漢に仕ふ羽林郎、

初隨驃騎戰漁陽。　初め驃騎に隨つて漁陽に戰ふ、

【注解】羽林郎、漢の官名、宿衛侍從を掌る、漁陽と隴西と、安定と北地と、上郡と西河との六郡の良家の子弟なり、中郎將騎都尉、之が置たり、從軍戰死者の子弟を之に採用せし事もあり、羽林は元來星名、秦の漁陽郡、今の京兆東部、故城は京兆密雲縣南に在り、俠骨香、「長安游俠曲」に、生從命子游、死聞俠骨香とあり、

【大意】出身して漢に仕へ羽林郎と爲る、初めて驃騎將軍の部下と爲りて漁陽に戰ふ、孰か知らんや、漁陽と稱する邊庭にて死せざることを、漁陽以外の地に於て死して以て俠骨の香を傳へんと、

【餘論】四首中、『古今詩刪』より選したる『唐詩選』には、此の首一首を採る、余も亦、此の詩を以て四首中第一と思へるなり、蓋し四首中、平側法の正整せるは次の一身能擘の一首のみ、餘は近體の正法を以て作らず、右丞にしては可なり、後人、之を例と爲すべからず、松谷曰く、邊庭に死するは、反つて俠少の死して名を得るに如かず、太白の縱死俠骨香、不斬世上英と同じく張華游俠曲中の語を用ひて、而して命意同じからず、

孰知不向邊庭苦。　孰か知らん邊庭に向つて苦まざるを、

縱死猶聞俠骨香。　縱ひ死すとも猶俠骨の香しきを聞かん、

一身能擘兩彫弧。　一身能く擘く兩彫弧、

虜騎千重只似無。　虜騎千重只無きに似たり、

【注解】擘、顏師古曰く、今の哥、手を以て裂るもの擘と曰ひ、足を以て蹋むもの蹶裂と曰ふ、彫弧、『玉

偏坐金鞍調白羽。　偏に金鞍に坐して白羽を調す、
紛紛射殺五單于。　紛紛射殺す五單于、

【注解】雲臺、江淹が「上建平王書」に、結二綬金馬之庭一、高二議雲臺之上一とあり、鵰軒、『後漢書』に、天子臨レ軒、百僚畢會とあり、

『漢書宣帝紀』に、匈奴虛閭權渠單于病死す、右賢王屠耆堂代つて立つ、骨肉大臣、虛閭權渠單于の子を立て、呼韓邪單于と爲し、屠耆堂を誅殺す、諸王鈆に自立す、分つて五單于と爲し、更に相攻擊し、死者萬を以て數ふとあり、

【大意】一身にして能く兩彫弧を擘く、力强ければなり、虜騎千重も、一重も無きが如し、膽强ければなり、偏に金鞍の上に坐して、能く白羽箭を調し、紛紛として射殺されるものは五單于である、

漢家君臣歡宴終。　漢家の君臣歡宴終り、
高議雲臺論戰功。　高議して雲臺に戰功を論ず、
天子臨レ軒賜二侯印一。　天子軒に臨みて侯印を賜ふ、
將軍佩出明光宮。　將軍佩びて出づ明光宮。

【大意】漢家の君臣が、戰勝の祝宴が終り、其の將士の戰功を雲臺の上に評議を爲す、天子親しく軒に臨んで、男爵、子爵の印を授け玉ふ、之を拜受して、明光宮を退出する將軍は、盡な曾間に印綬を佩帶して居る、

【餘論】世に論を好む者あり、『古詩平仄論』なぞを著はすものあり、而も未だ嘗て『絶句平側論』を著はしたるものあるを聞かず、此等の詩は正しく『絶句平側論』を著はして論ずべし、然らずんば、新豐美酒斗十千、平平仄仄仄仄平、咸陽遊俠多少年、仄平平仄平仄平、起句の出身仄平、承句の初隨平平、漢家君臣仄平平平、明光宮平平平の如きは、後世の諸生、何等の法に依つて作るや判ずる能はず、

寄二河上叚十六一　河上の叚十六に寄す

與レ君相見卽相親。　君と相見て卽ち相親しむ、
聞道君家在二孟津一。　聞道らく君が家は孟津に在りと、
爲見行舟二試借問一。　爲に行舟を見て試みに借問す、
客中時有二洛陽人一。　客中時に洛陽の人有るかと、

【餘論】此の首は盧象集中にも在り、眞の作者孰れに在るか不明なり、見の複字あるは病とす、

贈裴旻將軍一　裴旻將軍に贈る

腰間寶劍七星文。　腰間の寶劍七星の文、
臂上琱弓百戰功。　臂上の琱弓百戰の功、
見說雲中擒黠虜。　見說らく雲中黠虜を擒にすと、
始知天上有將軍。　始めて知る天上に將軍あるを、

【注解】 燮吳、『唐書燮吳傳』を案ずるに、吳嘗て幽州都督孫佳と、北伐す、燮の圍む所と爲る、吳、刀を舞はして馬上に立つ、矢四集す、皆刀に迎へて斷つ、燮大に驚きて引き去る、後、龍耶軍使を以て、北平を守る、北平、虎多し、吳、善射、一日に虎を得る三十一、山下に休ふ老父あり曰く、此れ鬼なり、精北にして眞虎あり、將軍をして之に遇はしめば且に敗れんとす、吳、信ぜず、怒りて馬上、之に趨く、虎有り叢薄中より出づ、小にして猛、地に據り大に吼ゆ、吳の馬辟易、弓矢皆墜つ、是より復射ず、雲中、郡の名、戰國の時、趙の地、秦は郡を置き、陰山以南を統ぶ、今日の山西省大同縣即ち是なり、

【大意】 將軍が腰間に佩ぶる寶劍は、七星を彫刻せる貴價なるものなり、又臂上に攜ふる所の琱弓は、百戰の功を語るに足るものなり、聞く所によれば、嘗て雲中郡に在りて、狡黠なる虜將を擒にすと、是の事を聞いて我は始めて知る、朝廷の上に、將軍の如き人あるを、

【餘論】 此の詩は、臂上と天上とが聊か疵を爲す、若し是無くば、顧可久謂ふ所の俊偉の評當る、

九月九日憶山東兄弟

九月九日、山東の兄弟を憶ふ

獨在異鄉爲異客。　獨り異鄉に在りて異客と爲る、
每逢佳節倍思親。　佳節に逢ふ毎に倍す親を思ふ、
遙知兄弟登高處。　遙かに知る兄弟高きに登る處、
徧插茱萸少一人。　徧く茱萸を插んで一人を少くを、

【大意】 余は獨り異鄉に游學して、異鄉の客と爲る、佳節に逢著する毎に、骨肉近親を思ふの情が起る、今日は九日の佳節、遙かに知る兄弟は皆登高して、頭上に茱萸を插んで、余一人を少くことを思ふならん、

【餘論】 此の詩は、『古今詩刪』の『唐詩選』行はれしより、家家誦し、戶戶讀むを以て兒童も知らざるものなし、作法として何等の巧力も要せず、唯自然より出でて、詩の妙諦と爲るもの、杜子美の醉把茱萸仔細看、右丞の徧插茱萸少一人、朱放の學他年少插茱萸、此の三句を劉禹錫は杜を以て最優と爲す、余云ふ此等の優劣は、其の興情より論ずべきものなり、老杜の句の善きは論勿きも、而も杜は老人なれば、今日より先、何年生存するやとの考へより、仔細看の意味がある、右丞は年十七、他鄉に在りて、故鄉の近親を思ふ一念あるのみ、生存の意味より、今日の寂寥を感ずるの言、彼は五十の老人、此は十七の年少、此等の事を知らずして、杜は優にて、右丞は劣と判ずる、禹錫が考

への淺薄なること、笑ふ外之無し、況んや獨字、遙字、少字、仔細に之を見れば、良工の苦心察すべきものあり、明の劉會孟曰く、語無二深苦一、情厚藹然、大に當る、大に當る、

戯題輞川別業

戯れに輞川の別業に題す

柳條拂地不須折。　柳條地を拂うて折るを須ひず、
松樹披雲從叟長。　松樹雲を披て叟に長きに從す、
藤花欲暗藏猱子。　藤花暗からんと欲して猱子を藏し、
柏葉初齊養麝香。　柏葉初めて齊しうして麝香を養ふ、

【注解】披雲、梢雲に作る本もあり、披雲を佳と思ふ、猱子、猿の一種、善く木に升る、俗に「ムクゲザル」なり、麝香、『埤雅』に、陶氏云ふ麝は形獐に似にり、今之を香獐と ふ、常に柏葉を食ふ、『養生論』に麝食柏而香也とあり、

【大意】柳條は折らるるが普通なるも、輞川の柳條は地を拂へども、折るを須ひず、又松樹は雲を披て、天上に聳ゆるも、其の聳ゆるの長きに從して斬らず、又藤花は樹も葉も暗きまで、鬱蒼たるが故に、猱子は此の中に藏れ、柏葉も誰も採らざるが故に、葉が一齊に長ず、之は麝香を養ふに非常に便利なり、

【餘論】戯題としてあるも、何なる處が戯であるか、分明せず、古人は此の位の意味を歌ふ、之を戯と思ふならんも、今人は決して之を戯と思はざるなり、

戯題盤石

戯れに盤石に題す

可憐盤石臨泉水。　可憐の盤石泉水に臨み、
復有垂楊拂酒杯。　復垂楊の酒杯を拂ふ有り、
若道春風不解意。　若し春風意を解せずと道はば、
何因吹送落花來。　何に因つて落花を吹送し來る、

【大意】可憐なる盤石が一枚、泉水に臨んで在る、其の側に復枝垂の楊が酒杯を拂うて在る、若し春風は、人間の意を解するものにあらずと道ふ者あらば、其れは誤解である、春風も意を解するが故に、落花を人面に向つて吹送し來るものなり、

與盧員外象過崔處士興宗林亭

盧員外象と、崔處士興宗が林亭に過ぐ

綠樹重陰蓋四鄰。　綠樹重陰四鄰を蓋ふ、
青苔日厚自無塵。　青苔日に厚うして自から塵無し、
科頭箕踞長松下。　科頭にして箕踞す長松の下、
白眼看他世上人。　白眼看他世上の人、

【注解】盧象は員外の官人、崔興宗は布衣の處士なり、共に右丞とは親しく往來する人、科頭、冠を著けず、單に結髮する、頭髮を「グルグル」と自分で結ぶものなり、絲を以て纏成するなぞと注するは愚陋なり、箕踞、其の兩足を伸べて、行儀惡るく坐す、其の狀は箕の如し、白眼、前に綽ぜり、

【大意】林亭の四面は、綠樹が其の陰を重ねて、四鄰が蓋ひかぶさる、而して中庭は青苔が日日重厚を添へて、一點の塵も無し、主人の樣子は如何、頭髮は「グルグル」卷き、兩脚は伸べ出し、而して長松の下に坐す、白眼にして世上の凡人や俗人を看る、

【餘論】此の詩も、人口に膾炙するもの、今呶呶するの要なし、但し結句、俗本に白眼看ニ他世上人一と訓せるもの多し、此の他は自字に對する他にあらず、看の語助としての他なり、「他ノ世上ノ人」なぞ有るべき筈無し、文章にて之を言へば、久之の之と同じく、讀む必要無き字なり、若し讀むを欲せば、「カンタ」と訓むべし、以て此の詩の眞を見る、本集に盧と崔と綿と裴迪との詩を載す、左の如し、

同　詠　　盧象

映ㇾ竹時聞轉ニ轆轤一。當ㇾ牕只見網ニ蜘蛛一。主人非ㇾ病常高臥。琅珮蒙龍一老儒。

同　詠　　王縉

身名不ㇾ問十年餘。老大誰能更讀書。林中獨酌鄰家酒。門外時聞長者車。

同　詠　　裴迪

霑柯門裏自成ㇾ陰。散髮牕中曾不ㇾ響。逍遙且喜從ニ吾事一。榮寵從來非ニ我心一。

酬ニ王摩詰過ニ林亭一　　崔興宗

窮巷空林常閉ㇾ關。悠悠獨臥對ニ前山一。今朝忽枉稽生駕。倒ㇾ屣開ㇾ門遙解ㇾ顏。

送ニ王尊師歸ニ蜀中一　　王尊師が蜀中に歸るを送る

大羅天上神仙客。　大羅天上神仙の客、
濯錦江頭花柳春。　濯錦江頭花柳の春、
不ㇾ爲ニ碧雞一稱使者。　碧雞の爲め使者と稱せず、
唯令ニ白鶴報ニ鄉人一。　唯白鶴をして鄉人に報ぜしむ、

【注解】大羅天、『雲笈七籤』及び『西陽雜俎』に、大羅天は元都玉京の上に在り、紫微金闕、七寶臺樹、麒麟、獅子、其の中に化生し、三世天尊、治して其の內に在り、或は云ふ三界外を四人境と曰ふ、四人天外を三清と曰ひ、三清の上を大羅天と曰ふと、佛教と道教と餘りに同樣の事を言ふ、其の起原の前後を研究して、本と支とを定むべき

なり、濯錦江、蜀江の水を謂ふ、錦を濯うて益す美なるを以てなり、碧鷄、『漢書郊祀志』に、益州に金馬、碧鷄の神あり、雕祭して致す可し、是に於て、宣帝、諫大夫王褒を遣り、節を持して之を求めしむ、如淳曰く、金形は馬に似、碧形は鷄に似たり、『水經注』に、蜻蛉縣に偶岡山あり、其の山神に、金馬、碧鷄あり、光景篇起、民多く之を見るとあり、白鶴、『搜神後記』に、丁令威は本遼東の人、道を靈虛山に學び、後、鶴と化して遼に歸り、城門の華表柱に集まる、時に少年あり、弓を擧げて之を射んと欲す、鶴乃ち飛んで、空中を徘徊して言つて曰く、鳥あり鳥あり丁令威、家を去つて千年今來歸す、城郭故の如く人民は非なり、何ぞ仙を學ばずして冢纍纍たる、遂に高く上りて天に神す、

【大意】王尊師は本大羅天上にて神仙の客である、假りに人界に下生して、只今自分が下生したる地の濯錦江頭に歸らんとす、而して其の江頭は花や柳が春を飾りて美麗なる時節なり、其の歸るも碧鷄なる神の使者と爲つて行くにはあらず、己れは仙道を成就したる古の丁令威の如きものであることを、鄉人に報知せんが爲めであるなり、

【餘論】道士の敬稱語を大底は鍊師と稱して、尊師と稱せず、佛子と別種に取扱ふを以てなり、然るに今尊師を以てす、佛子にも尊師を稱す、混合の虞あり、是の故に此の詩を以て、後人は例と爲す可からず、

送元二使安西　元二が安西に使するを送る

渭城朝雨裛輕塵。　渭城の朝雨輕塵を裛し、
客舍青青柳色新。　客舍青青として柳色新なり、
勸君更盡一杯酒。　君に勸む更に一杯の酒を盡くせ、
西出陽關無故人。　西のかた陽關を出づれば故人無からん、

【注解】安西、今日は縣と爲る、甘肅の敦煌郡に屬す、渭城、漢に縣の名と爲す、唐代は陝西長安縣の東、秦代の咸陽は卽ち此の地なり、裛ほ浥に作る本あり、意義同じ、班固が「西都賦」に裛以渥繡」とあり、「カサバシ」又は「サルホス」と和訓す、陽關は山東にも在るが、今、此の關は甘肅敦煌縣の西南、一百三十里の地とす、玉門關の南なるを以て陽關と稱す、此を出塞必經の地と爲す、

【大意】元二が出發せんと欲するとき、渭城は朝來の雨にて輕塵を裛し氣分が淸し、其の途中の客舍は青青として柳色が正に新たり、余は君に勸む更に一杯の酒を餘分に飲み玉へ、陽關までの途中は故人も有らんが、陽關を出で去らば、必ず故人無からん、

【餘論】此の詩は、兒童走卒も知る所の名篇とす、陽關三疊の名を以て唐より今に至る、一千年餘も、人人の口にするものなり、然るに其の三疊に就いては一定せざるものの如し、『詩人玉屑』に曰く、此詩爲二折腰體一、謂二中失レ粘而意不レ斷也、唐人歌入二樂府一、以爲二送別之曲一、至二陽關句一、反覆歌レ之、謂二之陽關三疊一、亦謂二之渭城曲一、此の至の字、「至ルマデ」と和訓するや、「至リテ」と和訓するや、漢文には「テニヲハ」が無きを以て其の解に苦しむが、若し「至ルマデ」反覆して歌ふは、一唱三歎にあ

らずして、一詩三讀することとなる、若し「至リテ」反覆して歌ふなれば、結句を三度讀むこととなる、『東坡志林』に曰く、舊傳陽關三疊、然今世歌者、每句再疊而已、通二一首一言之、又是四疊、皆非レ是、或每句三唱、已應二三疊之說一、則叢然無二節奏一、樂天對レ酒云、相逢且莫レ推二辭醉一、聽レ唱二陽關第四聲一、注、第四聲勸レ君更盡二一杯酒一、以レ此驗レ之、若一句再疊、則此句爲二第五聲一、今爲二第四聲一、則一句不レ疊審矣、又『仇池筆記』に曰く、古本陽關每句皆再唱而第一句不レ疊、乃知唐本三疊、故樂天對レ酒云云、第一句を疊せずとすれば、結局左の如し、

渭城○○○○○。客舍青青柳色新。客舍青青柳色新。
勸君○○○○○。西出○○○○○。（一疊）
渭城○○○○○。客舍○○○○○。勸君更盡一杯酒。
勸君更盡一杯酒。西出○○○○○。（二疊）
渭城○○○○○。客舍○○○○○。勸君○○○○○。
西出陽關無故人。西出陽關無故人。（三疊）

尙後人は『陽關三疊圖譜』を製して、種種の讀法を示す、游戲に近ければ今は略して載せず、記し畢りて近時黃培芳の說を讀む、曰陽關三疊、古今艷稱、音節最高者、按三疊、謂三度レ曲者、疊二第三句一也、相傳倚笛亦爲レ之製、培芳の考へにては輪句のみを三度歌ふものなり、右丞を九泉の下より喚起して質すにあらずんば、是非を定め難し、姑らく舊說に準ずるのみ、

送別

別を送る

送レ君南浦淚如レ絲。君を送りて南浦淚絲の如し、
君向二東州一使二我悲一。君は東州に向ひ我をして悲しましむ、
爲報故人顦顇盡。爲に報ず故人顦顇し盡き、
如今不レ似洛陽時。如今似ず洛陽の時に、

【注解】送別、『萬首唐人絕句』に齊州送二祖三一に作る、南浦、江文通の「別賦」に、送二君南浦一傷如二之何一とあり、淚如絲、梁武帝の詩に、臉下淚如レ絲とあり、東州、『後漢書』に、兼レ有二西屯之役一、宜レ先二東州之急一、章懷太子曰く、東州謂二冀兗州一と、

【大意】君を送りて南浦に至り、別を告ぐるに及んで淚は絲の如く多し、君は東州に向ひ、留まる所の我を悲傷せしむ、君の爲めに報示するが、我等の故人は多くは顦顇し盡きて、今日は昔日洛陽にて、相往來して樂みし時とは似ざるなり、

送韋評事

韋評事を送る

欲レ逐二將軍一取二右賢一。將軍を逐うて右賢を取らんと欲す、

【注解】評事、『唐書百官志』に、大理寺、有二評事八人一、從八品下とあ

沙場走馬向居延。　沙場馬を走らして居延に向ふ、
遙知漢使蕭關外。　遙かに知る漢使蕭關の外、
愁見孤城落日邊。　愁へ見る孤城落日の邊、

て、その姿と壯騎數百と、圍を衝いて北去す、漢兵遙ぶこと數里、右賢の裨王十餘人を得たり、

【大意】評事の此の行や、將軍に追逐して、右賢王を取らんと欲するにあり、沙場に馬を走らして、居延國に向ふ、遙かに知る漢の使者は、蕭關の外に在りて、勝敗如何と愁の目を以て孤城落日の邊を見るならん、

【餘論】此の詩は、『三昧集』も『唐詩選』も共に採る、右丞としては名篇とは稱し難きも、亦唐絶の佳なるものなり、

靈雲池送從弟　靈雲池に從弟を送る

金杯緩酌清歌轉。　金杯緩酌して清歌轉ず、
畫舸輕移艷舞廻。　畫舸輕移して艷舞し廻る、
自歎鶺鴒臨水別。　自ら歎ず鶺鴒水に臨んで別れ、

り、右賢、元朔五年、漢、車騎將軍衛青をして三萬騎に將とし、匈奴右賢王を討たしむ、右賢、飲醉して、漢兵の圍むを知らず、既にして驚い

【注解】靈雲池、涼州に在り、鶺鴒は水鳥にて、高足長尾、羽毛は青灰色にして、腹下は正に白し、此の鳥は一隻にして飛ぶ時れ、飛ぶには

不同鴻雁向池來。　同じからず鴻雁池に向つて來るに、

【大意】金杯にて緩緩と對酌し、離別の清歌を轉じ、綺麗なる舸は池上を南北に輕移し、人は艷舞して廻る、我は自ら歎息する鶺鴒の水に臨んで別れることを、是は全く鴻雁が兄弟の如く一池に向つて來ると反對なるを、

必ず、二隻、是を以て兄弟相友の道に喩ふ、

送沈子福歸江東　沈子福が江東に歸るを送る

楊柳渡頭行客稀。　楊柳渡頭行客稀なり、
罟師盪槳向臨圻。　罟師槳を盪かして臨圻に向ふ、
唯有相思似春色。　唯相思の春色に似たるあり、
江南江北送君歸。　江南江北君を送りて歸る、

【注解】江東、長江以東の地を謂ふ、清の趙翼の『日餘雜記』に曰く、江有南北、而無東西、金陵豫章、俱在江南、對豫章言、則金陵居江南之東、對金陵言、則豫章居江南之西、故宋以金陵、太平、寧國、廣德、爲江南東路、以今江西全省、爲江南西路、然りと雖も江東の名は、漢初に出づ、『史記』に、籍與江東子弟八千人、渡江西とあり、例せば、長崎より、人が東京に歸るを、送人歸關東、と爲すが如し、臨圻、晉の謝靈運の詩に、臨圻限參錯とあり、李善曰く、圻與碕同、曲岸頭也、乃ち知る地名にあらざるを、臨沂の縣名と混ずる勿れ、

【大意】楊柳が垂垂たる渡頭、行客は太だ稀なり、舟師は槳を盪かして、前面の曲岸頭に向つて去る、

去る所の人は、君が獨歸するなり、君を送るの我の相思は、春色の正に濃かなるに同じ、江南より江北の路を君を送りて歸る、

【餘論】余が所藏の明板の『唐詩選』には、送沈子福之江南に作る、『別裁』には送之江東に作る、而して多くの本は歸江東とあり、乃ち多きに從ふ、明の黃家鼎曰く、相送之情、隨春色所之、何其濃至と、

寒食汜上作

廣武城邊逢暮春。
汝陽歸客淚沾巾。
落花寂寂啼山鳥。
楊柳青青渡水人。

寒食汜上の作

廣武城邊暮春に逢ひ、
汝陽の歸客淚巾を沾す、
落花寂寂山に啼くの鳥、
楊柳青青水を渡るの人、

【注解】寒食、前に辨ぜり、汜上、『元和郡縣志』に、河南府に汜水縣あり、西南、府に至る一百八十里、汜水は縣の東南三十二里滎餗山に出づ、廣武城、『杜氏通典』に、河南府汜水縣、古の東虢國、鄭の滎澤に滅ぼさる、鄭、制邑と爲す、故の虎牢城あり、漢に成皐縣と謂ひ、後漢に成皐關を置く、其の側、之を廣武城と謂ふ、汝陽、『漢書地理志』に、魯國に汝陽縣有り、汝陽城は兗州龔邱縣の東北五十四里に在り、其の城側、土田沃衍、故に魯は汝陽之田と號す、

【大意】漫游して今將に歸らんとして、汜上に來る、汜上の廣武城邊は已に暮春三月の末に逼る、汝陽よりの歸客は、覺えず節序の移るに感じ、雙淚巾を沾す、落花は寂寂として落ち、鳥亦之を悲しむ如く山に啼く、楊柳は青青として映じ、水を渡るの人を送るに似たり、

【餘論】唐賢が七絕に於ける客旅詩、名篇少からず、此の篇の如きも、餘情極まり無し、東坡曰く、摩詰詩中有レ畫と、此の篇の如き、右丞自ら畫くべきなり、有聲畫、無聲詩、以て一致融合を見るなり、

劇嘲史寶

清風細雨濕梅花。
驟馬先過碧玉家。
正値楚王宮裏至。
門前初下七香車。

史寶を劇嘲す

清風細雨梅花を濕し、
驟馬先づ過ぐ碧玉が家、
正に楚王宮裏に至るに値ふ、
門前初めて下る七香車、

【餘論】此の詩は何事を詠せしものか、分明ならず、「古樂府」に碧玉歌なる詩曲あり、宋の汝南王の妾の名を碧玉と曰ふ、王、之を寵愛して、他の宮女を顧みざりしなり、顧可久は評して曰く、暗用二行雲行雨事一、俊麗意圖と、

菩提寺禁。裴迪來相看。說逆賊等凝碧池上作音樂。供奉人等。舉聲便一時淚下。私成口號。誦示裴迪

菩提寺に禁せられ、裴迪來り相看る、逆賊等、凝碧池上に音樂を作し、供奉の人等、聲を擧げ、便ち一時に淚下ると說く、私に口號を成し、誦して裴迪に示す

萬戸傷心生野煙。　萬戸心を傷ましめ野煙生ず、
百官何日再朝天。　百官何れの日か再び天に朝せん、
秋槐葉落空宮裏。　秋槐葉は落つ空宮の裏、
凝碧池頭奏管絃。　凝碧池頭に管絃を奏す、

【注解】菩提寺、『長安志』を案ずるに、平康坊の南門の東に菩提寺あり、隋の開皇二年、鷹西公、李敬道、及び僧惠英が創立する所、『賈氏談錄』に賈君雪て自から說く、太原軍前に命を銜んで至る、永興軍、馬草を發するを催ほし、菩提寺に會す、僧智滿なる者あり、言ふ祖師宏道、天寶の末、寺主と爲る、祿山闕を犯すに值ふ、王右丞、賊の執ふる所と爲り、經藏院に囚ほる、左丞裴迪と、密かに相往來す、裴說く、賊、零漢の兵馬を會し、太極西内に宴すと、右丞、之を聞いて泣下り、遂に詩を爲り、經卷扉紙の後に書す、祖師、之を收得し、相傳へて智滿に至る、賈君既に拔問するを後、遂に錄するを得、其詩は萬戸傷心云云、又裴迪に示す、安んぞ塵網を拾つるを得ん云云、凝碧池、『明皇雜錄』に、天寶の末、羣賊、兩京を陷れ、大に文武の朝臣、及び黃門宮人を掠め、樂工騎士、每に數百人を獲、兵仗を以て嚴衛し、洛陽に送る、山谷に逃るる者あり、而かも率に能く縛捕し、送骨し、授くるに冠帶を以てす、祿山、尤も寵る樂工に敕し、求訪顧る切、旬日にして梨園の弟子數百人を獲たり、羣賊因つて相與に大に燕樂池に會して宴す、僞官數十人、大に御庫珍寶を陳し、前後に羅列す、樂既に作るや、梨園の舊人、覺えず歔欷し、相對して泣下る、羣逆皆刃を露はし、滿を持し、以て之を脅す、而かも悲已む能はず、樂工の雷海青なる者あり、樂器を地に投じ、西向慟哭す、逆黨乃ち海青を戟馬殿に縛し、支解し、以て衆に示す、（支解とはズタズタに切るなり）之を聞く者、傷痛せざるは莫し、王維時に賊の爲に、菩提寺に拘せられ、之を聞いて詩を賦し云云、凝碧池は西内苑、重元門の北、飛龍院の南に在る、

【大意】萬戸千門、傷心して野煙を生ずるの寂寞の狀態なり、唐室の百官は、何れの日にか再び眞の天子に朝謁するを得べきや、秋槐今正に葉落ちて、天子在さざる宮は信に空宮なり、其の空宮裏の凝碧池頭に管絃を奏するとは、

【餘論】祿山は固より右丞の才を惜しむ、故に之に僞官を授けて以て我が用に供せんと欲したり、速かに殺さずして、佛寺に拘禁し、時を俟つて之を說服せんと欲したるなり、既にして祿山は安慶緒の爲めに殺され、肅宗、位に卽き、右丞も罪せらるべきを、是の詩有るを奏せし者あり、乃ち赦さる、是より四年を過ぎて、右丞遂に卒す、此の間の事を深く痛嘆して、其の死を早くせしこと疑ふ所無し、世の右丞を論ずる者、至德元年、祿山僭號の時、右丞死せざるを以て批議す、尋常一樣の愚論、我が邦の廐戸皇子を一二事を以て論ずると同じく、腐儒迂儒の見と異ならず、右丞の人と爲り、深沈事を處する人なり、荆軻や、夷門監者の如く、熱情の迸るままに直ちに屠腹する人にあらず、而も直ちに屠腹し、直ちに自刎するを以て士の本分と心得たる者は、要するに腐儒迂儒の謗りを免れざるものなり、此の事無くんば、後十年餘は生を保つの人なり、然るを四年弱にして死せるは、其の原因

察すべきものあり、當時、議する者あらずして、後人、之を議する者、逾よ多く、逾よ眞を失するものなり、

涼州賽神　涼州にて神に賽す

涼州城外少行人。　涼州城外行人少なり、
百尺峯頭望虜塵。　百尺峯頭虜塵を望む、
健兒擊鼓吹羌笛。　健兒鼓を擊ち羌笛を吹き、
共賽城東越騎神。　共に城東越騎の神に賽す、

【注解】涼州：漢代置く所、今の甘肅省武威縣の地とす、地、西方に屬して寒涼なれば、此の名あり、右丞が涼州節度判官と爲りて、此地に在りし時の作なり、健兒、『唐六典』に、天下諸軍、皆有健兒とあり、松谷曰く、軍士を稱して健兒と爲す、蓋し三國の時に本づく、乃ち『吳志』に、權以表能得健兒之心と、是なり、羌笛、松谷曰く、文笛は七孔、羌笛は三孔、後人、一孔を加へて、四孔と爲す、賽は報祭、戰勝の禮謝を神に報告するなり、越騎神は未詳、要するに戰鬪の神ならん、

【大意】涼州城外は寂寂として、行人甚だ少なり、軍士は百尺峯頭に上りて、以て虜騎の兵塵を望む、或は鼓を擊つ健兒あり、或は羌笛を吹く健兒もあり、此の健兒等は皆等しく手を攜へて城東の越騎神に賽報する、

哭殷遙　殷遙を哭す

送君返葬石樓山。　君を送りて返葬す石樓山、
松柏蒼蒼賓馭還。　松柏蒼蒼として賓馭還る、
埋骨白雲長已矣。　骨を埋めて白雲長へに已みぬ、
空餘流水向人間。　空しく流水を餘して人間に向ふ、

【注解】殷遙、句容の人、天寶間に忠王府の曹參軍と爲る、『全唐詩』に詩五首を存するのみ、石樓山、『元和郡縣志』に、京兆府渭南縣西南有石樓山とあり、又『太平寰宇記』にも石樓山あり、『唐書地理志』及び『一統志』に、皆、石樓山あり、今の句、何れの國の石樓山なるや明白ならず、

【大意】君を石樓山に葬るを會送す、石樓山は松柏蒼蒼として、君は天上に賓馭して還る、君が骨を埋めし處、白雲長へなるも、萬事已む、但空しく山を出づる流水が滾滾として人間に向ふのみ、

【餘論】哭殷遙の詩は前に五古あり、今は七絶あり、以て右丞と厚かりし人なるを知るべし、此の詩、白雲の如く、又流水の如く、自然にして輕妙なり、

歎白髮　白髮を歎ず

宿昔朱顏成暮齒。　宿昔の朱顏暮齒を成す、
須臾白髮變垂髫。　須臾に白髮垂髫を變ず、

【注解】暮齒、『隋書』「王劭傳」に、受自志學、至于暮齒、篤好不倦、『史遺』落世事とあり、垂髫、『玉篇』

一生幾許傷心事。　一生幾許ぞ傷心の事、
不向空門何處銷。　空門に向はずんば何れの處にか銷せん、

【大意】宿昔は朱顏なりしも、今は早暮齡と爲る、垂髫なりと思ひしも、須臾にして白髮と變ずるを見る、一生の間、傷心の事は、幾許ありしやを知らず、空門の玄理を知らずんば、此の傷心は銷する期が無し、

【餘論】此の詩も、五古一首と此の七絶一首と有り、三四の句を讀んで右丞が志を見るべし、

に、髫小兒髮也とあり、『魏志』「毛玠傳」に、垂髫執心、累勤取官とあり、

王右丞集　卷十四　終

王右丞集　卷十五

外編　四十七首

東溪翫月

東溪に月を翫す

月從斷山口。遙吐柴門端。　月は斷山の口よりし、遙かに柴門の端に吐く、
萬木分空霽。流陰中夜攢。　萬木空霽を分ち、流陰中夜に攢まる、
光連虛象白。氣與風露寒。　光虛象に連りて白く、氣は風露と寒し、
谷靜秋泉響。巖深青靄殘。　谷靜かにして秋泉響き、巖深くして青靄殘す、
清澄入幽夢。破影抱空巒。　清澄幽夢に入り、破影空巒を抱く、
恍惚琴牕裏。松溪曉思難。　恍惚たり琴牕の裏、松溪曉思難し、

【大意】月は斷山の口頭より出でて、遙かに柴門の端に向つて光を吐き現はす、萬木が一齊に空霽を分つを見、流陰が中夜に於て攢まるを看る、月光が總べてのものに連るを以て、虛象は等しく白く、

夜氣の寒さは、風露の寒さと合す、谷は靜なれば、秋泉の響き强きを覺え、巖深きが故に、靑靄は飛散せずして殘る、淸澄の氣は幽夢に入り、月の破影は空巒を抱くが如くなるを見る、余は恍惚と琴牖の裏に在りて、松溪の曉色に對する詩思は良に難し、

【餘論】此の詩は、六韻を以て成る、月に對する情と、夜に對する景とを合唱して、淸氣極まり無きものなり、而して此の詩以下の各篇、作者に疑ひあるを以て、普通の『王維集』に載せず、『松谷本』と『文苑英華』に載す、『唐文粹』は王昌齡の詩と爲すものなり、

過太乙觀賈生房

昔余棲遁日。之子煙霞鄰。
共攜松葉酒。俱篸竹皮巾。
攀林逼雲洞。採藥無冬春。
謬以道門子。徵爲驂御臣。
常恐丹液就。先我紫陽賓。
夭促萬塗盡。哀傷百慮新。

太乙觀賈生が房を過ぐ

昔余棲遁の日、之子煙霞鄰る、
共に松葉酒を攜へ、俱に篸す竹皮巾、
林に攀ぢて雲洞に逼し、藥を採りて冬春無し、
謬つて道門子を以て、徵されて驂御の臣と爲る、
常に恐る丹液就り、我に先だつ紫陽の賓、
夭促萬塗盡き、哀傷百慮新なり、

蹟嶮不容俗。才多反累眞。
泣對雙泉水。還山無主人。

蹟嶮にして俗を容れず、才多くして反つて眞を累はす、
泣いて對す雙泉水、山に還る主人無し、

【注解】太乙觀、太乙仙人を祭る道觀なり、此の觀中に賈生が住房有るなり、松葉酒、事實を知らざれば、明注する能はざるも、松葉は藥に製し、以て精力を增進するものなるは、古代より行ふもの、隋の王績の詩に、「春釀煎松葉、秋盃釀菊花」の句あり、篸は竹の長き形容を以て一義と爲せども、今は譬「カンザシ」の意義とす、竹皮巾、『漢書』「高帝紀」に、帝、亭長と爲り、乃ち竹皮を以て冠と爲す、韋昭曰く、竹皮は竹筍なり、今、南夷、竹の幼時を取り、續ぎて以て帽を爲るなり、師古曰く、竹皮は筍皮なり、箨上無く所の籜を謂ふのみ、竹筍には あらず、師古の說を以て正しとす、丹液、丹砂を練りて或は丸藥とし、或は散藥、或は水藥と爲し、之を服して丹天するとなり、液は水藥なり、紫陽賓、『周氏冥通記』に、第一紫陽左眞人、治ニ葛衍山一、周君、第二紫陽右眞人、治ニ句容山一、王君とあり、

【大意】昔日に余が棲遁して、官吏と爲らざる日、之子卽ち賈生と煙霞を鄰にして住す、其の時は松葉酒なぞを攜へて往來し、我も彼も共に竹皮巾を被つて、或は林に攀ぢ、或は雲洞に游び、山中に藥草を採りて、冬日も春日も區別無し、然るに賈生は道門の子でありながら、謬つて朝廷に徵されて驂御の臣と爲る、而も常に恐る丹液就りて、我より先きに仙道を成就する人あるを、我は普通人間と同じく、夭促して萬塗盡き、五十六十にして死に赴かんか、之を思へば哀傷して百慮新たに生ず、蹟が嶮なれば俗に容れられず、才が多ければ反つて眞を累はすに至る、賈生を思うて泣いて雙泉水に對坐

するのみ、太乙觀に今還り來れども、主人は驂御の臣と爲つて、此の山中には無し、

【餘論】此の詩、八韻を以て成る、偶ま太乙觀を過ぎたるに賈生の房は存せり、而して賈生は才多き爲め人間に用ひられて、山中に無し、之を思うて、之を悲しむ、此の詩は普通の「王維集」に載せず、案ずるに右丞の排律、複字頗る多し、此の詩、無に複字あるのみ、是の故に、疑問とすれば疑問なれど、全體の調、右丞が宗と隔りあると思へず、余は右丞が眞作として此に採る所以なり、蹟峻二句十字は眞に名句なり、

送孟六歸襄陽　　孟六が襄陽に歸るを送る

杜門不欲出。久與世情疎。　門を杜ぢて出づるを欲せず、久しく世情と疎なり、
以此爲長策。勸君歸舊廬。　此を以て長策と爲し、君に勸めて舊廬に歸らしむ、
醉歌田舍酒。笑讀古人書。　醉うて歌ふ田舍の酒、笑うて讀む古人の書、
好是一生事。無勞獻子虛。　好し是一生の事、子虛を獻ずるを勞する無し、

【大意】我が門を杜ぢて出づるを欲せず、久しい間世情と疎遠なり、此の世情と疎遠なるが、一番の長策と爲す、然るに君は出て來たが、矢張り歸るに如かず、故に僕は君に歸るを勸めて、舊廬に向はしむ、舊廬に歸りし上は、醉うて歌うて以て田舍の酒を樂しみ、時に笑つて古人の書を讀み、以て一生を終るが宜し、司馬相如の如く子虛賦を獻じて以て採用せられんと勞するな、

【餘論】余が所藏の明板「王維集」にも、順可久本にも此の詩無し、「瀛奎律髓」には張子容の作と爲す、案ずるに浩然が北闕休二上書一、南山歸二敝廬一の詩は、右丞が私に官署に孟を引いて、玄宗に看破せられ、其の去るに臨んでの詩なるを知らば、孟を送るの意味は、右丞に於て始めて獨り知るものなり、然らば則ち此の詩は右丞が眞作にして、張子容にあらざるを信ず、虛谷は考を失すと謂ふべし、

淮陰夜宿　二首　　淮陰夜宿　二首

水國南無畔。扁舟北未期。　水國南畔無く、扁舟北未だ期せず、
鄉情淮上失。歸夢郢中疑。　鄉情淮上に失し、歸夢郢中かと疑ふ、
木落知寒近。山長見日遲。　木落ちて寒の近きを知り、山長うして日の遲きを見る、
客行心緒亂。不及洛陽時。　客行心緒亂れ、洛陽の時に及ばず、

【注解】淮陰、淺の韓信が封ぜられたる地、今は淮陰縣と稱す、江蘇省淮揚道に屬す、郢中、郢は古の楚の都、今日の湖北省、江陵縣一帶を謂ふ、「宋玉文」に客有二歌二於郢中一者とあり、

【大意】淮陰に夜宿して考ふ、水國は南方は茫茫として界畔無く、然りと雖も扁舟北方は極まれりと言ふべからず、故郷の情は淮上に於て失するも、歸夢は淮陰の鄰國なる郢中まで來りしやと疑ふ、而して陸上を見れば、木葉は已に落ちて、寒の近くなりたるを知り、山色は長くして日の遲きを見る、旅客は往往心緒が稚稚に亂れ、洛陽に在りて安住する時には及かず、

永絶臥煙塘。蕭條天一方。
秋風淮水落。寒夜楚歌長。
宿莽非中土。鱸魚豈我鄉。
孤舟行已倦。南越尚茫茫。

【注解】宿莽、『楚辭』に、夕攬中洲之宿莽とあり、王逸曰く、草冬生不死者、楚人名之曰宿莽と、南越、『杜氏通典』に嶺よりして南は、唐虞三代、蠻夷の國と爲す、是れ百越の地、亦之を南越と謂ふ、古は之を甌閩と謂ふ、禹貢九州の域にあらず、

【大意】永絶郷と離れ、來りて此の煙塘に臥す、蕭條たる氣分は天の一方なればなり、臥して聞く秋風颯颯として淮水に落つるを、寒夜に何處とも知らず、楚歌を唱ふる聲が長し、宿莽を見ても、中土にあらざるを知る、鱸魚を食ふも、是も我郷の鱸魚にはあらず、孤舟に孤客と爲りて、其の旅行も已に倦怠を生ず、而も南越は是より尚茫茫たるにあるをや、

永絶煙塘に臥す、蕭條たり天の一方、
秋風淮水落ち、寒夜楚歌長し、
宿莽中土にあらず、鱸魚豈我が郷ならんや、
孤舟行已に倦む、南越尚茫茫、

【餘論】此の五律二首も、孫逖が詩なりとの說もあり、『右丞集』にも行邁の詩少からず、然れども南越まで旅行したること『本傳』に記載なし、是の故に其の眞僞判然せず、蓋し五律として字法句法、整正したる所見るべきなり、

下京口埭夜行

孤帆度綠氛。寒浦落紅曛。
江樹朝來出。吳歌夜漸聞。
南溟接潮水。北斗近鄉雲。
行役從茲去。歸情入雁羣。

京口埭を下りて夜行

孤帆綠氛を度り、寒浦紅曛落つ、
江樹朝來出で、吳歌夜漸く聞く、
南溟潮水に接し、北斗鄉雲に近し、
行役茲より去りて、歸情雁羣に入る、

【注解】京口埭、『唐書』地理志に、潤州丹徒縣有京口埭とあり、埭は堰と義同じ、往來者の通行稅を徵する所とす、

【大意】孤舟一帆にて、兩岸の樹色が綠氛の間を度る、而して寒浦を見れば、已に夕陽が落ちんとして居る、朝來は江樹の出づるを見て、夜間には吳歌を聞く、南溟は潮水に接して茫茫たるを見、北斗は鄉雲に近くして漠漠たり、我が行役は、茲より後、殷殷歸途に向ふを以て雁羣が度る邊に情が飛ぶ、

【餘論】此の詩は前半、隔句對として讀むべし、孤帆度る時は朝來出なり、寒浦落は夜漸開なり、四十字、字字皆佳なるを覺ゆ、

山行遇雨　　山行雨に遇ふ

驟雨晝氛氳。空天望不分。　驟雨晝氣氳、空天望み分たず、
暗山唯覺電。窮海但生雲。　暗山唯電を覺え、窮海但雲を生ず、
涉澗猜行潦。緣崖畏宿氛。　澗を涉りて行潦を猜み、崖に緣りて宿氣を畏る、
夜來江月霽。棹唱此中聞。　夜來江月霽れ、棹唱此の中に聞く、

【注解】猜ば猜疑、猜慎と成語して「ウラミオソル」なり、行潦、霖雨と殆んど同義、宿氛、氛ば氛氣と成語して、氛ば氣なり、氣ば氣なり、

【大意】晴日ならんと思うて山行すれば、忽ち雨が來りて晝も亦陰鬱の氣が盛んに發す、空天を一望すれば、何物も分つ能はず、暗色を呈する山、唯電火の閃閃たるを覺ゆ、窮絶なる東海の方面は、但雲の生ずるを見るのみ、澗を涉るときは、尤も行潦を猜み、懸崖に緣りて行くときは最も宿氣あるを畏る、然るに夜來卽ち昨夕は江月霽れて、扁舟棹唱の聲が此の中より出で來るを聞きしに、

【餘論】前首と續きて旅行中の詩、右丞が眞に旅行したるものなるや、明白ならざるは前首と同じ、詩としては別に議論すべき所なし、氣が複字あるのみ、

夜到潤州　　夜潤州に到る

夜入丹陽郡。天高氣象秋。　夜丹陽郡に入る、天高うして氣象秋なり、
海隅雲漢轉。江畔火星流。　海隅雲漢轉じ、江畔火星流る、
城郭傳金柝。閭閻閉綠洲。　城郭金柝を傳へ、閭閻綠洲閉づ、
客行凡幾夜。新月再如鉤。　客行凡そ幾夜、新月再び鉤の如し、

【注解】潤州、『唐書』『地理志』に、江南道に潤州丹陽郡あり、武德三年、江都郡の延陵縣の地を以て置く、潤浦を取りて州名とす、金柝、顏延年の詩に、臥何金柝聲、起餐亭燧煙とあり、柝に金柝と木柝とあり、之を擊ちて夜を警し、又時を報ずるなり、

【大意】丹陽郡に入りし時は正に夜分なり、天は高くして氣象は秋の瀟爽を示す、海隅を見れば、雲漢の轉ずるあり、江畔を看れば、火星の流るるあり、城郭には夜警を爲して金柝を鳴らすものあり、閭閻は綠洲に閉じて、水國の情致あり、我客行してより凡そ幾夜を經たる、新月は再び鉤の如くに出づ、

冬夜寓直麟閣

直事披三省重關祕七門。
廣庭憐雪淨深屋喜爐溫。
月幌花虛馥風牕竹暗喧。
東山白雲意茲夕寄琴言。

冬夜麟閣に寓直す

直事三省を披き、重關七門を祕す、
廣庭雪の淨きを憐れみ、深屋爐の溫きを喜ぶ、
月幌花虛しく馥しく、風牕竹暗に喧し、
東山白雲の意、茲の夕琴言に寄す、

【注解】三省、中書省と、門下省と尙書省なり、七門、『後漢書』「百官志」に、宮掖の門、每門に司馬一人あり之を主る、千石に比す、南宮南屯司馬は、平城門を主る、北宮蒼龍司馬は東門、玄武司馬は玄武門、北屯司馬は北門、北宮朱雀司馬は南掖門、東明司馬は東門、期平司馬は北門を主る、凡そ七門とあり、月幌、幌は帷幔、卽ち「トバリ」なり、書幌、文幌などの語もあり、

【大意】宿直の事は三省皆之を爲す、宮禁の重關は、七門を嚴重に祕鎖する、而して廣き宮庭は雪が一面にて、其の淨きは愛憐すべく、又深屋の中は爐火の溫きこと、良に以て喜ぶべし、雪後の月は幌に當つて、花氣虛しく馥ばしく、風は牕を打つて竹聲が暗に喧し、東山に歸り、白雲に對して臥せんと欲する意、茲の夕、閣中に於て、其の意を琴言に寄託する、

【餘論】麟閣は、則天武后が周の天授元年に、祕書省を改めて麟閣と爲し、既にして五六年後、神龍の初、舊の祕書省と爲し、經籍圖書を掌らしむ、然らば、此の名の有りしは、右丞が生れざる前に屬す、生れざるもの、何ぞ宿直するを得ん、是の故に『文苑英華』は作者宋之問と爲す、淸の松谷も亦宋が作とす、案ずるに詩人、題を設く、往往、舊に依り、現在の名を用ひざるものあり、一概に論ずべからざるも、則天は唐の正統にあらず、其の正統にあらざる人の稱したる語を右丞が之を用ふるは、聊か不審と思へる點もあり、『唐詩品彙』に準じて此に錄したるも、其の眞僞は判ずる能はず、或は松谷說の宋之問が作と爲す、當れるか、

賦得秋日懸淸光

秋日懸淸光を賦し得たり

寥廓涼天靜晶明白日秋。
圓光含萬象碎影入閒流。
迴與青冥合遙同江甸浮。
晝陰殊衆木斜影下危樓。
宋玉登高怨張衡望遠愁。
餘暉如可託雲路豈悠悠。

寥廓として涼天靜かなり、晶明にして白日秋なり、
圓光萬象を含み、碎影閒流に入る、
迴かに青冥と合し、遙かに江甸と同じく浮ぶ、
晝陰衆木に殊なり、斜影危樓に下る、
宋玉高きに登りて怨み、張衡遠きを望んで愁ふ、
餘暉如し託すべくんば、雲路豈悠悠ならん、

【注解】寥廓、『楚辭遠游』に上寥廓而無ㇾ天とあり、虛空を謂ふ、江甸、『宋書蔡思話傳』に、扶ㇾ順沿ㇾ流、席ㇾ卷江甸ㇾとあり、宋

王、楚の宋玉が「九辯」に、悲哉秋之爲レ氣也、蕭瑟兮、草木搖落而變衰、憭慄兮、若レ在レ遠行、登レ山臨レ水兮送レ將レ歸とあり、蘇衡、漢の蘇衡が「四愁詩」に、側レ身東望涕霑レ翰、側レ身南望涕霑レ鞶、側レ身西望涕霑レ衾、側レ身北望涕霑レ巾の句あり、

【大意】秋八月の涼天は窒廓として、信に靜寂なり、窒廓なるが故に晶明なり、晶明なるが故に白日の清秋なるを知る、日輪は圓光なるが上に萬象をも含む、其の日輪の碎影は閒流に入りて流るるを見る、又高くして迴なるは青冥と合し、下くして遙なるは江甸と浮ぶ、而して午日の陰は紅樹青樹皆其の色を殊にし、晚日の影は危樓の邊に下る、楚の宋玉は高きに登りて秋を怨み、漢の張衡は遠きを望んで秋を愁ふ、餘暉に如し我が意を託すとせば、雲路は悠悠たりと稱するも、我豈愁愁と思はんや、

【餘論】月を詠ずる詩は漢魏以後頗る多し、日を詠ずる詩は極めて少なしとす、是の詩は秋日懸清光の句を題と爲し、以て秋日の特長を賦得する、六韻排律の正法『唐詩類苑』に右丞の詩と爲す、信ずべきに似たり、

山中　山中

荆溪白石出、天寒紅葉稀。　荆溪白石出で、天寒うして紅葉稀なり、
山路元無レ雨、空翠濕人衣。　山路元雨なきも、空翠人衣を濕ほす、

【注解】荆溪、『長安志』に、荆谷水、一名荆溪、來レ自レ藍田縣一、至レ藍鄠一、入レ萬年縣界一、西流二十里、出レ谷至レ平川一、合レ藍谷採谷石門水一、爲レ荆谷水一、一名藍水とあり、

【大意】荆溪は白石多く露出し、天寒きを以て紅葉も稀疎と爲る、山路を行く雨に値はざるも、空翠が自然に人衣を濕ほすを覺ゆ、

【餘論】宋の『冷齋夜話』に、吾弟の超然、喜んで詩を論ず、其の人と爲り純至、風味あり、嘗て曰く、陳叔寶、絕えて肺腸なし、然れども詩語警絕のものあり、午醉醒來レ晚、無レ人夢自驚、夕陽如レ有レ意、偏傍二小窗一明、王摩詰、溪清白石出、天寒紅葉稀、山路元無レ雨、空翠濕二人衣一、此皆天趣を得たり、予之に問うて曰く、句法固より佳、然れども何を以て其の天趣を識る、超然曰く、能く蕭何か韓信を識る所以を言へば、則ち天趣と言ふべし、余竟に詰る能はず、曰く、超然なかりせば、誰か之を知らん、蘇東坡曰く、藍溪白石出、玉川紅葉稀、山路元無レ雨、空翠濕二人衣一、此摩詰之詩也、或曰非也、好事者、以補二摩詰之遺一、要するに眞僞判じ難きも、右丞の詩宗に背かざる詩、右丞の作と見るも、何の徑庭か之有らん、

從軍行　二首　從軍行　二首

戈甲從軍久、風雲識陣難。　戈甲從軍久し、風雲識陣難し、

今朝拜韓信。計日斬成安。　今朝韓信を拜す、計日成安を斬らん、

【注解】拜韓信、『漢書高帝紀』に、漢王齋戒、設壇場、拜韓信、爲大將軍、とあり、計日、『魏志』に、司馬懿、臨危制變、食公孫淵、可計日而待也とあり、斬成安、『史記淮陰侯傳』を案ずるに、韓信と張耳と兵數萬を以て、東して井陘に下り、趙を擊たんと欲す、趙王成安君、漢兵の襲ほんとするを聞き、兵を井陘口に集め、二十萬と號す、韓信、兵を引きて遂に下る、未だ井陘に至らずして止舍す、夜半に輕騎二千を發し、人人をして一赤幟を持せしめ、間道、山に依つて、趙軍を望ましむ、誡めて曰く、趙、我が走るを見ば、必ず壁を空しうして我を逐はん、若し疾く趙壁に入らば、趙幟を拔き、漢の赤幟を立てよ、軍吏に謂つて曰く、趙已に優地に據りて、壁を爲る、且彼未だ吾大將の旗鼓を見ず、未だ敢て前行を擊たず、吾が旦暮に至りて還るを恐る、信、乃ち萬人を先行せしめ、水を背にして陣す、趙軍望見し大に笑ふ、平旦、信、大將の旗鼓を建て、鼓行して井陘口を出づ、趙、壁を開きて之を擊ち、大戰良久し、是に於て、信と張耳と佯ばり旗鼓を棄て、水上の軍に走る、水上の軍開きて之を入る、復疾戰す、趙果して壁を空しうして、漢の鼓旗を爭ひ、信と張耳を逐ふ、信と張耳、已に水上の軍に入る、軍皆殊死して戰ふ、敗るべからず、信が出す所の奇兵二千人、共に趙の壁を空しうして利を逐ふを候ひ、則ち馳せて趙壁に入り、皆、趙旗を拔き、漢の赤幟二千を立つ、趙軍已に誇たず、信等を得ること能はず、壁に還歸せんと欲す、壁皆漢の赤幟、而して大に驚き、以爲らく、漢皆已に趙王の將を得と、兵遂に亂れて逃走す、趙將、之を斬ると雖も、禁ずる能はず、是に於て漢兵夾擊し、大に趙軍を破り、成安君を泜水の上に斬り、趙王歇を禽にす、

【大意】戈を持ち甲を著けて、軍中に從征すること久し、而も風雲の氣を察し、識陣することは至難なり、漢の天子は今朝韓信を拜し、大將軍と爲したると聞く、然らば日を計へて成安を斬ること易易たらん、

燕頷多奇相。狼頭敢犯邊。　燕頷奇相多し、狼頭敢て邊を犯さんや、

寄言班定遠。正是立功年。　言を寄す班定遠、正に是功を立つるの年、

【注解】燕頷、頷は「アゴ」なり、燕頷は面色の黄なるを謂ふ、『後漢書』に、相者が班超を相して曰く、宜しく萬里の外に封侯たるべしと、超、其の故を問ふ、相者曰く、燕頷にして虎頸、飛んで肉を食ふ、此れ萬里侯の相なり、超、西域五十餘國を征して、定遠侯と爲る、狼頭、『北史』を案ずるに、突厥は其の先西海の右に居り、獨り部落を爲す、蓋し匈奴の別種族とす、姓阿史那氏、後、鄰國の破る所と爲り、盡く其の族を滅す、一兒あり、年十歲餘なり、兵士、其の小なるを憐み、殺すに忍びず、乃ち足を刖り、其の臀を斷ち、草澤の中に棄つ、牝狼あり、肉を以て之を餌ふ、長ずるに及んで狼と交合し、遂に孕めるあり、彼の王、此の兒尚在りと聞きて、召れて遣り之を殺さしむ、使者、狼側に在るを見、并せて狼をも殺さんとす、時に神物有るが若く、狼を西海の東に投ず、高昌國の西北の山に落つ、山に洞穴あり、狼、其の中に匿る、遂に十男を生む、十男長じて各の一姓を爲す、阿史那卽ち其の一なり、最も賢、遂に君長と爲る、故に牙門、狼頭纛を建て、本を忘れざることを示すなり、

【大意】大將の狀貌は、燕頷にして奇相なり、之を畏れて塞外の胡人等、邊方を犯す能はず、我は言を寄す、彼の定遠侯に、功を立つるは正しく是、此の年に在りと、

【餘論】此の二首、或は王維詩とし、或は王涯詩とし、傳ふる所の本相半ばす、記して疑を存す、

游春曲　二首　　游春の曲　二首

萬樹江邊杏。新開一夜風。　萬樹江邊の杏、新に開く一夜の風、

滿園深淺色。照在綠波中。　滿園深淺の色、照して綠波の中に在り、

【大意】江邊に萬樹の杏あり、只今新に花が一夜の風に開く、深色もあり、淺色もあり、滿園皆觀るべし、其の色は映照して綠池の波中にあり、

上苑無窮樹。花開次第新。　上苑無窮の樹、花開きて次第に新なり、

香車與絲騎。風靜亦生塵。　香車と絲騎と、風靜かにして亦塵を生ず、

【大意】上林苑に開く多くの杏樹は、一花落ち、一花開き、次第次第に新なり、香車に乘りて來る美人、絲騎にて來る公子、紛紛として斷えざるが故に、風靜かなるも路自から塵埃を生ず、

相思

紅豆生南國。秋來發幾枝。　紅豆南國に生じ、秋來幾枝發く、

勸君多採擷。此物最相思。　君に勸む多く採擷せよ、此の物最も相思、

【注解】紅豆。嶺南に多く產す、『玄眼餘』に、豆圓にして紅なるもの、世呼んで相思子と爲す、紅豆の異名なり、其の木斜に之を斫れば則ち文あり、彈博局及び琵琶槽を造るべし、其の樹、大株にして白枝、葉は槐に似、其の花は皂莢花と殊ならず、其の子は豌豆の若く、美中に處る、通身皆紅なり、李善曰く、其の實は珊瑚の如し、淸の趙松谷は『雲溪友議』を引きて曰く、明皇、峨山に幸す、百官皆宣辱す、李龜年、奔りて江潭に迫る、杜甫、詩を以て贈る、曰く、岐王宅裏尋常見、崔九堂前幾度聞、正値江南好風景、落花時節又逢君、龜年曾て湘中採訪使が筵上に於て唱ふ、紅豆生南國、秋來發幾枝、勸君多採擷、此物最相思、又曰く、淸風明月苦相思、蕭子良が或十載餘、征人去日殷勤囑、歸雁來時數附書、此辭皆王右丞が製する所、今に至るまで梨園焉を唱ふ、歌ひ闋りて合座、南面を望んで愴然たらざるは莫し、淸潭案ずるに、今、唐の范攄の『雲溪友議』を讀む、曾て此の事あらず、或は孟啓の『本事詩』ならんかと思うて之を問す、『本事詩』にも此の事無し、蓋し此の事は有りしならんも、『雲溪友議』と他の本とを誤りて記憶したるものならん、後賢の是正を待つ、

【大意】紅豆は南國に多く生ず、此の花は秋日に開くが、今幾枝開きたるや、君に勸む、開きたるときは多く採擷し玉へ、此の物は相思と稱するから、人を思ふに最も適切である、

【餘論】此の詩、所謂筆を把りて直ちに成りたるもの、千精萬鍊のものにはあらず、而も餘情餘韻、言外に在り、梨園の唱ふる所以、知るべきなり、

太平樂　二首

風俗今和厚。君王在穆淸。　風俗今和厚なり、君王穆淸に在り、

行看探花曲。盡是泰階平。　行いて看る探花の曲、盡く是泰階平か、

【注解】太平樂、『樂府詩集』に、太平樂商調曲也とあり、五音で言へば、宮商角徵羽の第二の商音、清く澄む調子にて歌ふものなり、穆清、『史記』に、漢興以來、至二明天子一、獲二符瑞一、迺封禪、改二正朔一、易二服色一、受二命於穆清一とあり、穆は美なり、天子に美德ありて、敎化清むなり、泰階平、李善曰く、泰階は天の三階なり、上階の上星は男主と爲し、下星は女主と爲し、中階の上星は諸侯三公と爲し、下星は卿大夫と爲し、下階の上星は士と爲し、下星は庶人と爲す、三階平かなれば、則ち陰陽和し、風雨時あり、歲大に登り、民人息ふ、天下平かなり、是を太平と謂ふ、

【大意】下に於ては、風俗が和厚、上に於ては君王が穆清、行いて探花の曲を看れば、盡く是れ泰階が平かなるを知る、

聖德超二千古一。皇威靜二四方一。　聖德千古に超え、皇威四方靜なり、
蒼生今息レ戰。無事覺二時長一。　蒼生今戰を息む、無事時の長きを覺ゆ、

【大意】天子の德は、千古に超絕す、知るべし皇威に依りて四方が靜逸なることを、人民は今戰爭を息めて、無事にして時の長きを覺ゆ、

【餘論】此の太平樂は、太原郭茂倩の『樂府詩集』に、右丞の作として載す、是れ信ずべし、「唐人萬首絕句」に王涯作と爲すは、吾人、信せず、

送春辭　送春の辭

日日人空老。年年春更歸。　日日人空しく老い、年年春更に歸る、
相歡在二尊酒一。不用惜二花飛一。　相歡ぶこと尊酒に在り、用ひず花の飛ぶを惜むを、

【大意】今日昨日と人間は老に赴く、去年も來年も、春は更に來歸する、乃ち老を愁ふるも詮無し、相歡んで尊酒を斟むに在り、花の飛散するを惜むの用なし、

書レ事　事を書す

輕陰閣小雨。深院晝慵開。　輕陰閣小雨、深院晝開くに慵し、
坐看蒼苔色。欲レ上二人衣一來。　坐して看る蒼苔の色、人衣に上り來らんと欲す、

【大意】天色輕陰にして、閣には小雨が降る、深院は白晝にも閉ぢて開かず、堂中に坐して庭上蒼苔の色益す濃かなるを看る、其の苔色が殆んど人の衣に上らんとするの狀あり、

【餘論】『詩人玉屑』に、王維書レ事云、輕陰閣小雨、深院晝慵レ開、坐看蒼苔色、欲レ上二人衣一來、舒王云、若耶溪上踏二蒓苔一、興盡張レ帆載レ酒廻、汀草岸花渾不レ見、青山無數逐レ人來、兩詩皆含二不盡之

意、子由謂之不帶聲色とあり、明の『楊升菴詩話』に、王摩詰の詩、今傳ふる所、僅かに六卷、輕陰閣の一首、洪覺範の『天厨禁臠』に見ゆ、而して本集載せず、則ち知る其の詩遺落多きを、今謂ふ之を吾人の集に見るも、其の集に記し置くもあり、又人に與へて自集に載するを忘るるものもあり、一概に本集に無きものは、其の人の作にあらずと斷ずるを得ず、升菴の說、眞に同感なり、

塞上曲　二首

天驕遠塞行。出鞘寶刀鳴。
定是酬恩日。今朝覺命輕。

塞上の曲　二首

天驕遠塞に行く、鞘を出でて寶刀鳴る、
定んで是酬恩の日、今朝命の輕きを覺ゆ、

【大意】天驕の住する遠塞に向つて行き、鞘を出でて寶刀が鳴る、漢の天子の爲め、定んで是恩に酬ゆる日ならん、之を思へば、今朝は我が生命が輕くなりたるを覺ゆ、

塞虜常爲敵。邊風已報秋。
平生多志氣。箭底覓封侯。

塞虜常に敵を爲す、邊風已に秋を報ず、
平生志氣多し、箭底封侯を覓む、

【大意】塞虜の人間は、常に漢の敵を爲す、今や邊土の風は已に天高きの清秋なり、平生の志氣は、是の時に於て發し、一箭の底下に、軍功を樹てて封侯を覓むべきなり、

【餘論】此の二首も『樂府詩集』を信じて右丞の作と心得るなり、

隴上行

負羽到邊州。鳴笳度隴頭。
雲黃知塞近。草白見邊秋。

隴上行

羽を負うて邊州に到り、笳を鳴らして隴頭を度る、
雲黃にして塞の近きを知り、草白くして邊秋を見る、

【注解】隴上行、古樂府に「隴上歌」あり、『晉書』を案ずるに、劉曜、陳安を隴城に圍む、安敗れ、南隴中に走る、曜、游擊平先等をして之を追はしめ、安を澗曲に斬る、安死す、隴上、之が歌を爲る、曜聞いて嘉傷し、樂府に命じて之を歌はしむ、今日の甘肅省一帶、總て是れ隴の地なり、負羽、羽箭を背に負ふなり、

【大意】背に羽を負うて邊州に到る、笳を鳴らして隴頭を度る、其の雲色の黃なるを認めて、乃ち隴塞に近づきたるを知り、其の草色の白きを認めて、乃ち邊土は已に秋なるを知る、

【餘論】唐以前の樂府に隴上歌と隴西行とあり、而も意味に於て大差あるにあらず、二十字、景情一合、長詩邊塞を歌ふもの、唯此の意を敷延するのみ、

閨人贈遠　五首

閨人遠きに贈る　五首

花明綺陌春。柳拂御溝新。　花は明らかなり綺陌の春、柳は御溝を拂うて新なり、
爲報遼陽客。流芳不待人。　爲めに報ず遼陽の客、流芳人を待たず、

【注解】閨人、閨中の婦人なり、贈遠、贈示遠夫なり、遼陽、遼東郡の遼陽縣、

【大意】百花鮮明にして、綺陌皆春なるを知る、楊柳の枝は御溝を拂うて新なり、妾は爲めに報知する、遼陽に征戍する我が良人に、今此の如く佳き春芳も、次第に流れ去りて、人の遠方より歸り來りて賞するを待たず、

遠戍功名薄。幽閨年貌傷。　遠戍にありて功名薄く、幽閨にありて年貌傷る、
妝成對春樹。不語淚千行。　妝成りて春樹に對し、語らずして淚千行、

【大意】遼陽の遠地に征戍するも、功名は極めて薄く、幽閨を守る妾は年を逐うて容貌は衰傷する、妝成りて春樹に對し、語るの人無し、故に語らず、唯淚の千行あるのみ、

啼鶯綠樹深。語燕雕梁晚。　啼鶯綠樹深く、語燕雕梁晚る、
不省出門行。沙場知近遠。　省せずして門を出でて行く、沙場知る近きや遠きや、

【大意】啼鶯は關關、綠樹は陰深し、語燕は喃喃、雕梁は晩日に逼る、燕の語り、鶯の啼くも、省顧せずして、門を出でて行く、沙場は此を去つて、近きや遠きや、

形影一朝別。煙波千里分。　形影一朝別れ、煙波千里分る、
君看望君處。秖是起行雲。　君看よ君を望む處、秖是行雲起る、

【大意】君と妾と形影が一朝離別して、今日は煙波に千里の分あり、君も看よ、妾が君を望む處を、君を望むも見ず、唯行雲の起るのみ、

洞房今夜月。如練復如霜。　洞房今夜の月、練る如く復霜の如し、
爲照離人恨。亭亭到曉光。　爲めに照す離人の恨、亭亭として曉光に到る、

【注解】洞房、閨房と同じ、閨房は深くして洞の如くなればなり、亭亭、謝靈運の詩、亭亭曉月映とあり、謝惠連の詩、亭亭映江月とあり、李善曰く、亭亭は遐なる貌、呂向曰く、亭亭は月明の貌、月明の貌を以て善とす、

【大意】洞房に在りて、今夜の月を觀る、月の光暉は練るが如く、復霜の如くなり、其の月は爲めに照す離人の別恨を、耐へず、亭亭として曉光に到るまで、

【餘論】五首皆閨婦が情思を敍して、語語柔婉にして、而も褻ならず、五言の上乘と謂ふ可し、

過友人莊

友人の莊を過ぐ

故人具雞黍。邀我至田家。　故人雞黍を具へ、我を邀へて田家に至る、

綠樹邨邊合。青山郭外斜。　綠樹邨邊に合し、青山郭外に斜なり、

【大意】舊故なる友人は、我が爲めに雞黍を具へ、我を邀へて以て田家に至る、田家の狀は如何、綠樹は林を成して邨邊に合し、青山は圍を成して、郭外に斜なり、

【餘論】此の詩は『孟浩然集』に五律として存し、『唐人萬首絶句』に右丞作としてあり、是非詳ならず、浩然集に存するもの下の如し、故人具雞黍、邀我至田家、綠樹邨邊合、青山郭外斜、開筵面場圃、把酒話桑麻、待到重陽日、還來就菊花、

感興

感興

禾黍不艷陽。競栽桃李春。　禾黍艷陽ならず、競うて栽う桃李の春、

翻令力畊者。半作賣花人。　翻つて力畊の者をして、半は花を賣る人と作らしむ、

【大意】禾や黍は如何に秀づるも、艷陽の時節を敗ふに足らず、故に田家は競うて、桃李の春を栽う、乃ち禾黍に於て力畊する人が、其の本業を舍てて、花を賣る人と作る、

【餘論】田舍の本業禾黍に在るは論勿し、然れども副業として、或は魚を賣り、或は花を賣り、或は蠶を養ひ、以て生活の補助と爲す、古今同一なり、右丞は其の事に於て感ずるありて、此を賦せしものならん、蓋し表面田家に在りて、側面は他に何等か諷する詩なるやも知らず、恐らくは他に諷する所ありて作れるものならん、

游春辭　二首

游春の辭　二首

曲江絲柳變煙條。　曲江の絲柳煙條變ず、

寒谷冰隨暖氣銷。　寒谷の冰は暖氣に隨つて銷す、

纔見春光生綺陌。　纔かに春光の綺陌に生ずるを見る、

【注解】綺陌、樂の簡文帝の詩、三條綺陌平とあり、雲間、雲門黃帝樂、大間虞舜樂、陸雲の詩、鬱蘭二高岡、耳想雲間、曹毗の宗廟歌詩に、

已聞清樂動雲韶。　已に聞く清樂の雲韶動くを、

【大意】曲江を繞るの絲柳は、冬より春に來りて煙條全く變じ、寒谷を鎖したる冰も、已に春暖に逢うて全く銷融す、初めて春光の綺陌に生ずるを見るを思ふに、早已に清樂は雲門や、大韶の響きが動く、

一　憺怕雲韶、盡美盡善とあり、

經過柳陌與桃谿。　經過す柳陌と桃谿と、

尋逐春光著處迷。　春光を尋逐して著處迷ふ、

鳥度時時衝絮起。　鳥度りて時時絮を衝いて起り、

花繁滾滾壓枝低。　花繁くして滾滾枝を壓して低る、

【大意】柳陌を經過し、又桃谿を經過し、東西に春光を尋逐して、著處に迷ふ、但し觀るに宜しきものは、鳥が度り時時柳絮を衝いて起らしめ、花は繁くして滾滾と桃枝を壓して低るるに在り、

【餘論】此の二首も、右丞集に載する本と、載せざる本あり、或は之を王涯の作とす、涯と維と文字誤り易し、今是非を判ずる能はず、

秋思　二首

網軒涼吹動輕衣。
夜聽長生玉漏稀。
月渡天河光轉濕。
鵲驚秋樹葉頻飛。

【大意】網軒に入るの涼風は、自から輕衣を動かす、夜坐して、時時聽く玉漏の聲を、月光は天河を渡り、其の光は濕ひを帶ぶ、鵲の驚いて飛ぶは、秋樹の葉が頻りに飛ぶに因る、

宮連太液見滄波。
暑氣微消秋意多。
一夜輕風蘋末起。
露珠翻盡滿池荷。

【注解】秋思、字の如く秋に對する感傷を敍する題なるが、「秋懷」と異なる點は多く女子に係る、或は宮中の女子、或は征夫と別れたる少婦、「秋懷」と「秋思」、唐賢の集を讀む者は、自から男女の區別あるを知らん、網軒、梁の沈休文の詩に網軒映朱轂とあり、張銑曰く、軒屋繪也、以網及珠、飾而飾之、長生、意義明ならず、或は考ふ玉衡の名かと、

【注解】太液、池の名、陝西長安縣の西北、漢の武帝、建章宮を作り、其の北に大池瀰臺を治す、名けて太液池と曰ふ、中に蓬萊と方丈と瀛州とあり、以て海中の神山に象どる、昭帝の時、黃鵠、建章宮太液池中に

宮は太液に連なりて滄波を見る、暑氣微しく消して秋意多し、一夜輕風蘋末に起り、露珠翻り盡く滿池の荷、

下る、公卿、毒を上ると『史記』及び『漢書』にあり、蘋末、宋玉が「風賦」に夫風生二子地一、起二青蘋之末一とあり、

【大意】建章宮は太液池に連りて、時時滄波の起るを見る、此の滄波を看れば、暑氣の微消して、秋意の多きを覺ゆ、而して一夜輕風が蘋末に起るや、露が珠玉の如く、滿池の蓮荷に翻り盡くるを見る、

【餘論】題して秋思と曰ふも、亦宮詞と改むるも妨げ無しと思ふなり、玉漏と謂ひ、宮蓮太液と謂ひ、普遍の秋思とは何等の關係無き文字なり、余故に謂ふ、右丞が宮女に代りて秋思を歌ふものなりと、

秋夜曲　二首

秋夜の曲　二首

丁丁漏水夜何長。　丁丁たる漏水夜何ぞ長き、
漫漫輕陰露月光。　漫漫たる輕陰月光を露はす、
秋逼暗蟲通夕響。　秋逼りて暗蟲通夕響く、
寒衣未寄莫飛霜。　寒衣未だ寄せず霜を飛ばす莫かれ、

【大意】漏水の滴る音は丁丁として、秋夜は何ぞ其れ長きや、輕陰の漫漫たる處に、時に月光の露はるるを見る、秋氣は人に逼る、其の媒介者は暗蟲が、通夕唧唧と響くが爲めなり、然るに未だ遠人に向つて、寒衣即ち防寒服を寄せず、故に暫くは霜を飛ばすことなかれよ、

桂魄初生秋露微。　桂魄初めて生じ秋露微なり、
輕羅已薄未更衣。　輕羅已に薄きも未だ衣を更めず、
銀箏夜久殷勤弄。　銀箏夜久しく殷勤に弄す、
心怯空房不忍歸。　心空房を怯れて歸るに忍びず、

【大意】桂魄即ち月光が初めて嶺に生じ、秋露は猶ほ多からず、輕羅即ち夏日の服は、冷に堪へざるも、未だ秋衣と更めず、殷勤に銀箏を吹弄して、夜の久しきを厭はず、而して室房に歸らざるは、語るの人無きを以て歸らざるなり、

【餘論】此の二首、右丞作と、王涯作と、張仲素作との說あり、我が津阪東陽の『絕句類選』は『唐詩紀事』に準じて張仲素と爲す、唐賢の絕句、其の調諧家太だしく異ならず、是の故に甲乙彼此、斷定すること容易ならず、古人已に判知せず、況んや後人をや、

從軍辭

髦頭夜落捷書飛。
來奏軍門著賜衣。
白馬將軍頻破敵。
黃龍戍卒幾時歸。

髦頭夜落ち捷書飛ぶ、
來り奏す軍門著賜衣、
白馬の將軍頻りに敵を破る、
黃龍の戍卒幾時か歸らん、

【注解】髦頭、『史記天官書』に、鼻を髦頭と曰ふ、胡星なり、『漢書』には旄頭に作る、昴宿の光、搖動すれば、胡兵大に起るとの傳說あり、白馬將軍、『三國志』に、龐德、常に白馬に乘る、人、之を白馬將軍と謂ひ、皆之を憚る、黃龍、地名、慕容燕の都、宋に北燕と號す、馮氏、黃龍國と爲す、契丹は潢河の南、黃龍の北に居る、皆此を指す、今の奉天開原以北、及び吉林金撫、內蒙古東北の境、皆其の歸地なり、

【大意】髦頭星が夜落ちたるを見て、漢軍が大捷したる羽書の飛ぶを知る、軍使來り其の事を軍門に奏す、乃ち賜ふ所の鐵衣を著けし德と言ふ、而も聞く白馬の將軍は頻りに敵を破ると、未だ知らず、黃龍の戍卒は幾時歸るかを、

【餘論】此の詩、『樂府詩集』に右丞作とあり、『萬首唐人絕句』に王涯作とあり、是非を判じ難し、三四の句、白馬將軍と黃龍戍卒と自然の對を爲し、自然の巧を爲す、

塞下曲　二首

塞下の曲　二首

辛勤幾出黃花戍。
迢遞初隨細柳營。
塞晚每愁殘月苦。
邊愁更逐斷蓬驚。

辛勤幾たびか出づ黃花戍、
迢遞初めて隨ふ細柳營、
塞晚每に愁ふ殘月の苦ゆるに、
邊愁更に斷蓬を逐うて驚く、

【注解】黃花戍、『唐書地理志』に、河北道、平州北平郡有黃花戍とあり、

【大意】國家の爲め辛勤を厭はず、幾度か黃花戍の塞に出づ、今は迢遞初めて細柳營に屬する身と爲る、塞上の歲晚は每に愁ふ、殘月の淸苦なるを、之に添ふるに邊愁は更に斷蓬の倚る所無きを逐うて驚く、

年少辭家從冠軍。
金裝寶劍去邀勳。
不知馬骨傷寒水。
唯見龍城起暮雲。

年少家を辭して冠軍に從ふ、
金裝寶劍去つて勳を邀ふ、
知らず馬骨寒水に傷るるを、
唯見る龍城暮雲起るを、

【注解】金裝、梁の簡文帝の詩に閒樹識金裝とあり、馬骨、漢の陳琳が詩に、飲馬長城窟、水寒傷馬骨とあり、龍城、匈奴の諸長大會し、祭天の處を謂ふ、『史記』「匈奴傳」に、歲正月、諸長會單于庭祠、五月、大會龍城祭其先天地鬼神とあり、崔浩云ふ、西方の胡、皆龍神に事ふ、故に大會處を名けて龍城と爲す、今の熱河朝陽縣治、前燕、後燕、北燕、皆此に都を置く、

【大意】家を辭して冠軍に從ひ、征行せしは年少なり、而して金裝寶劍、武裝は嚴として、去つて功勳を邀へんと志す、知らず馬骨が寒水の爲めに傷らるるを、唯見る龍城の畔に、暮雲の起るを、

【餘論】從軍辭と謂ひ、塞下曲と謂ひ、字は異なるも、意義は全く同じ、此の二首、右丞作と、王涯作と爲す說あり、斷定すべからず、

平戎辭　二首

太白秋高助漢兵。
長風夜卷虜塵清。
男兒解卻腰間劍。
喜見從王道化平。

太白秋高うして漢兵を助く、
長風夜卷きて虜塵清む、
男兒解卻す腰間の劍、
喜び見る王道に從つて化平かなるを、

【大意】太白星が秋天に高きは、漢兵を助くるものの如し、長風は夜卷きて、虜塵を一掃して澄清ならしむ、從軍せし所の男兒は、皆腰間の劍を解卻して、軍裝を去りて、平服と爲る、人人喜んで見る、王道の仁に依つて敎化が平かなるを、

卷旆生風喜氣新。
早持龍節靜邊塵。
漢家天子圖麟閣。
身是當今第一人。

卷旆風を生じて喜氣新なり、
早く龍節を持して邊塵靜かなり、
漢家の天子麟閣に圖せしむ、
身は是當今第一の人、

【注解】龍節、古の使節なり、「周禮」に、山國には虎節を用ひ、澤國には龍節を用ふ、金を以て節を爲り、龍形を飾、澤國に之を用ひしむ、節は旌節なり、麟閣、麒麟閣、漢の宣帝、功臣を麒麟閣に圖す、凡そ十一人、霍光は名を記せず、曰く大司馬大將軍博陸侯、姓は霍氏、曰く衛將軍富平侯張安世、曰く車騎將軍龍頟侯韓增、曰く後將軍營平侯趙充國、曰く丞相高平侯魏相、曰く丞相博陽侯丙吉、曰く御史丈夫建平侯杜延年、曰く宗正陽成侯劉德、曰く少府梁邱賀、曰く太子太傅蕭望之、曰く典屬國蘇武、此の十一人の像を圖して、以て其の功を表はす、

【大意】卷きし旆が風を生じて、人人喜氣が新なり、大將も中將も、龍節を持し、以て邊塵を靜逸ならしむ、漢家の天子は、論功行賞、大功の有る人は麟閣に圖せらる、思ふに我は是當今第一人者であることを、

【餘論】前首は右丞と王涯と張仲素との三人の集に在り、後首は或は右丞、或は王涯、前前の如く、是非判ずべからず、

閨人春思

愁見遙空百丈絲。

閨人春思

愁へ見る遙空百丈の絲、

【注解】百丈絲、北周の庾開府の詩に、洛陽游絲百丈連、黃河春冰千

春風挽斷更傷離。　春風挽斷して更に傷離、
閒花落遍青苔地。　閒花落ちて遍し青苔の地、
盡日無人誰得知。　盡日人無く誰か知るを得ん、

「ヒキ」「ヒツイル」なり、

【大意】　游絲が百丈も高く、遙空に浮ぶを見て愁へと成る、而も春風が來りて、此の游絲を彼と此と引き斷つ、是を見て更に傷離する、中庭には閒花が落遍して、青苔の地に滿つ、盡日之を看るものは、閨人のみ、他に人無し、此の情趣を知ることを得る無し、

【餘論】　此の詩は、婦、夫と離れて、春日其の愁思を敍するなり、此の詩も右丞と王涯と張仲素との集にあり、案ずるに王涯は右丞と同じく太原の人、官も亦吏部尚書、代郡公と爲り、博學にして、詩亦高邁、右丞と混同し易きこと多し、蓋し其の人、右丞の高潔とは聊か異なる、其の人、前古の名畫を好み、左右に充積す、得べからざるものあれば、百計傾陷して以て之を取る、所謂玩物喪志の人なり、甘露の禍起るや、誅せらる、不幸、憐むべきなり、姓は固より同じ、維と涯、字畫誤り易く、而も同里、而も同じく高官、混同するも、無理ならずと思ふ、此より以後の詩も皆然り、是の故に一言記し置く所以なり、王涯の詩は『全唐詩』の卷十三にあり、

片穿とあり、和語に「カゲロフ」と稱す、陽炎、野馬とも曰ふ、晴日に蜘蛛の網の如く空中に見ゆるものなり、挽斷、挽は挽引、又挽來なり、

贈遠　二首　　遠きに贈る　二首

當年只自守空帷。　當年只自ら空帷を守る、
夢見關山覺別離。　夢に關山を見て別離を覺る、
不見鄉書傳雁足。　見ず鄉書の雁足に傳ふるを、
唯看新月吐蛾眉。　唯看る新月蛾眉を吐くを、

【注解】當年は當時と同じく、昔年、昔時を以てするが本義なり、然るに第二義として當年は本年、當時は卽時を指す、同一語を以て、古と今とに通ずるは、道理を以て判じ難きも、用例此の如きを以て、今遠かに改むべき術無し、今此の當年は卽ち現今を指すと見るべし、

【題義】　遠游して未だ歸らざる人に贈り、其の歸を待つを言はずして、而して其の歸を待つ意を含むなり、

【大意】　良人と別れて、妾は今日只自ら空帷を守るのみ、夢を見るときは、良人は關山に在り、妾は曾て別離したる時を覺る、而も鄉書の雁足に傳へて來るを實見せず、唯看る初三の新月が、蛾眉の如き形を吐くを、

厭攀楊柳臨青閣。　楊柳に攀ぢ青閣に臨むを厭ふ、
閒採芙蕖傍碧潭。　閒に芙蕖を採りて碧潭に傍ふ、

【注解】攀、攀附なり、攀登にはあらず、楊に寄るなり、青閣、江淹の詩に、朝與佳人期、日夕望青

走馬臺邊人不見。　走馬臺邊人見えず、
拂雲堆畔戰初酣。　拂雲堆畔戰初めて酣なり、

閣」とあり、芙蓉、荷花なり、走馬臺、『酉陽雜俎』に、時祖朝會、過走馬章臺街」とあり、章臺街は長安に在り、拂雲堆、『唐書地理志』に、豐州、中受降城、有拂雲堆祠、接靈州境、今日の内蒙古郡爾多斯の地とす、

【大意】楊柳に攀附し、又青閣に臨登するを厭ふ、是の故に閒に芙蓉を採りて、碧潭に傍うて歩す、而して走馬臺邊を望むも、人影は見えず、見えざるは盡く從征して、拂雲堆畔に、今正に戰鬪が酣なればなり、

獻壽辭

宮殿參差列九重。　宮殿參差として九重列す、
祥雲瑞氣捧階濃。　祥雲瑞氣階に捧げて濃かなり、
微臣欲獻唐堯壽。　微臣獻せんと欲す唐堯の壽、
遙指南山對袞龍。　遙かに南山を指して袞龍に對す、

【注解】唐堯壽、『莊子外篇天地章』に、堯、華に觀ぶ、華の封人曰く、嘻、聖人なり、請ふ聖人を祝せん、聖人をして壽ならしめん、堯曰く辭す、聖人をして富ましめん、堯曰く辭す、聖人をして男子多からしめん、堯曰く辭す、封人曰く、壽富多男子は、人の欲する所なり、女獨り欲せざるは何ぞや、堯曰く、男子多ければ則ち懼れ多し、富めば則ち事多し、壽なれば則ち辱多し、是の三つの者は、德を養ふ所以にあらず、故に辭す、封人曰く、始めや、我、女を聖人か

と以爲へり、今は然らば君子なり、天の萬民を生ずる、必ず之に職を授く、男子多くして、而して之に職を授けなば、則ち何の懼か之れあらん、富んで而して人をして之を分たしめば、則ち何の事か之れあらん、夫れ聖人は蕃居して而して羣食し、鳥行して而して彰ばるる無し、天下、道有れば、則ち物と皆昌え、天下、道無ければ、則ち修を修め閒に就く、千歲、世を厭はば、去つて而して上僊し、彼の白雲に乘じて、帝鄉に至らん、三患至るなく、身常に殘無し、則ち何の辱か之れ有らん、封人、之を去る、堯、之に隨ひて曰く、請ふ問はん、封人曰く、退かんのみ、袞龍、前に辨ぜり、

【大意】宮殿は一は高く、一は低く、參差として、九重を列せり、或は祥雲、或は瑞氣、玉階に捧げて濃かなり、微微たる小官、唐堯の壽を獻せんと欲し、彼の南山の如く高からんと、之を指し、而して以て此の袞龍に對す、

【餘論】此の詩は、何の天子の壽を頌したるや明白ならず、玄宗か肅宗かの孰れかならんと思ふ、或は假りに設けたる題目なるやも知れず、右丞と王涯と二集之を存すること前の如し、

失題

清風明月苦相思。　清風明月苦に相思ふ、
蕩子從戎十載餘。　蕩子戎に從ふ十載餘、
征人去日殷勤囑。　征人去る日殷勤に囑す、

歸雁來時數寄書。　歸雁來る時數ば書を寄せよと、

【題義】失題とあるは、其の詩を編輯する者、本の題を知らざるが故に假りに設けて曰ふ、作者自身が失題と稱する例無しと知るべし、此の詩を案するに、婦が征夫を思うての意なれば、「贈遠」と題を設けて可なるものとす、

【大意】耳に清風を聞き、目に明月を看る毎に、苦に相思を馳せざるを得ず、我が家の蕩子は戎に從つて行きて、已に十載餘を經たり、征人卽ち蕩子が此を去るの日、妾は殷勤に依囑した筈なり、其の依囑の言は、歸雁の來る時節には必ず度度音信を贈れと、

疑夢　疑夢

莫驚寵辱空憂喜。　寵辱に驚きて空しく憂喜すること莫れ、
莫計恩讎浪苦辛。　恩讎を計して浪りに苦辛すること莫れ、
黃帝孔邱何處問。　黃帝孔邱何れの處にか問はん、
安知不是夢中身。　安んぞ知らん是夢中の身ならざるを、

【大意】寵を蒙りしときは喜び、辱を受けたるときは憂ふ、此の如きことに驚くこと莫かれ、又、恩と讎とを計して、浪りに心を苦辛すること莫かれ、黃帝にも、孔邱にも、其の道理を問はんと欲するも、何處に在すやを知らず、且自分の身は安んぞ知らん、夢中の身にあらざることを、

【餘論】此の詩は、編輯人の明白ならざる『事文類聚』に出づるなり、趙松谷曰く、諸家の刻する所の右丞集、唯劉須谿が評本を最善と爲す、然れども其の中往往雜ふるに他人の作を以てす、錢起、盧象、崔興宗、諸公の賦する所の如き、皦然明白なるもの、亦其の間に亂厠す、況んや其の他をや、洪邁辯す、游春酔等三十首、王涯の所作と爲す、而して諸本儼然猶ほ集中に載す、其の詩、亦、佳麗誦すべしと雖も、之を較ぶれば、魚目混レ珠、珎玦亂レ玉、大に徑庭あり、摩詰本來の面目にあらず、『文苑英華』『雲溪友議』『冷齋夜話』『詩人玉屑』『樂府詩集』等の書の載する所の右丞の詩章、集中に載せざる所のものあり、而して別書、又、以て某某作る所と爲す、疑、定むる能はざるなり、之を存すれば其の眞を亂すを懼る、之を棄つれば、又、其の是に近きを恐る、因つて別彙して一卷と爲し、之を外編と謂ふ、以て劉氏が較する所の集內の詩にあらざるを明かにするのみ、

王右丞集　卷十五　大尾

309
65

昭和四年七月二十二日印刷
昭和四年七月二十五日發行

續國譯漢文大成 文學部 第十八帙

【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者 君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田 一八五三番 一八三八番
振替東京 一八五七二番

終